ビターブラックゴールドライフ

目白皐月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、ハッピーシュガーライフの二次創作です。

ＩＦもので、アニメ九話の終盤からのオリジナル展開です（ベースはアニメ版）

ひらたく言うと、しょうこちゃんが助かるお話です。

しょうこちゃんに生きていてほしかったので、そのための二次創作です。

あさひ×しょうこの要素があります。

目次

生じた狂い 1
泡沫の夢 3
逃亡計画 6
泡沫の夢　その二 8
ズレていく 11
空は晴れても心は晴れない 15
二人の刑事 19
それはどちらもLで始まる 24
花は心を養う 28
事件の詳細 34
世界というもの 44
物思う夜 47
朝が来ても消えない 50
新たな決意 55
判明する事実 59
夢の城は砂でできている 65
大人ではないということ 72
光の当たる道 79
差し出された手 83
ぶれない人 86
吸血鬼 89
それは決して口にできない 93
母の所在と消えるもの 96
境界線のこちらと向こう 101

苦くて甘い ―― 106
裁判 ―― 111
いつか向き合えるときに ―― 118
届かない手紙 ―― 122
遠くにありて君を想う ―― 125
後書き ―― 128

生じた狂い

失敗した、と松坂さとうは思った。

じゃあ、何がどうなれば成功になったのだ？　それはわからないけれど、とにかくこれは失敗だ。それだけは確かだ。

現在目の前に転がっているのは、少し前まで「親友」という言葉でその関係を呼んでいた少女の身体。同い年のバイト仲間。飛騨しょうこ。その彼女が、目の前の床に倒れている。後頭部から血を流し、微動だにしない……と言いたいところだが、背はゆっくりと上下している。つまり、まだ生きている。

そもそもの発端は、しおといっしょにいるところを見られたことだ。いや、見られただけなら良かった。しょうこは自分たちの姿を写真に撮った。携帯のロックの外し方を教えろと迫ったが、頑として首を縦に振ってくれなかった。

警察には行かないと言っていが、そんな言葉は信用できない。押し問答になり、さとうはつい手近にあったものをしょうこめがけて振り下ろしてしまった。

……つい？

つい、ではない。それに、大事なのはそれではない。

目の前に転がっている、親友だったものを、どうするかだ。

ざっといくつかの可能性を考える。トドメを刺して、ばらして、袋に詰めて……。いや、ダメだ。この部屋の持ち主だったお兄さんとしょうこは違う。しょうこが家に戻らなかったら、きっと騒ぎになる。実際、言っていたではないか。親が口うるさくて嫌になる、と。口うるさい親のいない自分にはしょうこの言っている意味が実感できなかったが、帰宅が遅いだけで大騒ぎする人間は、帰って来なかったらもっと大騒ぎするだろう。

同じやり方では、ダメなのだ。

しょうこの傍らに膝をつき、身体の下に手を差し込んでぐっと持ち上げる。重い。だがこの場所に転がしてはおけない。ここでは、しおの目につく。変なものを見せてしおを汚すわけにはいかない。あそ

こへ移さないと。
重い、友人だった人間の身体を引きずってさとうは部屋を歩く。行くのは、お兄さんがアトリエとして使っていた部屋。綺麗に掃除しようと思っていたけれど、なかなか汚れが落ちなくて、まだ赤黒い汚れが残っていて、だからしおには入るなと言い聞かせてある部屋だ。しおがうっかり入らないように、外からかかる鍵をつけてある。
そこへしょうこの身体を移すと、さとうは荒い息を吐いて呼吸を整えた。それからしょうこの頚動脈に指をあてる。脈動は感じられた。……死ぬほどの怪我ではなかったようだ。
でも、帰すなんてありえない。
ビニールテープを持ってきて、それでしょうこの手足を縛る。……念のため、だ。そして部屋のドアを閉じて鍵をかける。これで出て来られない。少しは時間が稼げるだろう。
さあ、これからどうする？
目を閉じてドアにもたれかかる。ここは自分たちだけの夢のお城のはずだった。でもそのお城は、砂でできていたのかもしれない。簡単に崩れてしまうもの。
いや、それで諦めるのはまだ早い。このお城がダメになっても、また別のお城をみつければいいだけ。ハッピーシュガーライフのために、なんでもすると決めたのだ。だから、そうする。
さとうは顔をあげ、静かに笑顔を作った。

泡沫の夢

ガツン、と衝撃が走って。
ふわりと、空中に浮いたような感覚があって。
気がついたときは、床が目の前に迫っていて。
その短い時間を、永遠のように感じた。
ふわふわと浮遊するような感覚。自分がどこにいるのかもわからない。断片的な映像が目の前に閃く。
長い髪の一部をシニョンにし、残りを垂らした髪型の少女。にっこりと笑っている。
「お帰りなさいませ、ご主人様。お席にご案内しますね」
てきぱきと動く動作には隙がない。席に案内し、メニューを渡して、笑顔で注文を取る。店の人気者で、彼女を目当てにくるお客さんだって多い。
そんな彼女――松坂さとうと仲良くなったのは、ほんの偶然だった。更衣室のロッカーが近くて、シフトが重なることが多くて、彼女が好きなアクセサリーが、自分の好きなものと同じだった。そこから、話すことが多くなって。いっしょにアクセサリーを買いに行こうよ、という話になって。
「あ、見て見て！　これかわいー！」
「こっちのも可愛いよ」
「わ、ほんと！　色違いもある！　ねえねえ、一個ずつ買おうよ」
彼女はピンク、自分はオレンジを選んだ。並んで会計を待つ、そんなちょっとしたことが、当時の自分にはすごく楽しくて。
他の誰とも、こんなに楽しい時間は過ごせない。
「さとうって、すごく話しやすいよね」
実際、こんなに話しやすい相手は今までいなかった。家族とも、学校の友達とも、他の誰とも違う。どんなことだって話せる。どんな内容でも、明るい笑顔を浮かべながら聞いてくれて、決して否定したりはしない。
「そうかな？」

そう言って小首を傾げる。その姿は、同性であっても見ほれてしまうぐらい可愛い。
「そうだよ。さとうみたいに話しやすい人、私、初めて会ったもん」
嬉しさにかられて、つい腕に抱きついてしまう。暖かな腕。嫌がらなかったので、密着する力を強くしてみる。
自分たちは、親友。そう思っていたのに。
亀裂が入り始めたのは、何かが食い違い始めたのは、いつからだろうか。わかっている。さとうが「もう男遊びはやめた。好きな人ができたから」と言ったときだ。
さとうが「ただひとつの愛をくれるただひとりの人」を求めているのは知っていた。本人から聞いていたからだ。自分も似たようなものだったから、それが見つかれば良いと思っていたし、面食らったけど祝福するつもりではいた。
……少し寂しかったけれど。自分にも同じときに「最愛の人」がみつかっていれば、違ったのだろうか。
でも、相手が「彼氏」なら「親友」のポジションは動かない。仲のよさを冷やかしながら、喧嘩をしたら愚痴を聞いてあげればいい。そうできるのはきっと自分だけ。それでいいのだと、思っていた。
なのに、生じる違和感。どこかがおかしい、と思ってしまう。つきあいが悪くなったのは、仕方がない。でも、親友に彼氏の紹介もしてくれないというのは、おかしいのではないだろうか。
次から次へと起こる、おかしなできごと。イケメンなのに反応がおかしいバイト仲間。憔悴した様子で、尋ね人のポスターを貼る少年。いくら電話をかけても出ないさとうの叔母さん。さとうは女の子を誘拐したとバイト仲間は言ってくる。
親友は、何か面倒なことに巻き込まれているのではないだろうか。それなら、話してほしい。少しでも力になってあげたい。手助けがしたい。
ねえ、誘拐犯だなんて、嘘だよね？　ただちょっと、話しづらいことに巻き込まれてるだけだよね？
甲斐性なしな男に引っかかって、ちょっと苦労してるだけなんだっ

て思いたかった。年端も行かない幼い女の子を、部屋に閉じ込めているだなんて思いたくなかった。

大事な親友だから、失いたくなかったのだ。踏み込もうとして、引き当てたのは、最悪な結果。得体の知れない不気味な女性。あれが彼女の血の繋がった叔母だなんて。どうして自分はあのとき、目をそらしたりしたのだろう。血のつながりなんて関係ないって、言ってあげられなかったのだろう。

ねえ、いっしょに、いたかったんだよ。ずっと隣で、たわいもない話をして、笑いあっていられれば良かったの。

思考が、とりとめもなく、浮かんでは消える。ぷくぷくと空中に浮かぶ泡のように。それは少しずつテンポを落とし、暗い闇の中へと飲み込まれて行った。

逃亡計画

物事は、迅速に運ばねばならない。

それが、さとうの出した結論だった。

しょうこの親が警察に捜索願いを出したのは確かだろうが、警察がどの程度まともに捜す気になるかどうかはわからない。親との関係がうまくいっていない高校生なら、家出したとみなされる可能性も高いだろう。

もちろん、希望的観測だけでものごとを薦めるのは危険だ。だから、さとうはこの城を捨てることにした。しおとの話し合いは難航したが、既についている。あれは大変だったが、それにより自分たちの愛はより深まったのだから結果としては良かった。さとうはそう認識している。

叔母さんとの話し合いはもっと面倒だったが、協力はとりつけられた。必要な物資を調達し、バイト先の後輩からは二人分のパスポートも手に入れた。そしてついさっきは二人きりの結婚式もあげた。何よりも幸せな、甘い時間。

さとうは小さなため息をついて、奥の部屋のドアを開けた。しおにはこちらに来るなと言ってある。これからすることを、見せるつもりはなかった。

しょうこは相変わらず、アトリエだった部屋の床に横たわっている。触れてみたところ、まだ息はあった。放置しておいた間に死んでしまうかなとも思っていたが、意外としぶといようだ。

だがどのみち、この状態なら動けまい。念のために縛ってあったが、縄はほどいておく。どういう結果になるかわからないが、マイナス要素は排除しておかなければ。

さとうはこのお城に火を着け、しょうこごと焼いてしまうつもりでいた。そのためには、しょうこの死因は焼死が望ましい。どの程度焼けるかはわからないが、万が一通報されるのが早かったりしたら、骨になるまで焼けないかもしれない。身体に、不自然な傷跡を残したくなかった。殺されたのだとすぐにわかってしまっては、時間稼ぎとし

ては不適切だろうから。
衣服はそれよりも先に、自分のものに着せ替えてあった。しょうこの衣服は先に焼却炉で焼き捨てた。どの程度繊維が焼け残るかはわからないが、念には念を入れておきたい。
できれば丸焦げになってくれるとありがたいのだが。
「ごめんね、しょうこちゃん」
聞こえてないのはわかっていて、あえてつぶやく。
「でもしょうこちゃんが悪いんだよ。私の幸せを壊そうとするから」
一番大切なもののために、他のものは切り捨てる。もう少し時間が遅くなったら、しおを連れて、家を出る。逃げる時間を稼ぐために、火を点けるのは叔母に頼んだ。二人で空港に行って、日本を出て、そして――。
いつまでも、二人で幸せに暮らすのだ。

泡沫の夢　その二

黒い流れ。その中を自分は漂っている。
ときどき、目の前を何かが流れる。誰かの、声が聞こえる。
「手間をかけさせないで」
「期待はずれ」
「せめてもうちょっと……」
嫌だ、聞きたくない。耳を塞ぎたいのに、身体が動かない。声はやまない。
ぱらぱらと、落ちてくるもの。白い紙にプリントされた文字。それが、言葉を作っていく。
「そして、お姫様は自分を助けだしてくれた王子様と、幸せに暮らしました。めでたしめでたし」
小さかったころに、好きだったおとぎ話。絵本を抱えて「王子様はいつ来てくれるの？」と訊いたら、バカにしたように笑われた。「おとぎ話を真に受けるなんて、いったいいくつよ？　もっとまともなことに興味を持ちなさい」と言われて。
まともなことって、なんだろう？
落ちてくる文字が、つもって山になっていく。息が苦しい。文字が見える。声が聞こえる。
「聞いた？　あそこの奥さん、あんな偉そうなことを言っているけど、実際のところあそこの息子さんは……」
どうして、さっきまで笑顔で話していた人の悪口を、別れた途端に言えるの？
「だからねしょうこ、あなたも人に悪く言われるようなことは、しちゃだめよ。人なんて、別れたあとは笑ってその人の悪口が言えてしまうのだから」
そう言うのなら、それだけは絶対にしない。友達の悪口だけは、何がなんでも言うもんか。
「バイトがしたい？　しょうこ、学生の本分は勉強だと何度も言っただろう。今のままの成績では、希望の学部に入れないかもしれん。く

だらないことを言ってないで、さっさと勉強にはげめ」
「お兄ちゃんやお姉ちゃんは、あなたの年頃にはもっとしっかりしていたのにねえ……何が悪かったのかしら」
「これは何だ？　高校生が化粧品か。お前の学校の校則で不順異性交遊は禁止のはずだろう。これは全部捨てておくからな」
「最近、家に帰ってくるのが遅すぎるんじゃない？　それとその安っぽいアクセサリー、そんなの着けて歩くのやめなさい。品格を疑われるわ」
　だって、家は楽しくない。外の方が楽しい。学校の勉強は楽しくないし、クラスメイトはみんな取り済ました子ばっかり。本音なんて誰も聞いてくれない。
　親に黙ってこっそりバイトを始めて、そこでさとうと知り合って。バイトは楽しかったし、さとうと遊び歩くのはもっと楽しかった。やっとちょっとだけ自由になれた気がした。これで王子様のように自分を連れ出してくれる人がみつかれば最高だったけど、そこまでは望まなくてもいい、そう思えるぐらいに、あのときは楽しかったのだ。
　頭が、痛い……。灼けつくような、いや、焦げ付くような痛みというのが近いのかもしれない。
　ふっと、気が抜ける。周りを風が吹き、つもった言葉がぱらぱらと飛ばされて行く。
　ああ、みんな飛んで行くのか。みんな飛んで、なくなっていく、綺麗さっぱりなくなったら、きっとすっきりする。
「……や……れ……」
　不意に、また声が聞こえた。誰かの声。
「あなたは頑張った。勇気も出したんだと思う」
　頭を撫でる、誰かの手の感触。……これは、あの子だ。公園で会ったあの男の子。捨てられた動物のような目をしていて……だから、放っておけなかった。
　いなくなった妹を探しているのだと、真剣な表情で彼は言っていた。その表情を見て、思ってしまった。もしこれくらいの年齢のときに自分がいなくなったとして、自分の家族は、こんなに真剣に自分を

探してくれるだろうか。警察に届けを出すだけで終わりにせず、夜の遅くまでポスターを貼って回ったりしてくれるだろうか。

だから、力になりたいと思ったのだ。妹を手元に返してあげて、彼が心からの笑顔を見せてくれたら、きっとそれが自分を救ってくれるだろうから。

さとうがどうして彼の妹といっしょにいたのかはわからない。でも、二人がいっしょにいるのを見た瞬間に、携帯のカメラを起動して画像を取り、彼へのメールを送信していた。

……ああ、自分は、だめだな。

結局のところ、何もかも、ダメにしただけなのかもしれない。

笑った顔、見たかったよ。

また、頭が痛い。黒い何かが、目の前に渦巻いている。風は、いつのまにか止んでいた。

わたしは、本当は……。

……熱い。

周りが、ひどく熱い。それに、なんだか、空気が悪い。咳き込んだはずみに、誰かの声が聞こえた。

ズレていく

あさひは苛立ちながら夜道を走っていた。しょうことはもうずっと連絡が取れていない。彼女の身に何かしら良くないことが起きたのは確かだ。

この世で信じられるのは妹のしおだけだと思っていたけれど、彼女は、しょうこだけは、信じてもいいと思った。それに、彼女は写真を送ってきた。しおと、あの女が映っている写真。それきり、連絡が取れなくなっている。

しょうこから写真が送られてきてから、あさひはすぐに戻りの電車に乗った。しょうこと連絡を取ろうとしても返事がない。時間がないと感じ、しおについて嘘を教えた三ツ星を脅して協力を取り付けさせた。吐き気がするくらい三ツ星のことは嫌いだったが、他に手段がない。そもそもこんなことになったのは、嘘をついて妨害をしたあいつが悪いのだ。

その三ツ星からはさっき電話があった。この後に及んであいつはまた嘘をついた。しおがいるのは１２０８号室なのに、３０５室にいると言ったのだ。建物さえわかればあいつに用はない。

たどりついたマンションのエントランスに、探していた相手はいた。しおと、彼女を連れて行った女、松坂さとう。大きなスーツケースを持っているところを見ると、ここを離れて遠くへ行こうとしていたのだろう。向こうはこちらを見るなり、しおの手をつかんで身を翻して逃げ去ろうとする。

一瞬にして頭に血が昇り、あさひはさとうのあとを追って走り出した。だが角を曲がった瞬間、肩に激しい痛みが走る。待ち構えていたさとうにスーツケースで殴られたのだ。動きが止まった瞬間に、向こうはまたも身を翻し、しおと共にエレベーターに乗り込んでしまった。駆け寄るが既に扉は閉まったあとだ。もう片方のエレベーターの所在は十一階。イライラが募るが、待つより他にない。

ようやくエレベーターが来た。乗り込んで、十二階のボタンを押す。エレベーターがあがる時間が、ひどく遅く感じられる。

十二階に到着したあさひは、廊下に出て唖然とした。立ち込める黒い煙と、ものが焼ける臭い。火事だ。
考えるよりも先に身体が動いた。１２０８号室に向かって走る。ドアは開いていた。そして、その中に。
火の手があがる部屋の中、倒れている黒い人影。その姿には見覚えがあった。あれきり連絡のなかったしょうこ。彼女が、燃える部屋の中に倒れている。
あいつだ、あいつがやった。友達だといって、ずっと案じてくれていた相手に、こんな仕打ちを。
ここにしおはいない。行き違ったようだ。しおを探すのなら、ここを離れて、エレベーター前に戻らなくては。
そのとき。人影が身動きした。生きている。彼女はまだ、生きている。置いていけない。
しおを追いかけろ。
しょうこを助けなくては。
追いかけろ。助けなくては。追いかけろ。助けなくては。
「……あああああっ！」
よくわからない衝動にかられ、あさひは叫んだ。床を蹴って走り、部屋の中に駆け込む。一瞬で倒れているしょうこの傍らにまで走りより、膝をついてその身体を助け起こした。
手に触れた身体には確かにぬくもりがあった。首筋に手を触れると、脈動が感じられる。あさひはしょうこの身体を手で支え、顔を覗き込んだ。瞳が僅かだが、開いている。
「し……しっかり！　しっかりしてくれ！」
その叫びが聞こえたのだろうか。しょうこは小さく笑った。唇が動いて、言葉がこぼれる。
「お……じ……み……た……」
はっきりとは聞き取れなかった。あさひはしょうこの右腕を自分の首にまわし、彼女の身体をなんとか立たせた。ずっしりと肩に重みがかかる。力の入らない身体を引きずるのは思ったよりもはるかに重労働だった。

「逃げるぞ！」
　力を振り絞って、あさひは廊下へと出た。その瞬間、廊下に立っていた二人と顔をつきあわせてしまう。さとうと、しお。
「しおちゃん、行くよ！」
　さとうはまたしおの手を引いて逃げようとする。追いかけたいが、自力で動けないしょうこを連れていては、それはできない。
「しお、そいつについて行くな！　いっしょに、母さんのとこに戻るんだ！」
　しおがびくっと動きをとめ、こちらを見る。さとうが殺しそうな視線で睨んでくるが、それはどうでもよかった。
「そいつは、自分の友達を生きたまま焼き殺そうとする奴なんだぞ！　そんな奴といっしょに行くんじゃない！」
「知ってるよ！」
　しおの答えにあさひは言葉を失った。しおはきっぱりとした表情で首を横に振った。
「わたしが一番大事なのはさとちゃんで、お母さんじゃない。お母さんなんてもういらない！　それに、あなたなんか知らない！」
　きつい拒絶に、また言葉が詰まる。さとうが歪んだ笑顔を浮かべ、しおに行こうと声をかける。しおは笑顔でさとうに連れられて行ってしまった。
「くそっ！　くそくそくそくそっ！」
　しょうこを支えたまま、あさひは激しい感情に襲われ、足元の床を何度も何度も蹴った。せっかく探し当てたのに、しおにはろくに話をするまでもなく、逃げられてしまった。
　何度めかわからない罵倒の言葉を叫んだときだった。しょうこが小さく身動きした。
「……え？」
　しょうこの目はこっちを見ていた。唇がまた動く。
「ご……めん……ね……」
「ち……違う違う違う！　あなたのせいじゃない！　あなたが悪いんじゃない！　あなたが……」

「お……いて……って……い……よ……」
　言葉の意味を理解し、あさひは勢いよく首を横に振った。彼女の腕を支える自らの腕に力をこめ直す。
「……置いてかない」
「で……も……わた……あし……で……」
「いいから！」
　背後の部屋の炎を激しくなり、煙がすごい勢いで噴き出してきていた。急いで逃げなければ。……そして。
　彼女だけは、助ける。
　あさひは必死で歩みを進めた。ろくに動けない人間の身体がこんなに重いものだとは思わなかった。額に汗がにじみ、息が荒くなる。しょうこは何か言っていたが、言葉になっていなかった。
　なんとかエレベーターの前までたどり着いたが、火事のせいでシステムが切り替わったのか、ボタンは反応しなかった。仕方なく、近くの非常階段に足を向ける。
　歩く以上に、人を支えて階段を下りるのは重労働だった。疲労で遠くなりかける意識を必死で引き戻しながら、あさひはしょうこを支えて階段を下っていく。
　だが、三階分を降りたあたりで限界が来た。膝をつく。もう動けそうにない。……ダメだ。しょうこだけは、助けてあげないといけないのに。
「……ごめん」
　呟くが、答えはない。また意識を失ったのだろうか。表情を伺おうとした、そのとき。
　駆け寄ってきた人間があった。
「要救助者二名発見！　直ちに救助に移ります。君、大丈夫か？」
「俺より、彼女を……」
「誰も見捨てたりはしない。両方ともちゃんと救助するよ。……よく頑張ったね。おーい、早く！」
　ばたばたと駆け上がってくる足音がする。助かるのだ。気が抜けた瞬間、あさひはそのまま倒れてしまった。

空は晴れても心は晴れない

白を基調とした病室。中央に、ベッドがひとつ。その上に、しょうこは寝かされていた。頭の傷には包帯が巻かれ、他の傷もきちんと処置がなされている。左手には、点滴の管。ぽたぽたと、一定のリズムで雫が落ちていく。

横を向くと、病室の窓が見えた。窓の向こうには青空。雲ひとつない綺麗な空だったが、その事実はしょうこを慰めてはくれなかった。

あの日。さとうが住んでいたマンションが火事になった日。さとうに焼き殺されるところだった自分は、妹を探しに来たあさひに助けられ、一命を取りとめた。あさひは自分を連れて、非常階段を降りようとして、途中で力尽きたところを、通報を受けてかけつけた消防士に二人そろって救助された。

そのまま病院に運ばれ、治療を受けたらしい。というのも、そのときの記憶ははっきりしていないのだ。気がついたらこの部屋で、ベッドに寝かされていた。意識が戻ったのがわかると、部屋にいた看護士さんが飛び出して行き、やがて医者とおぼしき男性と、両親を連れて戻ってきた。何か言われたように思うが、これまたはっきり憶えていない。怪我の状態についてとか、そんな話だったと思う。両親の方もあれやこれやと言っていたようだが、この辺りでまた意識が飛んでしまい、やはり何を言われたのかは思い出せない。

日が経過するにつれ、しょうこの頭も次第にはっきりとしてきた。とはいえ、あのとき起きたことの全部を、綺麗に思い出せたわけではない。一部は霞んでよくわからなくなってしまっている。

確かなのは、さとうに殺されかけたことと、あさひに助けてもらったことだ。……彼があんなにいっしょに暮らしたいと願っていた妹の存在と引き換えにして。

ぽたり、と涙が頬を伝って落ちた。結局、自分はまた間違えたのだ。間違えて、最悪の事態を引き起こしてしまった。さとうは自分を拒絶した。あさひは妹を取り戻すのに失敗した。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

そうして泣きじゃくっていると、部屋のドアを叩く音がした。涙をぬぐおうかと一瞬頭に浮かんだが、そうする気力もない。
「失礼します」
そんな声と共に入ってきたのは、長身で髪をまとめた三十代後半ぐらいの女性と、二十代後半ぐらいのセミロングの髪の女性だ。どちらもスーツを着ているので、病院の関係者ではなさそうである。二人の女性は、泣いているしょうこを見て、しまったという表情になった。
「……飛騨しょうこさん、ですよね？　今、時間よろしいですか？」
しょうこは涙をぬぐって、消えそうな声で「……はい」と答えた。女性たちはしばらくひそひそと話し合っていたが、やがて年上の方の女性が前に進み出た。
二人は刑事だった。マンションの火災について話を聞きたいのだという。
「あくまで形式的なものだから、あまり気負わないでくださいね」
五島ミカと名乗った女性は、静かな声でそう言った。半歩後ろほどの距離で、年下の方の女性がメモを開いているのが見える。
「まず、飛騨さんはどうしてあのマンションに？」
「……あ、えっと……友達に、会いに」
ともだち。その言葉を口にしたとき、胸の奥が痛んだ。友達だった。友達のはずだった。
「その友達というのは？」
「……松坂さとう、です。バイト先がいっしょ……あ」
しょうこは思わず身を起こした。はずみで傷が痛み、思わず顔を顰める。五島が軽く身を乗り出し「そのままで大丈夫ですから」と柔らかい口調で言った。
頭を枕に戻し、しょうこは考えた。バイトのことは両親に秘密にしていた。とはいえ、もうバレてしまっているだろう。
「さとうとは、バイト先がいっしょで、それで仲良くなりました……えっと、あの、その……」
「……あのね、飛騨さん」
不意に、後ろにいた方の刑事――確か、葉山アオイと名乗っていた

――が声をあげた。
「ご両親とかに黙っておきたいことがあるのなら、それはこちらから喋ったりはしないから、安心してください。あなたの年頃だと、親には言えないようなこととか、いろいろあるでしょうし」
葉山の言葉に、五島もうなずいた。少しだけ、気分が軽くなる。
「それで、飛騨さん。松坂さんの部屋は三階の３０５号室だけど、あなたがみつかったのは九階への階段です。そこで、神戸あさひといっしょにいるところを保護されました。どうしてあのフロアに？」
「……わかりません」
しょうこは答えた。実際、どう答えていいかわからなかった。
「ゆっくりでいいし、思い出せるところからで大丈夫です。松坂さんを訪ねたのはいつですか？」
あれは、確か……しょうこは、思い出せる日付を答えた。
「火事になった日は思い出せますか？」
しょうこは首を横に振った。五島は思案気な表情になる。
「松坂さんは、あなたが訪ねたときは在宅でしたか？」
「……いいえ。いたのは、叔母さんだけです」
「それであなたはどうしたの？」
「叔母さんが……えっと……さとうは別の部屋に行ってるよと言ったので、その部屋に」
「そこはどこ？」
「１２０８号室……」
「そこで松坂さとうさんと会ったんですね？」
「……え……えっと……会った、と思うんですけど……なんというのか、よく思い出せなくて……」
嘘だ。本当は憶えている。でも、喋れそうにない。さとうに殺されかけただなんて、この人たちの前で言いたくない。
五島と葉山が顔を見合わせた。二人はしばらくそのまま視線をかわしていたが、やがてまた五島の方が口を開いた。
「頭を打っているし、記憶が不正確でも仕方がないかも……でもごめんなさい、もう少し訊かせて。あなたといっしょにいた、神戸あさひ

君。彼とはどんな関係ですか？」
「友達、です……」
「彼もいっしょに松坂さんのところに行ったのですか？」
「いいえ」
　不思議と、強い声が出た。自分でその声に驚いてしまう。
「彼がどうしてあそこにいたのかはわかりますか？」
「……」
　しょうこは答えられなかった。あさひについて、自分の一存で話していいとは思えなかったのだ。警察も頼らず、一人で妹を探し回っていたあさひのことだ。この件について、あれこれ喋ったらきっと迷惑がかかる。
　五島と葉山はまた顔を見合わせた。何を思っているのか、それは、表情からはわからない。
「今日のところはここまでにします。それでは、私たちはこれで。……お大事に、飛騨さん」
「大丈夫、あなたの心配するようなことは何もありませんから」
　二人の刑事は頭を下げて、病室を出て行こうとした。
「……あの、待ってください」
　思わず、しょうこは声をかけていた。二人が怪訝そうな表情で振り返る。
「何でしょう？」
「あ、あの……彼は、どうしてますか。あさひ君は」
　ふっと、葉山が笑顔になった。ベッドに近づいてくると、膝を折ってしょうこに目線をあわせる。
「彼なら大丈夫。元気にしています」
　その言葉を聞いたとき、しょうこは張り詰めていたものが切れるような感覚を憶えた。
「良かった……」
　そんな呟きが、意図しないうちに唇からこぼれていた。
「それでは、今度こそ失礼しますね」

二人の刑事

「葉山、ちょっといいか？　少し話したいんだが」
「はい、大丈夫ですよ」
「……さてと、さっきのお嬢ちゃん、飛騨しょうこちゃん。あの子の話をどう思う？」
「特に妙なところはないと思いますね。ほぼ申告どおりではないでしょうか？　部屋に入った瞬間に殴られて気絶したのでしたら、それからのことを憶えていなくても仕方がないでしょうし」
「うん。あの子の話に大筋で嘘はないと思う。……だがこの事件の全貌の方は、どうもいまいちよくわからない」
「そうですね」
「今の話だと、飛騨しょうこがバイト仲間で友人の松坂さとうのところに行くと、叔母さんから、何故かさとうは縁もゆかりもない人間の住んでいる部屋にいると言われ、部屋を訪ねたら何故か殴られて気絶して、おそらくはそのまま閉じ込められて、あげくその部屋に放置されたまま放火されたということになる」
「ええ」
「飛騨しょうこは怪我の具合からみて、あのままだったらそのままそこで焼け死んでいただろう。だが、これまた何故かあの部屋を訪れた神戸あさひによって助け出された」
「あの子……」
「うん？」
「神戸あさひ君ですけどね。飛騨しょうこちゃんとつきあっているのでは？　さっきのしょうこちゃんの表情は、恋をしている女の子のものでした」
「相変わらず甘ちゃんだな、と言いたいところだが、私もそれは可能性が高いと思っている。消防士からも、必死になってしょうこを助けようとしていたと証言が取れてるしな」
「あさひ君がもっと色々喋ってくれていればもっと確認が楽なんですけどね」

「警戒心バリバリでこっちを睨んでいたから、厳しそうだな。容疑者ではないから、強引な手は使えないし」
「しょうこちゃんが行き先をあさひ君に伝えていたとしたら、あさひ君の行動はわかります。連絡が来なくなったので、探しに行ったのではないでしょうか」
「まあ、それはありうるな」
「お姫様を助けるナイトみたいですね、ふふっ」
「アホな妄想はいらん。まあ、そうして考えると、しょうことあさひの行動は辻褄があう。問題は『しょうこを殴ったのは誰か』そして『本来の住人を殺したのは誰か』だ」
「うーん……」
「どうした、葉山？」
「五島さん、この事件、もう犯人が自供してるんですよね。このまま解決にしちゃってもいいのでは？」
「放火に関しては、確かに出頭した松坂みつの反抗だろう。軽油のレシートも、ガソリンスタンドの防犯カメラの映像もあるし、彼女がああの日着ていた服からは軽油の飛沫が検出された。だが、彼女がしょうこを１２０８号室に招き入れる必要がない。なんでわざわざリスクを負う？」
「でも、松坂みつは全部自分がやったって言ってるんですよ」
「……はあ。なあ、葉山。お前、あいつがまともだと思うか？　ありゃどう見ても異常者だ」
「あの人がおかしいのは確かですけど……ううっ」
「どうした？」
「思い出したら、吐き気が……」
「ここで吐くなよ。掃除が大変だからな」
「もう、五島さん！　あれを見てしまった私の身にもなってください。一種のホラーですよ。おぞましい……」
「よしよし、大変だったな」
「全然心がこもってない！」
「……とにかく、あれはきっぱり忘れよう。なかったことにはできな

いが、現在、松坂みつの取調べは主に私たち、それ以外でも女性が行うってことで意見が一致しているし」
「最初からそうしておくべきでしたよ……」
「松坂みつがあんな奴だなんて、誰にもわからなかったさ。それより、話を戻すぞ。１２０８号室の住人、深谷そらを殺したのは、いったい誰だ？」
「自供どおり、松坂みつでは？」
「動機は？」
「……殺してくれって頼まれたからって、松坂みつは言ってますが」
「事実だと思うか？」
「いいえ……。いくらなんでも無理があります。本人がそう信じ込んでる可能性はありますが。イカれてますから」
「ではなんだと思う？」
「可能性が高いのは、痴情のもつれ、ですかねえ。松坂みつはそうとう男性関係が激しかったわけですし、刺されてもおかしくはないのではないでしょうか？」
「その場合、刺されるのは松坂みつの方だろう」
「もみあいになって、思わない結果に」
「それで……どうする？」
「数日かけて死体をバラして捨てようとしたって、松坂みつは供述してますね」
「だが捨てきらないうちに、しょうこがやってきた。犯行を見られた松坂みつは口を封じるために、飛騨しょうこの殺害をもくろみ、ついでに火をかけて証拠を隠滅しようとした」
「ありうる話だと思いますけど、五島さんは何が引っかかってるんですか？」
「さっきも言ったが、松坂みつの動きがおかしい。何故、しょうこを１２０８号室に行かせるんだ？　姪ならいないと追い返せばすむ話じゃないか」
「１２０８号室に行かせたのが嘘だったとか？　いえ、それはないですね。しょうこちゃんも１２０８号室に行ったことは認めています。

それに、そこにさとうがいたとも」
「それに、しょうこは松坂みつがついてきたとは言ってない。松坂さとうとは友人かもしれんが、みつの方とはとくに親しくもないだろう。１２０８号室までついてこさせるとも思えない。松坂みつがしょうこを殴ったとは考えにくい」
「ええ」
「さて、一方で、みつの姪のさとうは行方不明だ。……私は、しょうこを殴ったのはさとうだと考えている。それに、深谷殺しもだ」
「えっと……どういうことですか？」
「推測になってしまうが、１２０８号室の住人である深谷と松坂さとうの間に、なんらかの接触があったと私は見ている。援助交際か、真面目な恋愛か、それはわからん。とにかく、二人には関係があった。それから、何かしら行き違いがあり、さとうは深谷を殺害。隠蔽のためにさとうが死体をバラしていたところを、やってきたしょうこが目撃。さとうは口封じのためにしょうこを殺害しようとした――あるいは、しょうこに罪を着せるつもりだったのかもしれない。松坂みつは姪が深谷と交流しているとは知っていたが、殺害してしまったとは知らず、さとうが部屋に行っているのも交流のためだと思っていて、故にしょうこに居場所を教えた。しょうこに現場を見られたさとうはしょうこの動きを封じ、そのあと処分に困ってみつに泣きつき、この事件が起きた」
「……うーん、確かにそれっぽいですけど、それならなんで、松坂みつは、全部自分がやったなんて言ってるんでしょう？」
「姪への愛情？」
「あのイカれた人にそんなものあります？　３０５号室の状態といい、行動といい、無茶苦茶ですよ、あの人」
「愛情云々はさておき、なんらかの事情で姪を庇っている可能性はあるだろう。……ん？　ちょっと待ってくれ。携帯に連絡が入ってる。……ああ、はい、はい……」
「どうしたんですか？」
「ああ、いくつかわかったことがある。松坂みつだが、火事の前の日に

さとう名義の預金を解約している」
「え？」
「たぶん、逃亡資金用だな。それと、さとうのバイト先のカフェの宮崎すみれって子が白状した。さとうに頼まれてパスポートを貸したそうだ。……バカな子だ、まったく」
「パスポートに逃走資金？　ということは海外逃亡？　時間を考えると、もう逃げちゃってそう……」
「だな。そして疑問が増えた。宮崎すみれが貸したパスポートは自分のものだけでなく、妹のもだそうだ。……誰だかわからんが、松坂さとうには、『連れ』がいる。妹は小学生だそうだから、その『連れ』もまだ小さな子供だ。そして、彼女には該当する年齢の血縁者はいない」
「……じゃあ、その子はいったい誰？」
「わからんな。情報が少なすぎる。松坂みつをもう一度取り調べよう」
「気が重いです……」
「話すのは私がやる。葉山は後ろで調書を取っててくれればいい」
「あの人の話を聞いてると頭が痛くなってくるんですよ」
「そのときは例のお題目を唱えてろ」
「あれはお題目じゃないですっ！」

それはどちらもLで始まる

「あら、今日もあなたがお相手なの？」
「ご期待にそえなくて、悪いね」
　独特な笑顔を浮かべる松坂みつの向かいの椅子に腰を下ろしながら、五島はそう言った。松坂みつは頬杖をつき、楽しげな様子でこちらを見ている。
「残念だわあ。あなたとは楽しいお話ができないんだもの」
「そりゃけっこう」
　五島は素っ気無く口にした。後ろの机の前には葉山が座り、調書を開いている。
「私はね、あなたはまだ愛をみつけてないだけだと思うの」
「寝言はどうでもいい。それで、あんたの姪のさとうは今どこにいる？」
「さとうちゃん？　あの子はね、愛をみつけたの。だから、愛といっしょに出て行ったわ」
　五島は反射的に目の前の松坂みつを半眼で睨みそうになったが、そんなことをしても効果がないだろうと思い、踏みとどまった。
「……あんたはそればっかりだな」
「愛より大切なものはないでしょう？」
「そんな話はどうでもいいんだよ。保護が必要な未成年がどこだかわからんところをうろついてる、そっちが問題だ」
「まあ、それは心配ね、うふふ……」
「あんたの姪の話をしてるんだが」
「そうだったわね」
　まったくもって、埒が明かない。松坂さとうの所在についての取調べはいつも、こんな感じだ。
「愛を知らない刑事さん。いえ、愛がわからない刑事さんかしら？……あなたも苦労するわね？」
　最後の台詞は、後ろで調書を取っている葉山に向けられたものだった。葉山が顔をあげるが、その顔にはうんざりした表情が浮かんでい

た。
「なんでもいいから、とっとと五島さんの質問に答えてください。取調べが進みません」
「それそんなに大事なの？　もうみんな喋っちゃったじゃない。あと何が訊きたいのかしら？」
「さっきから言ってるだろう。あんたの姪の居場所だ」
「あの子なら、愛をみつけて出て行ったわ」
「……ああはいはい、罪状に不保護罪も追加ってことでいいんだな」
　言いながら、不保護罪にするのは少々厳しいかなとも思う。さとうは十六歳だ。未成年だが、不保護罪が成立するほど幼いかと訊かれると難しい。
「刑事さんは罪にしか興味がないの？」
「興味があるのは事件の中身だ。……それで、あんたが本当に深谷を殺したのか？」
「ええ」
「動機は」
「殺してくれって頼まれたの」
「なぜ深谷はそんな頼みを？」
「さあ？」
「あんたは頼まれたら誰でもホイホイ殺すのか？」
「それが愛だもの」
　あっけらかんと笑う顔は童女のようで、五島とさほど変わらぬ年齢の女性とは思えない。
「あんたの姪の友達である、飛騨しょうこを殺害しようとした理由は？」
「愛を求める小鳥ちゃん？　可愛い子だったけど、見たらいけないものを見ちゃったのよ。かわいそうだけど、仕方なかったの」
「飛騨しょうこはあんたに、あんたの姪が１２０８号室にいると言われ、そこへ向かったと言っている。そして、あんたはついてこなかったし、そこでさとうと会ったとも言っている。さとうはこの一件の事件に関わっているのか？」

「やったのは私で、さとうちゃんは関わってないわ」
「ならどうして、さとうは姿を現さない？　後見人の叔母が逮捕されたのに、行方をくらましている？」
「愛をみつけたからよ」
「飛騨しょうこが見た、見たらいけないものとはなんだ？」
「それはもう話したでしょう？」
「きちんと起きたことを順序立てて話せ。しょうこには、具体的に何を見られた？　死体か？　凶器か？そもそも、彼女はどうやって１２０８号室に入った？　そこには、あんたの姪がいて、死体をバラしている最中だったんじゃないのか？」
「小鳥ちゃんは、見てはいけないものを見てしまったの。愛の巣を暴くのはいけないことよ」
　愛の巣、という言葉に、五島はひっかかるものを憶えた。松坂さとうは、あの部屋で生活していたのではないか？
「さとうは１２０８号室で生活していたのか？」
「さとうちゃんは、いつでも、やりたいようにやる子なの」
「そこに、さとうと誰がいたんだ。……さとうと同じバイト先の宮崎すみれって子が白状した。さとうに自分と妹のパスポートを貸したとな。あんたは火事の前にさとうの預金を解約している。逃亡資金か？」
　松坂みつは笑うだけで、答えようとしない。苛立ったら負けだ、と五島は内心で呟き、言葉を続ける。
「さとうは誰を連れて逃げたんだ？」
「誰でしょうね？」
「あんたが知らんはずはないだろう」
「さとうちゃんが愛した人なのは確かだと思うわ。愛の逃避行、ステキな響きよね？」
「十六の子供に、もっと小さい子を連れさせて海外へ行かせる。さぞやステキな未来が待ってるだろうよ。はっきり言って、ろくでもない奴らの格好のエサだ。犯罪に巻き込まれてないことを祈るんだな」
　最後の方はやや強い調子になってしまったが、松坂みつが動じる様

子はなかった。

花は心を養う

あさひはぼんやりと公園のベンチに座っていた。あの日以来、何もする気が起きない。

今まで、あさひの生活は妹のしおを探すことを中心に回っていた。父親が死んでくれて、ようやく母と妹と三人で安心して暮らせると思ったのに、母と妹の住所にたどり着いたとき、そこには虚脱状態になった母しかいなかった。

母の話は要領を得なかったが、しおを外に置いてきてしまったということだけはなんとか把握できた。いったいどうしてそんなことになったのか。因果関係がまったくわからず、あさひはひどく混乱した。ただひとつだけ、指標のように心に浮かんだのは「しおを見つけ出さなくてはならない」いう、強い感情だ。

それからあさひは毎日のようにしおを探し歩いた。母がしおを置いてきたであろう場所を中心に歩き回り、尋ね人のポスターを貼った。だが結果ははかばかしくなく。……そして。

あの日起きたことを思いだし、あさひは悔しさで唇を噛んだ。昼間なので、直射日光が眩しい。あさひは青い空を忌々しげに見上げる。……静かな夜の方が好きだ。と、そのとき。

「あ～良かった。ここにいてくれたわ」

横からそんな声がかけられたかと思うと、手首をぐっとつかまれた。思わず手を引き離そうとするが、相手の力は思ったより強く、振りほどけない。

「ダメよ。探すのに結構苦労したんだから。今逃げられたら困るの」

あさひの手首を掴んでいたのは、警察で調書を取った刑事の片方、葉山アオイだった。以前見たスーツではなく、ブラウスにスカートという私服姿だ。

「なんだよあんたは！」

「それはこっちの台詞。……どうして施設をすぐに脱走したりするかな？」

「そんなのあんたには関係ないだろう！」

「あるわよ。君にはまだ訊きたいことがあるって言ったでしょ？　所在がわからなくなると困るの。君は保護者がいないしまだ未成年なんだから、施設で大人しくしてなさい。不良少年のレッテル貼られたくないでしょ？」
　あさひは葉山を睨みつけた。だが葉山は動じず、涼しい表情をしている。……否、笑顔すら、浮かべている。
「俺はあんなとこにはいたくない」
「はいはい、寝言は寝てから言いましょうね～。さっきも言ったけど、君は未成年なんだからね。施設で食事と衣服と寝るとこと教育の権利をしっかり受けとった方が身のためだよ？　……と、今日はこんな話をしに来たんじゃなかったわ」
「……なんだよ」
　不服だったが、あさひはそう問い返した。ここでこの刑事から逃げ出すより、施設から脱走するほうがまだ楽そうだったからだ。
「私、今日は非番なのよ。だからね、ここに来たのは個人的な用事で、仕事じゃないし、君を補導するつもりでもないの」
　のほほんとした口調で、葉山はそう言った。
「じゃあ何しに来たんだよ！」
「君を誘いに」
　あまりに意外な言葉だったので、あさひは驚きのあまり目を見開いて固まってしまった。そんなあさひを見て、葉山がおかしそうに笑う。
「あはははは……何を想像しているのかな？」
「う……うるさいっ！」
　やっぱり大人は嫌いだ、と声に出さずにあさひは呟いた。基本的にろくな奴がいやしない。そして、目の前のこいつはその中でもかなり上の方に位置する。
「いや、本当に誘いに来たんだけどね。でも、そういう誘いじゃないよ？　今日は非番だから、私、これからしょうこちゃんのお見舞い行こうと思ってるのね。で、君に、『いっしょにお見舞いに行かない？』と誘いにきたわけ」

「え……」
　また意外な言葉がでてきたので、あさひは再び固まった。飛騨しょうこ。あの火事の日に、救助隊に助け出されてから、まったく会えていない。あさひが知っているのは彼女の携帯の番号だけ。その携帯は相変わらず連絡がないので、たぶんさとうに取り上げられたのだろうとあさひは考えていた。しょうこの住所も通っている学校も知らない上に、まともな交渉能力を持ち合わせていないあさひには、しょうこの所在を知る術が皆無であり、入院先の病院もわからずにいる。
「で、どうする？　いっしょに来る？　私としてはいっしょに来てほしいんだけど。しょうこちゃん、怪我の回復の方は順調だけど、精神的にはものすごく憔悴してて見てられなくってさ～」
　あっけらかんとした口調だが、表情は真面目だった。その様子に、あさひは少し怖いものを感じてしまう。だが、目の前に差し出された誘いは、あまりにも魅力的だった。
「……嘘じゃないだろうな」
　押し殺した声でそう答える。葉山は真面目な表情のままうなずいた。
「嘘じゃないわよ。まあそれに、しょうこちゃんがもう少し回復してくれたら、なんかもうちょっと突っ込んだ話できるかもしれないから、こっちとしてもメリットはあるの。それじゃ、行きましょうか」
　乗せられているようで気に入らなかったが、あさひはおとなしく、葉山という刑事のあとをついていくことにした。

「……おい」
「なに？」
「病院にお見舞いに行くんじゃなかったのか？」
　しょうこのお見舞いに行くからついてこい、そう言って歩き出した葉山だったが、向かった先は病院ではなかった。
「うん、行くよ」
「じゃあなんでこんな場所に来るんだ」
　あさひの言葉に、葉山は大げさなため息をついてみせた。その余裕

ありげな表情を見て、やっぱりこいつは嫌いだ、とあさひはあらためて思った。
「あのねえ、君、その格好でお見舞いに行くつもり？　下手すると病院の人に追い返されちゃうよ？　しょうこちゃんにそんな辛い思いさせたくないでしょ？　わかったらとっととお風呂に入って全身ピッカピカにして、コインランドリーでその汚れた衣類もちゃんと洗濯しなさい」
「うっ……」
　反論したいが、相手の言うことがもっともすぎて反論できない。渋い表情のままあさひは、葉山に連れられて銭湯ののれんをくぐった。番台にいた年配の男性が、二人に声をかける。
「おや、葉山さん。あ～、またなんかやってんですね」
「うん、そういうこと。とりあえずこの子風呂に入れて衣類も洗濯させてくれる？　私じゃさすがに男湯についてけないからさ」
　言いながら葉山は財布を取り出している。それを見て、あさひはあせった。
「いや、お金は……」
「君、銭湯というものは有料なんだよ」
「そうじゃなくて！」
「どうせろくに持ち合わせないでしょ？　いいからさっさとお風呂に入る！」
「あ～、坊主、言われたとおりにしとけ。このお姉さん、怒るとこれで結構おっかないから」
「やだなあ、私は正義の味方だよ？　はい、お金」
「正義の味方ねえ……。あんたはどっちかっていうと……いやなんでもない。はい確かに。ほら坊主、行くぞ」
　銭湯で汚れを落とし、洗濯済みの衣類を着ると確かに気持ちがさっぱりした。そしてその次に、葉山があさひを連れて行ったのは花屋だった。
「……なんで」

「お見舞いに手ぶらで行く気？」
反論しても無駄そうだったので、あさひは黙ることにした。花の名前や種類などはさっぱりわからないので、店員と話している葉山をぼんやりと見ることしかできない。そもそも、花屋に足を踏み入れること自体初めてなのだ。
花屋の店先には、赤、黄、青、白、ピンク、オレンジと、色とりどりの花が溢れている。その花が眩しくて、あさひは目を細めた。
最終的に葉山は、縁が紫になっている白い花の花束を選んだ。そして、それを当然のようにあさひに持たせる。半ば諦めムードで、あさひは花束を抱えた。……せめてこの花束をしょうこが喜んでくれればいいのだが。
今度こそ葉山は病院に向かった。大きな総合病院の受付フロアは雑然としていて、様々な人が行きかっている。葉山は迷いのない足取りで奥に向かい、あさひはその背を見失わないように注意せねばならなかった。
エレベーターで五階に上がると、葉山はそのフロアの受付に向かい、さっさと紙に何か書き込んでいる。たぶん受け付けをしているのだろう。病院のシステムをよく知らないあさひは黙っていた。抱えている花束のせいか、病院のスタッフも入院患者とおぼしき人たちも、あさひの存在を普通に受け止めてくれている。
「しょうこちゃんの病室は５１２号室。さ、行くよ」
消毒液の匂いが漂う廊下を歩いて、目的の部屋へ向かう。葉山がドアを軽くたたいて「飛騨さん、刑事の葉山です。入ってもいいですか？」と声をかけた。ほどなくして、中から「……はい」という声が戻ってくる。
葉山は病室のドアを開けた。が、自分は足を踏み入れず、あさひの肩をつかんで、ぐいと病室へと押しやる。葉山がこんな行動を取るとは思っていなかったあさひは、されるがままに、病室の中に転げ込むように飛び込んでしまった。転ばずに踏みとどまれたのは幸運だった。
「え……え……？」

日当たりのいい病室の中のベッドはひとつだけで、その上にしょうこはいた。あさひを見て、驚いたのか上体を起こし、こちらを見ている。
「あ……」
しょうこの頭にはまだ包帯が巻かれていて、血色も良いとは言いがたい。それでも、きちんと彼女の目は自分を見ていた。その事実に気づいたときに、胸の奥が暖かくなる。
あさひはおずおずとベッドのすぐ近くまで歩みを進め、しょうこに無言で花束を差し出した。しょうこの目が驚いたように見開かれる。
「これ……」
「うん……お見舞い」
それだけ言うのがやっとだった。他に何を言えばいいのかわからなかった。しょうこが花束を受け取り、花に顔を埋める。その瞳から涙がこぼれ落ちた。
「えっ……も、もしかして、気に入らなかった……？」
「バカ……その逆……すごくうれしい……」
しょうこの瞳からは次から次へと涙がこぼれ落ちる。
「あ……あんたが……花、くれるなんて……思って、なかったから……私、私、あのとき、足手まといにしか、なってなかったのに……」
あさひは前にしょうこが泣いたときにしたように、しょうこの頭をそっと撫でた。しょうこは腕を伸ばすと、あさひの肩に回してしがみつき、泣きじゃくった。
ああ、少なくとも、彼女を助けることだけはできたのだ、とあさひは思った。
「……生きててくれて、うれしい」

事件の詳細

「ところでお二人さん、そろそろいい？」
　あれからどれだけ時間が経ったのかはわからないが、しょうこの涙が止まり、やや名残おしい気持ちながらあさひが彼女の身体から離れたとき、タイミングを見計らったかのように、葉山が声をかけてきた。
「あ……す、すいません。私、つい……」
「……」
　あさひは思わず半歩後ずさった。しょうこもわずかに身をひき、下を向いている。その両頬は赤くなっていた。
「あはは、別に照れなくていいよ。青春だね～」
　あっけらかんと言う葉山に、しょうこの頬がさらに赤くなる。この刑事絶対に性格悪いな、とあさひは思った。
「まあそれはともかく、お花は生き物だから、そろそろ花瓶に生けた方がいい」
　いつの間に用意したのか、葉山は水を入れた花瓶を持っていた。しょうこの手から花束を取り、花瓶にと生けていく。
「で、しょうこちゃん。元気は出た？」
「は、はい……」
　しょうこはまた顔を赤らめてうつむいてしまった。
「それはよかった」
「あの……刑事さん。どうして、その……」
「あさひ君を連れてきたかってこと？」
「……はい。刑事さんのお仕事とは思えませんから」
「あ、これは仕事じゃないよ。今日は私、非番だから。これはまあ、なんだろうね～」
　のほほんと笑う様子は何も考えてないように見えるが、そうではないのだろう。とはいえしょうこはその言葉を素直に受け止めたようで、ありがとうございます、とお礼を言っている。
「だけどまあ、時間はあるから、ちょっと話はしたいな。いい？」
　しょうこははい、とうなずいた。

「その前に確認したいんだけど、君たち、事件の全貌についてどれだけ知ってる？　報道番組の類は見た？」
「見てません……その、見るのが辛くて」
「俺も見てない。理由はわかるだろ」
　テレビなど見れる環境ではないのだ。わかっているようで、葉山もうなずいた。
「じゃあ、事件の概要から話すね。あ、長い話になるからあさひ君も座った方がいいよ」
　言われたので、付き添いようとおぼしき丸椅子に座る。
「えーとまず、ディアホメーズが火事になった事件ね。幸い、通報が早かったから、この火災による死人はいなかったし、重傷者もただひとり、しょうこちゃんだけ。とはいえ、これはあくまで『通報が早かったから』であって、これが遅かったり、あるいは別の部屋に燃焼を促進する何かが大量にあったり、という不運に見舞われていたりしたら、被害が甚大なものになっていた可能性もある。
　火元はしょうこちゃんがいた１２０８号室。この部屋は大量の軽油が撒かれていて、ほぼ黒焦げだった。あさひ君がいなかったら、しょうこちゃんは確実に焼け死んでいたね」
　しょうこが身震いした。あさひは手を伸ばして、しょうこの手をそっと握った。
「で、さっき『この火災による死人はいなかった』って言ったし、実際、火事で死んだ人はいなかったけど、死人自体は出ているの。しょうこちゃんがいた１２０８号室からは、切断された男性の遺体の一部が発見された」
　しょうこが息を呑み、目を見開いた。あさひの手をつかむ彼女の手に力が入る。
「この男性の名前は、深谷そら。職業は画家。画家といっても、依頼を受けてコピー品を作るのが仕事だったようね。この人について聞いたことは？」
　しょうこは首を横に振った。葉山はひとつうなずいて、話を続ける。

「やっぱり知らないか。で、火事の次の日、『全部私がやりました』って、出頭してきた人間がいるの。それが、松坂みつ。しょうこちゃんの友達、松坂さとうの叔母だよ」
「えっ？」
　しょうこが驚きの声をあげた。声こそ出さなかったものの、あさひも驚いた。犯人はさとうではなかったのか？
「署まで出向いて、放火も殺人も全部私がやりました～って、満面の笑顔でね。しょうこちゃんに怪我をさせたのも？　って訊いたら『それも』って。あまりにもヘラヘラしてるもんだから、イタズラかとも思ったんだけど、彼女、軽油のレシートを持っててね。ガソリンスタンドを調べたら、防犯カメラには彼女が軽油を買い込んでる映像が記録されてるし、本人が着てた服からも軽油が検出されるしで、そのまま逮捕されて、現在は拘留されて取り調べ中」
「あ、あの……さとうの叔母さん、確かに変、というかおかしな人ですけど、あの、その……」
　しょうこの言葉に、葉山はうなずいて天井を見上げた。
「ああ、大丈夫、どんなふうにおかしいかはわかってるわ。取調べの最中にイヤってほど実感したから」
　葉山の口調は心底嫌そうであった。みつに会ったことのないあさひはよくわからなかったが、さとうの叔母なのでたぶんまともではないだろうという結論を出した。
「それで、さとうは？　さとうはどこでどうしているんですか？」
　尋ねるしょうこの声は震えていた。
「松坂みつの姪の松坂さとうは、現在行方不明。と、ここまでが、現在、報道機関にも発表されている情報なんだけど、君たちは関係者だから、もう少し突っ込んだ話をするね。
　松坂みつは１２０８号室の住人、深谷とトラブルになり、彼を殺害。数日かけて遺体を切断して捨てようとしてたところを、姪に会いに来たしょうこちゃんに見られてしまい、口封じのためにしょうこちゃんを殺害して、証拠隠滅のために火をかけたって言ってるんだけど……」

「え、それ、おかしいです。私、あの日は叔母さんに、さとうは１２０８号室にいるって言われて、私が向かおうとしたら、叔母さんはドアを閉めて鍵をかける音が聞こえました。叔母さんが１２０８号室で私に……えーっと、その……」
　言葉を探しているのか、しょうこは口ごもった。ちらちらと視線をあさひに向ける。とはいえ、あさひも器用な方ではないので、うまい言葉が出てこない。
「しょうこちゃん、記憶は戻ってない？」
「はい……すみません……」
　嘘だ、とあさひは反射的に思った。しょうこは、自分を殴ったのが誰なのか憶えている。だが、しょうこがそれを話せずにいる理由に、充分すぎるほど思い当たりがあった。なので、あさひは何も口にせず、ただしょうこの手を握っていた。あさひより一回り小さい手は汗ばんでいて、緊張が伝わってくる。
「まあ、そういうわけで、私も五島さんも、放火はともかく、しょうこちゃんを殴ったのは松坂みつとは考えていないの。たぶん、やったのは松坂さとうでしょう。……深谷を殺したのもね」
　しょうこは下を向いてしまった。その肩が小さく震えている。
「喋ってたら喉渇いちゃった。お茶を買ってくるからちょっと待っててね」
　葉山は病室を出て行った。彼女がいなくなった瞬間、しょうこはあさひにしがみついた。
「……ごめん、ごめんね……」
「あなたのせいじゃない」
　あさひは、前と同じ言葉を繰り返した。実際、しょうこのせいではないし、彼女がいなければ、さとうに騙されて違う街を捜索していたのだから。
「むしろ、謝るのは俺の方だ。もう関わっちゃダメって、言うべきだった」
「でも、私がいなければ、しおちゃん、もしかしたら」
　その名を聞いたとき、あさひの胸に痛みが走った。自分を拒絶し

て、さとうと行ってしまったしお。自分は、あのとき……。
「何があったか、本当は憶えているんだよな？」
しょうこの身体をそっと離し、確認のためにそう尋ねる。しょうこは頷いた。
「やったのはさとう。私、警察には言わないって言ったけど、もう信じてもらえなかった。でも本当に、警察に言うつもりはなかったの。しおちゃんと、あんたを会わせてあげたかっただけで」
「……なあ。もう、あんな奴をかばわなくてもいいんじゃないか？」
声がやや冷たくなってしまったのは、仕方のないことだろう。あさひからすれば、さとうはしおをかどわかして連れ去り、親友であったはずのしょうこを本気で殺そうとした相手だ。いい感情など、抱けはしない。
しょうこはまた下を向いてしまった。やや苛立ちをおぼえる。本能的に目の前のしょうこの両肩をつかんでしまいそうになり、あさひは必死で自分の衝動を押し込んだ。しょうこは怪我人だし、仮にそうでなかったとしても、手荒に扱っていい存在ではない。
「だって、あんたのこと、勝手に警察に話せない」
あさひははっとなった。静かに手を伸ばして、しょうこの額に触れ、髪をかきあげる。しょうこは今にも泣き出しそうな表情をしていた。
「ごめん……あなたの気持ちも知らずに、きついことを言って」
しおのことはまったく警察に話していない。しょうこはその可能性を考えて、何も言わずにいたのだろう。
自分でもよくわからない、でも決して嫌ではない感情にかられ、あさひはしょうこを抱きしめた。初めて自分からかき抱いた彼女の身体は暖かく柔らかく、そして、ひどく頼りなかった。
ちょうどそのとき、ドアの開く音がした。あさひは思わずしょうこから身体を離した。それとほぼ同時に、ビニール袋をぶら下げた葉山が病室へと入ってくる。
「好み訊くの忘れちゃったんだけど、君たち、緑茶で大丈夫？」
その口元にニヤニヤとした笑みが浮かんでいるのが見えたが、突っ

込むと墓穴を掘りそうなので、あさひは黙ってうなずくだけにした。隣ではしょうこが「はい、大丈夫です」と答えている。
葉山はビニール袋から緑茶入った大きなペットボトルと紙コップを取り出し、紙コップにお茶を注いであさひとしょうこにひとつずつ渡した。そのあとで、自分用の紙コップにお茶を注いで、一気にあおる。
「それで、どこまで話したっけ？」
「深谷って人を殺したのはさとうかもしれないってところまでです」
「そうだった。状況を考えると、１２０８号室にいたのは松坂さとうで、しょうこちゃんに遺体なり凶器なり、見られたら困るものを見られて、口封じに走った。みつがしょうこちゃんにさとうの所在を教えたのは、１２０８号室で何が起きているのか知らなかったから。その方が自然じゃない？」
自然じゃないかと問われれば、自然だろう。実際のところ、しょうこが目撃したのは、しおといっしょにいるさとうなのだが、それ意外は概ねそのとおりだ。
「でも、なんでさとうは深谷って人を殺したんでしょう？」
「可能性がありそうなのは痴情のもつれ？　五島さんは援助交際かもねって言ってる」
しょうこがなんとも言えない表情になった。あさひは、それも違うのではないかと思ったが、やはり口にはしなかった。
それよりも、遺体の一部がみつかったということは、遺体のある部屋でさとうとしおは寝起きをしていたのか。その事実に、あさひは気分が悪くなるものを感じた。どうやら、しょうこも同じらしい。
「と、まあ、私たちは考えているんだけど……残念ながらこの事実を立証はできないのよ」
「え？」
しょうこが驚いた声をあげた。
「どういうことですか？」
「えーとね、君たち、裁判の仕組みについては学校で習ったかな？　刑事裁判というものは、その人の犯行だと立証できる可能性がないと、

起訴できないのよ。で、立証のためには確実な証拠とか証言とか、いろいろなものを使うんだけど、この中で、『自供』というのは非常に有効なものだし、今回は自発的にやってるから、さらに有効性が高くなるのね」

まともに学校に通っていないあさひには、裁判の仕組みと言われてもよくわからないし、葉山の主張の中身もやはりよくわからない。しょうこの方はなんとか理解できているようで、表情が強張っている。

「今回のケースは、松坂みつがすでに自供をしているし、証拠も揃っている――少なくとも、放火についてはね――一方で、松坂さとうの犯行を証明するものは何もない。実際のとこ、署内でさとうがやったと思ってるのは私と五島さんぐらいなの。この分だと、検察は松坂みつを起訴しちゃうでしょうね」

「そんなっ！」

しょうこが声をあげた。葉山がやや困ったような表情になる。

「といっても、放火は確実だし、現住建造物等放火ってのは重罪で、死刑もありうるんだよね。放火は他所の家に飛び火したり、そこに人が住んでる場合は、中の人が焼け死んだり重傷を追ったりする可能性があるから、そんな危険な行為は、当然重い罪になる。しょうこちゃんのことにしても、殴ったのはさとうでも、あの部屋にしょうこちゃんを置いて火をつけたんだから、松坂みつの方も充分殺人未遂に問えるし。このまま起訴したとしても、事実からかけ離れてるわけでもない」

「さとうの叔母さん、死刑になるんですか？」

「ん～、検察の求刑次第かな。弁護側は精神鑑定を受けさせる気みたいね。でも、あの様子だと、イカれてはいても責任能力は問えるって鑑定になりそう。といっても、火事の被害が甚大なものになったわけじゃないから、死刑まではいかないでしょう。殺人と放火のあわせ技で……無期懲役？」

無期ということは、ずっと出てこないのだろうかとあさひは思った。さとうの叔母さんとやらのことはわからないし、法律や裁判と

いった話はもっとわからない。
……ただ、さとうがおとがめを受けないというのだけはずるいと思ってしまった。
「理解できないのはさ～、あの人こういう話をしてもずーっとヘラヘラ笑ってるんだよね。見てると背筋が寒くなってきちゃって……」
そこまで葉山が話したときだった。不意に葉山のハンドバッグから電子音が響いた。
「あ、ちょっとごめんね」
葉山はバッグから携帯を取り出すと、通話に出た。病室の隅の方に行って、何やら話し始める。
「え？　なんなんですかそれ。そんなんありえるんですか。あーもう、わけわかんない！」
何かが起きたらしい。あさひとしょうこは顔をみあわせるしかできなかった。葉山はしばらく携帯で話していたが、やがて通話を終え、携帯をバッグに戻すと、困ったような表情でこちらを向いた。
「ごめん、署でトラブルが起きちゃった。もう少し事件の詳細話したいけど、私、向こうへ行かないと」
「あ、はい。どうぞ、行ってください」
葉山はバッグに手をつっこむと、皮のケースを取り出した。それを開けて、中から名刺を二枚取り出し、二人に一枚ずつ手渡してくる。
「これ、私の名刺。連絡先書いてあるから、なんか思い出したことあったらここに連絡ちょうだい。それじゃ。あ、緑茶の残りは好きに飲んでいいよ。それとあさひ君、ここ、面会時間は午後六時までだからね。あと、しょうこちゃんに変なことしちゃダメだよ」
「そんなことするか！」
思わず、怒鳴ってしまったあさひだった。この刑事は、自分をいったいなんだと思っているのだろうか。
もちろん、傍から見ればあさひはホームレス同然の生活をしている怪しい少年で、相手によっては確実につまみ出されかねないのだが、そういう事実には、悲しいかな、あさひは思い当たっていなかった。
一方、葉山は図太いのかズレているのか、「それじゃあね、二人とも」

と手を振って、病室を出て行った。

「なんなんだ、あの刑事……」

葉山が出て行ったあと、脱力しながらあさひは呟いた。

「でも悪い人じゃなさそう」

「そうか？」

「悪い人だったら、わざわざあんたを連れてきたりしないって」

そう言われても、イマイチ納得できないあさひだった。正直、彼女といっしょにいて思ったのは「疲れる」「精神力をガリガリ削られる」という感情なのだ。もちろん、しょうこに会わせてくれたのは嬉しかったが。

「ねえ」

そんなことを考えていると、しょうこが声をかけてきた。思いつめた表情をしている。

「刑事さん、さとうはみつかっていないって言ったよね」

「ああ」

「しおちゃんもみつかってないんだよね」

「……」

言葉が出ない。しょうこが悲しそうな表情で下を向いた。

「どこにいるのかな」

それはあさひも気にかかっていた。……とはいえ。

「しおは……俺を知らないって言った」

「えっと、それは……ほ、ほら。別れたとき、しおちゃんまだ小さかったんでしょ？　人の顔って成長すると変わるっていうから、それでわからなかったのよ、きっと」

しょうこの言うことはもっともだ。だが、あさひにはどうしても納得できなかった。それに、家族よりもさとうのような人間を選んだのもショックだった。

「あいつは、人を殺した。親友のあなたも殺そうとした」

しょうこが辛そうな表情になる。それでも、言わずにいられなかった。

「刑事さんに話した方がいいと思う？」
「しおのことをか？」
「それもだけど、さとうが私を殴ったんだってこと。体調が戻って思い出せたって言えば、刑事さんも特に変だとは思わないだろうし。でも、詳細をつめられたら、きっとごまかしきれないから、しおちゃんのことも話さなくちゃならなくなると思う」
葉山はつかみどころがないが、鋭いところもある。しょうこが嘘を突き通すのは難しいだろう。
だがあさひは葉山のことが信用できなかった。葉山のことだけではなく、世の中の人のほぼすべてが信用できない。例外はしょうこぐらいなものだ。
あさひが考え込んでいると、しょうこがあさひの手を握った。思わずそちらに目を向ける。
「ありがとう」
「え？」
「助けてもらったお礼、まだちゃんと言えてなかった。私を助けてくれて、ありがとう」
そう言った言葉にも瞳にも迷いはなく、ただ純粋な感謝の気持ちが溢れていて。
それが何故か、苦しかった。

世界というもの

「葉山、今日は非番だったんだし、無理してこなくてもよかったんだぞ」
「あんな話聞いたら飛んできちゃいますよ」
「と言われてもなあ。もう事態は収束してるし、とくにお前ができることはない」
「ん～、まあそうなんですけど、五島さんの意見を訊きたいこともあって」
「明日まで待てばいいだろう」
「うっ、それはそうなんですが」
「まあ、もう来てしまったのだから帰れというつもりもない。どっちから話す？」
「えーと、私の話の前に、まずそっちの詳細聞かせてもらえます？」
「ん、ああ。伝えたとおり、松坂みつが拘置所からの脱走を図った……というより、松坂みつを拘置所から逃がそうとした奴がいた。光瀬という若い巡査なんだが。おかげで拘置所は大騒ぎだし、署内も大騒ぎ」
「なんだってまた光瀬巡査はそんなことを？」
「本人は黙秘を貫いているが、同じ交番に勤務している横井という巡査が喋った。以前、松坂みつのところに行ったことがあるとな。そのときに、松坂みつは光瀬を誘惑したらしい」
「うっ……」
「吐くなよ」
「吐きませんよっ！　吐き気はしますけど！　で！　なんで光瀬と横井は松坂みつのところに行ったんですか？」
「異臭がするという通報があったそうだ」
「あのゴミ部屋なら異臭もするでしょうねえ」
「横井によると、ゴミしかなかったらしいが、そのときに松坂みつが光瀬にちょっかいを出していたとかで、そのときは戻ったが、たぶんまた松坂みつのとこに行ったんじゃないかと言っていたな」

「で、光瀬はあっさりふらふらと松坂みつの誘いに乗ったと。バカですね」
「まあ、バカだな。懲戒免職は免れんだろうし」
「それで、松坂みつはこの件についてはなんて？」
「『頼んでない』だそうだ。光瀬も、自分の一存で逃がそうとしたと言っている」
「ほんっと、救いようがないバカ」
「それは認める。拘置所に拘留されている被疑者を逃がそうとするとはな。一生を棒に振ってどうするんだ、あいつ」
「にしても、松坂みつって何者なんですかねえ。私には気持ち悪い人にしか見えないんですが」
「お前にしちゃ辛辣だな。何者なのかは私にもわからん。……この分だと、起訴のときもなにかやらかすんじゃないかと心配になる」
「そういや、その起訴、いつごろになりそうです？」
「検察はとっと起訴したいみたいだな。本人が罪状を認めているんだから、と。まだ余罪がありそうだから、とは言ってあるが」
「あの人のことだから、裁判の席で『自供は嘘です。脅されました』とか言い出しませんからね？」
「ありえない、と言えないのが怖いな。とはいえ、物証も多いし覆ることもないだろう。で、葉山、お前の話は？」
「ああ、それなんですけどね。神戸あさひ君をみつけたので、彼を連れてしょうこちゃんのお見舞いに行ってきました」
「そういや、施設を脱走したんだってな。……よくみつけたな」
「ラッキーでしたよ。以前に目撃情報があった公園にまたいたんです。あそこが寝場所なのかも」
「ふむ。で、何か話したのか？」
「あさひ君からは、特に何も。ただ、しょうこちゃんとのやりとりを見ていて思ったんですが、しょうこちゃん、たぶん、本当は何があったのか憶えています。憶えているというか、思い出したというか」
「根拠は？」
「残念ながら、今のところは勘だけです」

「勘、ねえ……自分を殺しかけた人間のことなんか、庇わなくていいだろうに」
「あの年頃の子は難しいんですよ。ひとつ間違うと精神状態がグチャグチャになるし、親も教師も信用できない、信頼できるのは友達だけなんてのもよくある話だし」
「だからってなあ」
「五島さん、この事件、どうなるでしょう？」
「このままだと、松坂みつを起訴して終わりだな。物証があるし自供も取れてるから有罪なのは確かだろう。松坂さとうの方の関与を示すものは現時点では特にないから、家出人扱いだ。飛騨しょうこが証言すれば、殺人未遂で手配できるだろうが。彼女を説得できるか？」
「しょうこちゃんの証言を取れるかどうかは、わからないですねえ……あの子もあまり人を信用しないタイプのようです。おまけにあの年頃は、友達に対して忠誠みたいな感情を抱きがちだし」
「間違っているとき、それは間違いだと言ってやるのも、友達の役目だと思うがな」
「怖いんですよ。自分の周りの世界が壊れてしまうのがね。子供にとって、世界というのは狭いものなんです。本当は世界は広いのに」

物思う夜

あさひが見舞いに来た日の夜、しょうこは寝付けずに、病室の天井を眺めていた。彼が見舞いに来てくれたのは嬉しかったが、刑事から聞かされた話は、しょうこに様々な悩みをもたらしていた。

さとうは、しおと共に行方をくらませている。いったいどこに行ってしまったのか。いやそれ以前に。

１２０８号室の住人だった、深谷という男性。彼を殺したのはさとうではないかと、刑事は言っていた。

しょうこは、さとうの話を思い返していた。さとうはしょうこに、恋人ができていっしょに住み始めたと話してくれた。その相手はさとうとつりあう年齢の男性だろうと思っていたが、あれはしおのことを言っていたのだろうし、そうなら、彼女が自分に会わせたがらなかった理由もわかる。いきなり恋人だと言って小学生の女の子を紹介したら、しょうこはあわてふためいて何を口にしたかわからない。加えて、しおはただの子供ではなく、厄介な事情持ちだ。

さとうの恋人について詮索しなかったら、どういう状況になっていただろう？　今までのように、いっしょにバイトに行って、たまに街で遊んで、さとうの話を聞き、自分も話す。そんな、なんでもない日常が続いていただろうか。マンションは火事にならず、さとうも行方もくらまさず、二人だけの箱庭はそのままだったのだろうか。

……でも、それでは、あさひはずっとみつからない妹を探し続けてしまう。ろくに食事も取らず、満足に眠ることもできず、毎日のようにポスターを貼って、危ない目にあって。下手をしたら死んでしまうかもしれない。

あさひのためには、踏み込んだのは正解だったのだ。でもそれは、さとうのためにはならない。踏み込むべきだった？　距離を置くべきだった？

あのとき目をそらさないで、さとうの欲しがった言葉をかけてあげられれば、良かったのではないか？　どうして自分はあのとき、目をそらしてしまったりしたのだろう。目をそらさずに彼女を受け入れ、

時間をかけてゆっくりと信頼を得ていたとしたら？　さとうが自分に、しおのことを話しても構わないと思えるくらいになるまで。そうしたら、ふたりの架け橋になってあげる、そんな可能性も、あったのではないだろうか？

けれど、「恋人ができた」と言ったとき、さとうはもう、人を殺してしまっていたのだ。１２０８号室の住人だったという男性を。しおの存在までならともかく、人を殺した相手を、受け入れてあげられただろうか？

さとうは何故、その人を殺したのだろう。しょうこはさとうがその男性を殺すところを想像してみようとしたが、うまくいかなかった。１２０８号室の男性について知っているのは名前だけで、年恰好などはわからないし、その人がさとうとどんな関係だったのかもわからない。だからその姿はしょうこの中で黒い影にしかならなかったし、それと対峙しているさとうの姿を思い描いても、二人は身動きもせず、ただ佇んでいるだけであった。

わからない。いくら考えても何もわからない。

胸の奥が苦しい。しょうこはもがき、身体を起こした。嫌な気持ちから解放されたくて、首を回す。そのとき。

テーブルの上に置かれた花瓶が、目に入った。今日、あさひが持ってきてくれた花が生けられている。

それを見たとき、わずかだが心の辛さが軽くなった。だが、次の瞬間、また別の感情の波がしょうこの心を襲う。

もしかしたら、自分は……。

ダメだ、としょうこは思った。このままではダメだ。答えを、出さないと。

あさひは寝場所にしている公園のベンチの下で、目を覚ました。ついさっきまで、嫌な夢を見ていた。しおが行ってしまう夢だ。しおは夢の中で、あさひを拒絶して、さとうといっしょに行ってしまった。

夢だけど、夢じゃない。あさひはそう思った。実際、しおはあさひを拒絶して、さとうを選んだのだ。

いや、それだけではない。
あさひはごそごそとベンチの下から這い出して、ベンチの上に腰を下ろした。目が冴えてしまって眠れそうにない。
頭上を見上げると、晴れた夜空に月が浮かんでいた。満月と呼ぶにはやや欠けた月だ。以前は、月を見るとしおを思い出して心が慰められたものだったが、今は、なんともいえないくすぶった感情がこみ上げてくる。それがなんなのか、自分でもよくわからない。
しおはいなくなり、母は壊れた。もう、何も残されていない。生きている意味など、あるのだろうか。
そう思ったところで、あさひは首を横に振った。以前しょうこが自暴自棄になったとき、必死で彼女を慰めた。助けてくれようとした優しい彼女に、泣いてほしくなくて。
ここで自暴自棄になってしまったら、しょうこはきっと傷つくだろう。傷ついて、自分を責めて。それだけは、してはならないことだ。
彼女だけは。自分が救った彼女だけは、報われて、幸せになってほしい。
あさひはため息をつくと、寝なおそうとまたベンチの下に潜った。自宅に戻ることも考えたのだが、誰もいない家に一人でいると、ストレスでおかしくなりそうだった。
ふと、葉山の言葉が思い出された。「施設で食事と衣服と寝るとこと教育の権利をしっかり受けとった方が身のため」と彼女は言った。
彼女の言葉は正論なのだとは思う。だがあさひはどうしても、施設で生活したいとは思えなかった。かといって、ひとりで生きていく方法も思い浮かばない。
だけど。
この公園で野良猫のような生活を続けるのは、どうなのだろう。そう遠くないうちに、野垂れ死に、とまではいかないまでも、ひどい状況にはなりそうだ。実際、暴力も受けた。
未来は真っ暗で、先が見えない。しおをみつければ、光で照らされるのだと思っていたけれど、その夢は潰えた。この先、いったいどうしたらいいのだろうか。

朝が来ても消えない

「飛騨さん、起きてますか？」

かけられた声で、しょうこは目を覚ました。いつの間にか朝になっていた。夜眠れなかったせいで、覚醒時間がズレこんでしまったようだ。

「あ、はい。起きています」

しょうこはベッドから降りた。入り口のドアを開けると、食事のワゴンを押している看護士がそこにいた。

「すみません、ちょっと昨夜は寝付けなくて」

そう口にして、朝食を受け取り、ベッド脇のテーブルに置く。病院の食事は味付けが薄い。あまり美味しくない、としょうこは思った。ついでに言うなら、食欲もそんなにない。でも食べなければ、体力が回復しないし、点滴のお世話にもなってしまう。

義務感で食事を口に詰め込み、食べ終えた食器を戻しに行く。看護士さんが来て、体温を測る。平熱だ。そのあとお医者さんが来て、傷の状態を見てくれた。回復は順調、らしい。この分だとじきに退院できますね、と言われる。

退院。それは、日常に戻るということだ。本来なら嬉しいはずなのに、しょうこは憂鬱な気持ちになってしまう。あの家に戻って、うまくいっていない家族と生活をして……学校にも、通わなくてはならない。事件の報道で自分の名前が被害者として出ているから、表向きは腫れ物に触るような扱いをされるだろう。それでいながら、きっと影ではあれこれと噂をされてしまうのだ。

その光景をつい鮮明に想像してしまい、しょうこの気分はさらに重くなった。しょうこが通っているのはエスカレーター式のお嬢様高校で、クラスメイトの中には幼稚園のころから見知っている人間もいるが、今まで「本当に仲の良い友達」というのは作れずにいた。自分のどこに問題があるのかはよくわからないが、何故かいつも、人との間に薄い膜が張っているかのような気持ちにさせられてしまう。

だから、さとうが初めてだったのだ。あそこまでいっしょにいた

い、と思える人間に出会えたのは。
でも、彼女は人殺しで。いや、何か事情があったのかもしれないけど。でも、あの部屋にはずっと死体が。
思考が混乱してきた。しょうこは立ち上がり、窓辺へと向かって、空を見上げた。今日の空は半分くらい雲に覆われている。
少し他のことを考えた方がいいかもしれない。そう言えば、バイトはどうしよう。両親に確かバレていたはずだが、いくらなんでも店に怒鳴り込むまではしていないはずだ。……していないと思いたい。
とはいえ、バイトは続けられるのだろうか。仮に店の方から「やめてください」と言われなかったとしても、さとうとの思い出でいっぱいのあの店で、今までどおりに働けるのだろうか。
……やめよう。不毛だ。しょうこは病室にいる気にならず、ドアを開けて廊下へと出た。午前中の廊下は閑散としている。しょうこは廊下を歩き、休憩スペースへと向かった。理由は特にない。
休憩スペースで、しょうこは椅子のひとつに座り、置いてあった新聞を手に取った。日にちが経過しているせいか、マンションの放火事件についての記事は載っていない。今大きな見出しになっているのは、大物芸能人が麻薬で逮捕されたという記事だ。興味はなかったが、とにかくそれを読む。
集中できないながらもなんとか活字を追っていると、不意に、足に何かがぶつかった。見ると、六十代ぐらいの松葉杖の女性が立っている。どうやら、通り過ぎようとして、しょうこの足に松葉杖をぶつけてしまったようだ。
「ごめんなさい」
「あ、ええと……大丈夫です。痛くはなかったですし」
女性は静かな笑顔を浮かべた。穏やかな、優しい笑顔だった。対処がわからず、しょうこはぼうっとしてしまう。
気まずくなって、視線をさまよわせる。女性は足にギプスをはめていた。事故か、何かだろうか。
「ああ、これ？　道を歩いていたら、自転車にぶつかられてね。そのとき、倒れ具合が悪かったらしくて、こう、ぺきっと」

ギプスをみつめるしょうこに気づいたらしく、女性は自分からそう口にした。歩道を走る自転車って怖いわ、とおっとりと笑う。
「でもね、お医者さんに聞いたら、頭を打ったり、ひどいと亡くなったりすることもあるっていうの。これくらいなら、私はきっと運が良かったのね」
運。運とはなんだろう。殺されかけて助かった自分も、幸運だったと思われていたりするのだろうか。
「お嬢さんは？」
「……う、あ……えっと、その……」
さすがに、殺されかけたとは言えない。口ごもるしょうこに対し、女性は笑顔のままだった。
「ああ、ごめんなさい。言いたくないのなら無理に言わなくていいのよ。ダメねえ。年を取ると、つい詮索してしまって」
「い、いえ、それはまあ、いいんです。ただやっぱり、人に話すのは辛くて」
そう言うと、女性から笑顔が消えた。代わりに浮かんできたのは、こちらを案じる表情。
「お嬢さん、通りすがりの私が言うのもなんだけどね、辛いときは、無理をしてはダメよ」
「無理……ですか」
「ええ。もちろん、通りすがりの私のような人間に話せとは言わない。でも、お嬢さんの信頼できる誰かに、話を聞いてもらえるのなら、そうした方がいいと思うわ」
信頼できる相手……？　そんなのいただろうか？　両親も学校の先生もクラスメイトも、誰も信頼などできはしない。
以前だったら、さとうがそうだった。なんでも聞いてくれた……といっても、せいぜいが家庭や学校に対する不満ぐらいだったが。そしてそのさとうが、今は自分の心を悩ませている主要因だ。
「私……友達に、ひどいことをしてしまったんです」
あれこれ頭を悩ませているうちに、しょうこの口から滑り出したのは、そんな言葉だった。言ってしまって思わずあわてる。

「ひどいことって？」
　しょうこは腹をくくった。きっと、この女性とは病院を出たら二度と会うことはない。なら、当たり障りのない部分を聞いてもらおう。
「大事な人で、ずっと仲良くしたいと思っていたのに、肝心なときに彼女を助けてあげられず、見捨ててしまいました。それで、もう関係はおしまいって言われたんです。もう友達じゃないって」
「それで、お嬢さんはその子に謝ったの？」
「はい。ですが、受け入れてくれませんでした」
　女性はしばらく神妙な表情で考えていたが、やがて口を開いた。
「お嬢さん、これはあくまで、私という一人の人間の意見でしかないけれど、人は誰しも間違うときがあるわ。いつも正解を選べるものではないの。みんな未熟で不完全なのよ。それは、この年齢になっても、そう。だから、お嬢さんがひどいことをしてしまったというのなら、そうなんでしょう。でも、きちんと謝ったのに、許してもらえないのなら、それはもう、向こうの問題。その経験を糧にして、あなたは、次のステップに進んだ方がいい」
「次のステップ……？」
「何でもいいから、やりたいことをおやりなさい。あなたの心を満たしてくれるようなものをね」
　そう言われても、やりたいことがしょうこには思いつけなかった。もともと学業に興味はないし、打ち込めるような趣味を持っているわけでもない。
「あとね、それは、できたら、自分ひとりでできることの方がいい。誰か他の人を必要とするようになると、人は自分で生きられなくなるから」
　女性の言うことが、しょうこはよくわからなかった。この人は何が言いたいのだろう？　人は一人では生きられないのではないだろうか？
「お嬢さんはいい人ね」
「はい？」
　突然そう言われ、しょうこはあっけに取られた。
「通りすがりの人間の話を、そんなに真剣に聞いてくれるのだから、あ

なたはきっといい人なのだと思うわ」
「それは……私が今、ひどく悩んでいるからだと思います。普段はこうじゃないですよ」
　別に自分は真面目な人間ではない。授業はどちらかというと適当に受けているし、難しい話を聞くのも苦手だ。
　でも、褒められたのは少し嬉しかった。
「あなたが何を悩んでいるのかはわからないし、きっと、知らない方がいいでしょう。でも、ひとつだけ言えるのは、他の人の苦悩を背負ってはダメ。人間は神様ではないから、そんなものを背負ったら潰れてしまう。お友達のことが気がかりなのでしょうけれど、こういうときは、距離を置いた方がいいと思う。それで消えてしまう関係ならそれまでのこと」
　それは、少し冷たいのではないかとしょうこは思った。
「自分を守ってもいいのよ」
　やっぱりよくわからなかった。だが、彼女が通りすがりの自分のことを心配してくれているのだ、というのだけはわかった。だから、しょうこは「ありがとうございます」と言って、自分の病室に戻った。

新たな決意

それから二日後。病院の外に出たしょうこは大きく伸びをした。入院生活はこれで終わりだ。まだ何度か検査のために通わねばならないが。

一度自宅に戻ったが、両親は不在だった。少し心が痛んだが、今はそれよりもやらねばならないことがある。テーブルの上には新しい携帯があった。感謝、すべきなのだろう。

しょうこは着替えてから携帯をバッグに入れ、もう一度外に出た。駅へと向かい、電車に乗って、いつもの駅で降りる。

見慣れた景色を見ると、胸の奥がちくっと痛んだ。景色は変わりがないように見えるのに、自分も、自分を取り巻く状況も、すっかり変わってしまった。

バイトをしていたカフェは、ここからそんなに遠くない。だが、今の行き先はそこではない。しょうこは、いつもあさひと会っていた公園に足を向けた。今も彼がここにいるとは限らないが、何故だか、ここにくれば会えるという、不思議な確信があった。

思ったとおり、あさひは公園でベンチに座り、物思いに沈んでいた。いつも彼に会うのは夜だったので、昼間に会うのは妙な気がする。

「こんにちは」

あさひはしょうこに気づいていなかった。しょうこは近づいて、声をかける。第一声がこれ、というのもなんだか妙な気がしたが、他に何を言えばいいのか、わからなかった。

あさひがはじかれたように顔をあげ、しょうこを見た。

「えっ……」

しょうこがここにいるのに驚いているようだが、拒絶している様子はなかった。その様子に安心を感じつつ、言葉を口にする。

「隣、いい？」

「あ……う、うん。そっちこそ、もう怪我はいいのか？」

「うん。今日退院したの」

しょうこは、あさひの隣に座った。そして、どうやって話を切り出

そうかと考える。
「あ、あのね……相談したいことがあるの」
悩んだが、結局、単純な切り出しになった。
「相談？　なに？」
「わ、私……あれから、いろいろ考えたの。さとうのこととか、しおちゃんのこととか。……さとうが私を殺そうとしたのはわかっている。でも……それでも、どうしても私はさとうを嫌いになれない。私の中ではまだ、さとうは『友達』なの」
それがしょうこが出した「結論」だった。殺されかけたのだといくら思っても、さとうを嫌えない。彼女にすまないことをしてしまったという罪悪感や、そういうのを考慮に入れても、さとうの顔を思い浮かべる度に、まとわりつく感情は「友達」なのだ。
一方で、その感情は愚かだと、あさひは思った。さとうはためらいもなくしょうこを切り捨てられる人間だ。そんな人間を大事に思って、なんになる？
「あんたからしたら、さとうはしおちゃんを連れてって、私のこと、殺そうとして、最低な人間かもしれない。でも、仲の良かった時間もあるの。いっしょにいて、楽しかったし、思い出もある。それに、しおちゃんのことだって伏せて、恋人について話すときのさとうは、本当に幸せそうだったの。そして、その事実を話してくれたのも、私にだけだった」
最終的に道を違えてしまったとしても、それでも、かつてのさとうにはしょうこに対する友情はあったのだ。
「でも、あいつは人殺しだ。あいつがしおと暮らしていた部屋にいた奴、あいつが殺したんだろ」
しょうこは視線を伏せた。さとうが何故人殺しに手を染めたのか、それは自分にはわからない。
「そう……なんだよね。それは悪いことだっていうのはわかってるけど、友達だって気持ちも消えないの」
あさひは納得がいかない気持ちでしょうこを眺めていた。そう思うのは、結果として、しょうこ自身を苦しめるだけではないだろうか

？
「それはわかったけど、何を迷っているんだ？」
「うん、あのね……。私、警察に、全部話したい」
しょうこの言葉にあさひは驚いた。警察に話すというのは、さとうに殺されかけたことをだろう。しょうこの性格なら、むしろ友達をかばって黙秘を貫きそうなものなのに。
「どうして……？　大切な友達って、言ってたよね？」
あさひの疑問はもっともだとしょうこは思った。これは普通なら「友達を売る」行為だ。だけど。
「うん。大切な、友達。だけど……なんて言うのかな。いけないことは、やっぱり、いけないんだと思う。このまま黙って、さとうのやったことをなかったことにしては、いけないって。でも、警察に言うとなると、しおちゃんの話もしなくちゃならなくなる。……あんたが、しおちゃんのことを話してほしくないのなら、警察に話すのは諦める」
それもひどく悩んで出した結論だった。目を塞ぎ、知らない振りをするのが、いいこととは思えない。だから、自分はあのとき、ふたりを写真に撮った。
瞳に涙をにじませて、しょうこは決意を口にする。あさひにはその表情が、ひどくあやうくて壊れやすいものに映った。
そんな表情をされてしまったら、もう、何も言えない。
「俺からも、ちょっといいか？」
「うん、なに？」
「前から、引っかかってたことがあるんだ。あのとき……あの火事の日、俺はあなたを置いて、しおを追いかけることもできた。……でも、できなかった」
あさひは身体の向きをわずかに変えて、しょうこと斜めから向かい合う形になり、彼女の手を握った。
「誤解しないでほしい。あなたを責めているんじゃない。でも、俺はあの時、しおじゃなくてあなたを選んだ。……だから、俺にはもう、しおを探す資格なんてない」

ずっと、心に引っかかっていた。ほとんど無意識に近い選択肢ではあったが、あのとき、あさひはしおではなくしょうこを選んでしまった。しおより大切なものはないと思っていたはずなのに。
「そんなの……そんなの、仕方がないじゃない！　私は自力で動けなかったの。あんたは私を見捨てられなかっただけ。選んだとか、そういう次元じゃない！」
さっきまで涙ぐんでいたしょうこが、今度は怒った声でそう言ってくる。その声が、何故か、嬉しい。きっと自分は、この声が、この言葉が、聞きたかった。
「あなたは、やっぱり、優しい」
「……バカ！」
「だから、いっしょに警察に行こう」
あさひがそう言うと、しょうこは驚いた表情であさひを見返した。
「え……え……？」
「いっしょに警察に行って、全部話そう。しおのことも、さとうのことも」
彼女がしたいと思うことに添おう。どのみち、もう自分にできることなどそんなにないのだ。それなら、せめて。
「……いいの？」
ためらいがちな口調で、しょうこは尋ねた。あさひが苦笑する。
「俺は今までずっと、母さんとしお以外、信用できる人間なんていないと思っていた。でも、あなただけは、信用できる。あなたは、俺が初めて出会った、信用できる家族以外の人間なんだ。そのあなたの望みだから」
「うん……ありがとう」

判明する事実

しょうことあさひは警察に行こうと思ったが、葉山からもらった名刺のことを思い出し、そちらへ連絡することにした。いきなり警察に行くより、その方が早く対応してもらえそうだったからだ。

公園から葉山の携帯に連絡を入れると、すぐに折り返しで通話がきた。事件のことで話したいことがあると言うと、葉山は「こっちから出向くから、場所を教えて」と言ってきた。

居場所を伝えて、待つこととしばし。やがて、公園の入り口に、葉山と五島が姿を現した。勤務中だからだろうか、今日は二人ともスーツ姿だ。

「しょうこちゃん、退院したのね、おめでとう」

葉山は明るい笑顔でそう言った。五島の方は真面目な表情で「おめでとう」と口にした。

「ありがとうございます」

「それじゃ、あそこの東屋で話をしましょ」

葉山が公園の隅にある東屋を指差した。L字型の大きめのベンチが置かれている。そこで、しょうことあさひは二人の刑事に、経緯も含めて、自分たちの知る限りの事件の真実を語った。

話が終わると、葉山と五島は両方ともひどく驚いていた。二人はしばらく顔を見合わせていたが、やがて、五島の方が口を開いた。

「それを私たちに話したということは、君たちは松坂さとうを告訴したいんだな？」

あさひは言われた意味がわからず、口をつぐんだ。しょうこはあさひの隣で目を白黒させている。

「えええっと……」

「あのね、『この人悪いことしたので、捕まえてください』って警察に頼みたいのかってこと。あさひ君の目撃証言があれば、松坂さとうを未成年者誘拐罪で訴えられる」

あさひは法律の仕組みをほとんど知らなかった。なので、知らされた事実に唖然とするしかなかった。

「あ、でも」
葉山の表情が曇る。ちら、と五島を見たあと、彼女はまた言葉を続けた。
「ごめんね……誘拐罪で指名手配するのは可能なんだけど、たぶんもう、さとうを捕まえることはできないと思う」
「どういうことですか？」
しょうこの問いに、葉山はすまなそうな表情になった。
「松坂さとうと神戸しおの二人は、おそらくもう国外に出ちゃってるのよ」
「え？」
「しょうこちゃん、宮崎すみれって子を知ってる？」
宮崎すみれ。その名前は当然しょうこの知っているものだった。
「はい。同じバイトの子です」
正直言うと、仲はあまり良くない。すみれは無口で、しょうこはほとんど喋ったことはなかったが、たまに話すと、なんというか、敵意のようなものを感じるのだ。そうなると、しょうこのほうも愛想よく対応するとはいかない。傍目にわかるほどもめているわけではないが。
「その子がね、警察に白状したの。さとうに頼まれて自分と妹のパスポートを貸したって。入国管理局に問い合わせたら、その二人のパスポートを使った人物が、火事の起きた日の朝に、スイス行きの航空便に乗り込んでたってのもわかったの」
しょうこは驚きのあまり、言葉が出なかった。そして、それはあさひも同じだった。さとうは確かに思い切った手を使う人間だが、国外への逃亡を図るとは。
「……バカな子だよ」
五島が吐き捨てるように呟いた。思わず彼女の顔を見る。その顔には、苛立ち、焦燥、やるせなさ、そんなものが入り混じった表情が浮かんでいた。
「バカ、なんですか」
しょうこが乾いた声で尋ねた。

「ああ、バカだ。あの年齢で、身元を保証する人間もなく、言葉の通じない国へ行って、どうやって生きていく気だ。松坂さとうはドイツ語やフランス語が話せるのか？」
　しょうこは首を横に振った。さとうは外国語はできない。学校の授業は嫌いだと言っていた。自分も嫌いだったから、そこでも話はあった。バイト先に外国人の客が来ても、日本語で話していた。
「言葉が使えないってのは、大きなハンデなんだよ。加えてヨーロッパじゃ東洋の容姿は目立つし、年端もいかない少女と子供だ。向こうの警察にでも逮捕されてくれればいいが、悪い奴らにつかまったら、どんなひどいめに遭うのかなんて想像もしたくない。冗談抜きで死ぬまで変態どもの相手をさせられかねん」
　がたんという音がした。あさひが蒼白な表情でよろめいている。しょうこはとっさにあさひの身体を支えた。
「大丈夫？」
「そんな……しお……」
　何をどうしたらいいのかわからず、しょうこはあさひの背をさすった。あさひの身体がぐらっと傾く。しょうこはとっさに姿勢を変え、あさひを抱きとめた。あさひの両腕がしょうこの背に回り、しがみつく。
　かけてあげられる言葉などない。しょうこはただ、震えながらしおの名をつぶやくあさひを抱きしめていた。きっと、彼は泣いているところなど、見られたくはないだろう。
「……ごめん、迷惑かけた」
　あさひが落ち着くのには、しばらくの時間がかかった。赤くなった目の周りをこすりつつ、前を向く。しょうこは彼の背に片方の腕を回したままでいた。
「はい、これ」
　葉山が濡らしたハンカチを差し出す。あさひが泣いている間に濡らしてきてくれたようだ。あさひが逡巡していたので、しょうこが代わりに受け取り、あさひに手渡す。

「五島さん、もうちょっと言葉を選んでくださいよ。五島さんがあの手の人を嫌ってるのは知ってますけど――ついでに言うなら私も大嫌いですけど――身内の前では言葉を選ばないと」
葉山の言葉に五島は答えなかった。表情は無表情に近く、何を考えているのかは読み取れない。
「あの手の人って？」
訊いていいのかどうかわからなかったが、しょうこはつい尋ねてしまった。このあとに続きそうな沈黙に耐えられなかった、というのもある。
「子供を性的に搾取する人。……ああ、ごめんね。オブラートに包みたいんだけど、いい言い回しみつからないし、私も五島さんも、悲惨な実態目にしちゃったことがあって」
「じゃあ、やっぱり、しおは……」
「き……決め付けるのはやめようよ。さとうは言葉はできないけど頭良いし、要領もいいから、きっとなんとかするよ」
気休めにしかすぎない言葉をしょうこは口にした。それでも、言わずにいられなかったし、彼女自身もまた、そう思いたかった。さとうなら大丈夫だと。犯罪に巻き込まれたりはしないと。
「本当に頭が良かったら、生きる当てもないのに海外になど逃げん。言葉も通じない国で、どうやって自分たちの希望を伝える気だ？　ふわっとしたイメージだけで行動しているから、ああいう結果になるんだ」
身も蓋もない言葉を五島が口にした。あさひが思わず五島を睨みつける。
「お前ら……っ！」
しょうこの制止を振り切り、あさひは五島に飛び掛った。が、五島はあっさりとあさひの突撃をかわすと、彼の腕を取って身体をくるっとひねり、あさひを地面に押さえつけてしまう。
「五島さん柔道の段持ってるんだよ。あさひ君、無謀」
葉山がそう言う傍らで、しょうこはあさひの許へと駆け寄っていた。

「離してあげてください！」
「大人しくなるまではダメだ」
押さえつけられたあさひはばたばたともがいているが、五島は刑事だけあってこういう事態には馴れているのだろう。平然としている。
やがて、諦めたのかあさひが大人しくなった。そんなあさひに向かい、五島が声をかける。
「頭は冷えたか？　暴れないのなら離してやるが」
不承不承といった様子で、あさひがうなずく。五島が手を離してあさひから離れると、あさひは不満そうな表情で立ち上がり、衣服についた塵を払った。
「大丈夫？」
「……怪我はしてない」
気遣いの言葉をかけるしょうこにあさひが答える。実際、五島の行動は、攻撃をそらして押さえつけただけで、あさひを傷つけるようなものは一切含まれていなかった。だが、あさひの感情は収まらない。
「だから……だから嫌だったんだ。大人なんて、みんな薄汚い。警察なんか信用できない。誰も助けてくれないっ！」
吐き捨てるようにあさひは叫んだ。五島があさひに近寄り、その両肩に手を置く。
「触るなっ！」
「ひとつ言っておきたいことがある。……さっきは、すまなかった」
思ってもない言葉に、あさひは動きをとめ、目を見開いて五島を見上げた。
「事実とはいえ、被害者に向かっていきなり言う言葉ではなかった。そのことは、反省している」
謝られるとは思っていなかったあさひは、言葉に詰まり、立ち尽くすしかできない。
「あっ……えっと……」
自分が何に対して怒っていたのか、よくわからなくなってくる。そんなあさひの手を、しょうこが握った。
「その上で、訊いておきたい。松坂さとうを誘拐容疑で告訴するか？」

「あの……さとうは国外に逃げちゃったんですよね？　指名手配に意味ってあるんでしょうか？」
　しょうこは疑問を口にした。
「意味はある。松坂さとうが日本に戻ってきた場合、逮捕することができる。松坂さとうだとわかればの話だが。それに、国際指名手配をかけることもできる」
「それって、外国にいても逮捕されるということですか？」
「みつかれば、の話だな。そううまく網に引っかかってくれるかどうかはわからないし」
　しょうこはあさひを見た。あさひも少しずつ話が飲み込めてきたようだ。
「……告訴、します」
　あさひが感情の消えた声でそう口にする。五島はうなずいた。
「わかった。じゃあ、手続きをするから署にきてくれ」
「あの～」
　不意に、葉山が声をあげた。
「署に戻るのはいいんですけど、五島さん、その前にどこかでお昼食べませんか？　調書だの手続きだののことを考えると、先に食べといた方がいいと思います」
　時計を見ると十二時を少し過ぎていた。
「そうだな、軽く食べておくか」

夢の城は砂でできている

時間のかからないところがいい、ということで、昼食の場は近くのファーストフードになった。しょうこにとっては、前にさとうといっしょに入ったことのある店だ。その事実に、やはり胸が痛む。

「あ〜、お前たち、食べたいもの食べていいぞ。勘定はこっちが払うから」

さっきのことを悔やんでいるのか、五島がそう言ってきた。

「そんな、悪いですよ」

「こういうときは、大人に甘えるもんだ」

きっぱりそう言われてしまったので、いいのかなと思いつつ、しょうこは食べたいものを店員に告げた。オーソドックスなバーガーとポテトのセット。飲み物はオレンジジュースにする。あさひも同じものを頼んだ。

「ん？　神戸はそれだけでいいのか？　お前、食べ盛りなんだしもうちょっと食った方がいいんじゃ」

「大丈夫、です」

先ほどの話のショックのせいか、あさひの顔色は冴えない。五島も重ねてそれ以上言うことはしなかった。注文の品が来ると、四人で窓際のテーブル席に移る。

しばらく黙々とハンバーガーやポテトを食べていたが、やがて、五島が口を開いた。

「そう言えば、松坂さとうはなんで神戸しおを連れて行ったんだ？」

しょうことあさひは食べる手を思わず止めてしまった。五島が怪訝そうな表情になる。

「普通、自分と関係のない女の子を連れて行ったりはしないだろう」

「あ……あれ……？　そう言えば、なんでだろう……？」

あさひが首を捻りながら、途方にくれた声を出す。それも仕方のないことだった。もともと宛てもなくしおを探し回っていて、そこへしょうこが目撃情報をくれたから、その場に駆けつけただけで、さとうについては「知っているのに黙っていて、しおを自分の前から隠し

ていた気に入らない人間」としか認識していなかった。だから、その理由についても考えたことがなかったりする。
なお、現在のあさひのさとうに対する認識は「親友で彼女の身を案じていたはずのしょうこを殺そうとしたあげく、しおを勝手にどこかへ連れて行った、ろくでもない人間」というものである。
「さとうとしおがいっしょに映っている画像が送られてきたから、それで『こいつが！』て思ったけど、なんでしおはあいつといっしょにいたんだ……？」
あさひがしょうこを見る。とはいえ、しょうこも細かい事情を知っているわけではない。
「さとうはしおちゃんのことを私にも秘密にしていたから、詳しい事情はわからないけど……さとうはしおちゃんのことを『恋人』だって言ってた」
その場にいた全員が唖然とした表情になる。しょうこも実際、しおがさとうの恋人だったというのは、イマイチ、イメージがわかない。
「神戸しおは八歳だったよな？　その年齢の子が『恋人』だと？」
口にはしなかったが、五島の表情は露骨に「松坂さとうの頭は大丈夫か」と物語っていた。
「私も正直、さとうが何を考え、感じていたのかはよくわからないんですけど……。さとう、私に『恋人ができたからいっしょに暮らし始めた』って言ったんです。すごく幸せそうな表情で。しおちゃんがいなくなった時期と、さとうが恋人と暮らしてるって言い出した時期がいっしょだったし、さとうはあの部屋でしおちゃんと暮らしていたことを考えると、さとうの恋人ってしおちゃんだったんだって……」
「松坂さとうは小児性愛者なのか？」
あまりと言えばあまりの言葉に、しょうこは返事もできず固まった。しょうこの隣ではあさひが困惑している。
「小児性愛者ってなんだ？」
「子供を性の対象とする変質者のことだ」
あさひが食べていたバーガーを取り落としかける。葉山が五島を横目で見た。

「五島さん、だから、言葉を選んでください。身内の前です」
「……すまない。で、えーと、飛騨。松坂さとうというのはそういう人間なのか？」
　しょうこはぶんぶんと勢いよく首を横に振った。これは否定しなければと感じたのだ。
「私の知る限りでは、違います。というか、私、さとうの恋愛対象は『カッコイイ男の子』なんだと思ってたので……。実際、二人でよく男遊びもしましたし……」
　最後の方は声が小さくなってしまった。さとうと男遊びをしていたのは事実だが、それをあさひの前で言うのは気恥ずかしい。
「しょうこちゃん……説教がましいことを言うのは好きじゃないんだけど、気軽にホイホイ男と遊ぶのは感心しないし、やめといたほうがいいよ？　傷つくのはいつだって女の子の方なんだし。自分を守れるのは、自分だけなんだからね。もっと自分を大切にしなくちゃ。病気とか移されたら笑い話じゃすまないし」
　葉山がそんなことを言ってきた。今までだったら聞き流す台詞なのだが、一度死にかけたせいか、心に響いた。忠告を心に留めておこうと思いながら、話を続ける。
「あ、はい……。えと、それでですね、さとうってほら、すごく美人ですから、いっしょにいるととにかく人目を惹くんです。街を歩いていると声をかけられるのもしょっちゅうで、入れ食い状態でした」
「……俺はしょうこの方が可愛いと思う」
　ぼそっとあさひがそう口にした。しょうこが真っ赤になる。
「はい、惚気はそこまで」
「あ、いや……その……えと、俺は純粋にしょうこが可愛いと思ってるだけで」
「だから、惚気はいいから。しょうこちゃん、続き」
「あ、はい。え、ええと……さとうはそうやって遊んでたわけですけど、男遊びが楽しかったっていうんじゃなくて、さとうは『自分を愛してくれるただ一人の人を探している。そういう人がみつかったら、男遊びはやめる』って言ってたんです。だから、私、さとうはついに

本当に愛する人を見つけたんだって思ったんです。私にわかるのはそこまでです」
話し終えると、なんだか疲れた気がした。しょうこはオレンジジュースを口にふくんだ。冷たさと甘さが気持ちいい。
「ん～、てことは、松坂さとうは今までずっと、同性や子供には興味を示さなかったっていうこと？」
葉山の質問にしょうこはうなずいた。
「神戸しおが行方不明になったのは、母である神戸ゆうながノイローゼになったのが原因だったな？」
今度はあさひが辛そうな表情でうなずいた。
「ということは、これは本当の意味での『恋愛』ではなさそうね」
思案気な表情で天井を斜めに見上げながら、葉山はそう口にする。
「えっと？」
葉山の言葉の意味がわからず、しょうこは聞き返した。
「もうここから先は推論と推測ばかりになってしまうから、断言はできないんだけど、恋愛感情が発生するには、一定の精神面での成長――大体、第二次性徴にさしかかるころね――と、『互いがある意味で対等であること』が必要だと思うの。でも、十六歳と八歳は、どう考えても対等たりえない。精神の差も身体の差も、歴然としすぎている」
しょうことしても、八歳のしおがさとうの恋人だというのは、どうにも理解しかねる案件だった。とはいえ。
「でも、さとうは本当に幸せそうだったんです。恋人のために稼がなくちゃって、バイトも増やして。私それで、さとうは悪い男に騙されているんじゃないかって、心配になって」
「松坂さとうが嘘をついていたとは言っていない。私は、さとうは自分の感情を錯覚したんじゃないかと思っている。彼女が神戸しおについて、強い感情を抱いたのは確かでしょう。そして彼女はそれを『恋愛』だと錯覚した。愛情の回路が未発達な人は、様々な錯覚を起こしやすいの。さとうを育てた松坂みつはまともとは言いがたいし、さとうは常に愛情不足な環境で育ったとしても不思議ではないわ」
さとうにとって叔母の存在が潜在的な負い目になっていたのは確

かだった。そのときのことを思い出し、しょうこは辛い気持ちになる。あのとき、目をそらしてはいけなかったのだ。
「そんなさとうが母に放置された神戸しおに出会った。小さくて幼い彼女なら脅かされる心配もないし、無力な存在に人は保護欲を刺激されるという研究もある。さとうがしおに保護欲を感じ、それを『恋愛感情』と錯覚した……というのも、充分ありえる話。
　ここにどういう経緯で深谷が関わってくるのかはわからないけど、松坂さとうからすれば、１２０８号室はまさに『夢の城』だったんでしょう。それは、脆く崩れ去ってしまう砂のお城に過ぎなかったけど」
「私が踏み込まなかったら……」
　言いかけて、これ以上言ってはダメだとしょうこは思った。それだと、あさひは真実を知らずにさまよい続けてしまう。
「うーん、しょうこちゃんが絡まなくても、最終的に松坂さとうはあの部屋捨ててたと思うな。深谷って人、精神的に参ってたとかで仕事を請けてなかったそうなんだけど、彼の絵を扱ってた人に訊いたら、そろそろ仕事に戻りませんかって促そうかと思ってたって言われたの。そうなったら、どの道、破綻しちゃったでしょうね」
　それを聞いても、しょうこの心は軽くならなかった。
「飛騨、自分のせいだと思っているようだが、別にお前のせいじゃないだろう。初手を間違えたのは松坂さとうの方だし、飛騨のことにしたって、どこかに閉じ込めて時間を稼ぎ、その間に逃げる手はずを整えて、逃げる手段が全部揃ってから、脱出間際に警察に通報してお前を救出してもらうという方法だってあったんだ。それをせず、マンション全体を巻き込みかねない火災を起こそうとした時点で――火事は、松坂みつのアイデアかもしれんが――松坂さとうはまともな神経の持ち主とは言いがたい」
「俺も、しょうこのせいじゃないだと思う。……あいつ、頭がおかしい」
　完全に納得はできなかったが、気遣ってくれる気持ちが嬉しかったので、しょうこはとりあえずうなずいた。

「松坂さとうが拾ったのが、犬や猫だったら、なんの問題もなかったのよねえ。あのマンションがペット飼育可だったかどうか忘れたけど」
今度は、葉山がそんなことを口にした。確かに犬や猫なら、なんの問題もなかっただろう。「私の愛する家族！」と、笑顔で紹介してくれたかもしれない。
「人間は、犬猫とは同じカテゴリーに入れられない。それに、二人の関係がどういうものであったにせよ、それは、ままごとのようなものに過ぎなかったと思う」
「そうなのよね。幼子と暮らすのは、ペットを飼うのとは全然違う。ペットは一生かけて面倒をみてあげる存在だし、愛情を注げばずっとこちらを可愛く慕ってくれる。でも人間の子供はそうじゃない。いずれその子は自立が必要になるし、育ってくれれば外から隔絶された環境に不満を抱いたりもする。それに、その子が本来得られるはずの、同年代とのつきあいや教育すべてを取り上げるのはどう考えても虐待よ」
しょうこは、あらためてさとうとしおのことを思った。二人があの部屋でどんな生活を送っていたのかは、もうわからない。それを知ることができなかったのは、良かったのか、悪かったのか。
「しおは……」
不意に、あさひが口を開いた。
「しおはなんで、あいつについていったんだろう」
「それも推測になっちゃうけど、君たちの年齢を考えると、しおちゃんはあさひ君のことを憶えてなかったんじゃないかな。だから、あさひ君を見ても家族とはわからなかった。そして、彼女は一種のストックホルム症候群を起こしていたんだと思う」
葉山はゆっくりとそう口にする。あさひがよくわからないという表情になった。
「ストックホルム症候群？」
「誘拐事件とか、監禁事件とかの被害者が、自分をそうした相手に対して愛情みたいな感情を抱くこと。なんというか、向こうは自分の生殺与奪の権利を握ってるわけでしょ。そういう相手には気に入られた

ほうが、生き延びる確率は高くなる。だから、無意識に自分を騙すみたいな状態になってしまう。加えて、限定された空間だと、接する相手が限られるから、思考がそればかりになって、愛情のような感情は加速しやすくなる。それが、ストックホルム症候群」

そう言えば映画でそんな感じの話があったな、としょうこは思った。映画の内容はそれなりにロマンチックだったが、現実はそうでもないようだ。

「葉山さんて、詳しいんですね」

「ん～、昔、かなり本気で勉強したからね。ちなみに逆もあるんだよ。リマ症候群って言って、こっちは加害者の方が誘拐したり監禁したりした相手に対して特別な感情を抱くの」

「まあそういうわけだから、お前たちはもう、自分を責めるな。こうしていたらああしていたらというのは、どうしても考えてしまうものだが、そこばかりに意識を向けない方がいい」

大人ではないということ

昼食のあとで、四人は警察署に向かった。奥の部屋に通してもらい、そこであらためて調書を取ってもらった上で、書類に署名をする。
「松坂みつの主張の一角は飛騨しょうこの発言により崩れたわけだから、もう一度取り調べた方が良さそうだな」
「確かに崩れたわけですけど、あの人ならのらくらとかわすんじゃないですか？『小鳥ちゃんが記憶違いをしてるんです～』とか言いそう」
葉山の口調はまたも心底嫌そうであった。しょうこはこの女刑事とさとうの叔母との間に、いったい何があったのだろうと思ったが、訊くのも怖かったので、黙っていた。
「そうやってあまり嫌悪感を出すな」
「わかってますけど、難しいんですよ」
「あの」
しょうこは、二人のやりとりの割って入った。二人の刑事がしょうこを見る。
「さとうの叔母さんに会うことってできますか？」
五島も葉山も驚いた表情になった。あさひも驚いている。一瞬の空白ののち、あさひは叫んだ。
「殺されかけたんだぞ！」
「うん……でも、今は逮捕されてるわけだし、さすがにもう殺されかけはしないと思う」
「面会自体は認められた権利なわけだから、面会を申し込むことはできるよ。向こうが『嫌です』って言ったらダメだけど。でもしょうこちゃん、あの人に会ってどうするの？」
実を言うと、しょうこにもよくわからなかった。だが、何故か会わなければという気持ちがあるのだ。
「自分でも、よくわかりません……。でも、会っておきたいって思うんです」
「……まあ、しょうこちゃんには大事なことなんだろうねえ」

「面会を申し込むのは構わんが、今日はもう時間がない。明日は取り調べをしたいから、申し込んでも明後日以降になるが、大丈夫か？」
五島の言葉に、しょうこはうなずいた。
「あ」
あさひが何かを思い出したのか、声をあげた。
「どうした？」
「あの、俺、管轄とかよくわからないんだけど、俺の母さん、いつ逮捕されるの？」
あさひが思ってもみなかったことを言い出したので、しょうこは驚いた。それは二人の刑事も同じ様子だった。
「逮捕？　神戸しおに関する保護責任者遺棄及び児童虐待の容疑の話か？　神戸しおが行方不明なままである以上、検察が起訴したがらんだろう」
「そっちじゃない。……母さん、父さんを殺したんだ」
あさひは瞳を伏せ、淡々とそう言った。
「今、病院に入ってるけど、落ち着いたら逮捕されるんだろ？」
「なんの話をしているんだ？」
五島が心底わからないといった様子で尋ねる。あさひは気色ばんだ。
「だから、俺の母さんは父さんを殺したんだ」
「お前の父親の死因は肝硬変だぞ？　少なくとも死体検案書にはそう書かれていたが」
「えっ……？」
あさひがうろたえ、視線をさまよわせる。
「あさひ君、その話、誰から聞いたの？」
「母さんから。父さんが死んで、母さんに会いに行ったとき、母さんが『あの男は私が殺した。子供のために、私が殺した』って」
「方法はわかる？」
「薬を酒に混ぜたって、言ってたけど」
「なんの薬？」
「そこまでは……」

五島と葉山は顔をみあわせた。五島が息を吐き、ペンでこめかみをこづく。
「イマイチ状況がよくわからんな……神戸、お前の父親の件だが、さっきも言ったように、死因は肝硬変だ。検死解剖の結果、そう判明したんだ。だから、病死扱いで、引き取り手がなかったから、行旅死亡人扱いで火葬になっている」
「えっと……？」
「君のお父さんの遺骨をどうする？　葬式は？　って話」
「遺骨はいらない」
あさひは即答した。五島がやや呆れた表情で葉山を見る。
「葉山、いらんツッコミをするな。話を戻すぞ。お前の父親は病死だ。母親が薬を混ぜたと言ったが、家にある酒瓶のどれかに入れただけなら、それを呑む前に、父親の方がポックリ逝ってしまったんだろう。検死の結果わかったが、お前の父親の身体は長年にわたる不摂生でボロボロで、いつ死んでもおかしくなかった」
「じゃあ……母さんは、人を殺してない？」
「少なくとも、お前の父親の死に不審な点は見当たらない」
あさひは目に見えてほっとした表情になった。しょうこは、あさひが背負っていたもののひとつが、これで少なくとも消えたのだと思い、安堵した。
「そう言えば、神戸。お前、これからどうするつもりだ」
五島が尋ねた。あさひが怪訝そうな表情になる。
「どうって……」
「生活の話だ。行く当てはあるのか？」
「ない、けど……施設はいやだ」
あさひは横を向き、視線をそらした。五島が小さなため息をつく。
「あのな、こっちは、保護が必要な未成年に外をうろうろしてほしくないんだ」
しょうこはどうにかしてあげたいと思ったが、どうにもできるはずがない。もどかしい気持ちでいっぱいになる。
そんなしょうこの目の前で、あさひは怒りを爆発させた。

「未成年、未成年って、あんたたちはそればっかり！」
「あさひ君は実際未成年だからしかたがないよ。未成年は成年と比べるとどうしてもできることが少ないの。例えばさ、ちょっと考えてみようよ。あさひ君、もしあさひ君がしょうこちゃんを妊娠させたとしたら、あさひ君、いったいどうする？」
　あまりと言えばあまりのたとえに、あさひとしょうこは真っ赤になった。
「そ……そんなことするかっ！」
　うろたえた様子であさひが叫ぶ。
「避妊に百パーセントはありえません」
「そんな話をしているんじゃないっ！」
「だからさあ、たとえの話だよ。実際にそういうことをしてみればとか言ってるんじゃなくて、もしそうなったらどうするか考えてみて？　って言ってるの。家が火事になったらどうやって逃げる？　っていうのと同じだよ。それに対し『火事になんてならない』とは答えないでしょ」
　しょうこは考えてみた。あさひとのあれこれははっきり言って想像したくない――嫌なのではなく、ちょっと思い浮かべただけで恥ずかしくてたまらなくなるからだ――のでやめておくとしても、自分がもし妊娠してしまったらどうする？　両親に言う？　ほぼ確実に両親は逆上するだろう。そのときのお説教を想像してしまい、しょうこはげんなりした。下手したら、高校を卒業するまで学校以外の外出を禁止されるかもしれない。
「で、ほらほら、どうする？　放っておいたら赤ちゃんはどんどんお腹の中で大きくなっちゃうよ。ちなみに、中絶手術はできる期間が決まってるからね。その期間過ぎちゃったらできないよ。あと、中絶するってのは、お腹の中の赤ちゃんを殺すことだから。育ち具合によっては、ずたずたに引き裂いて取り出すの。それと、未成年の場合、病院は親の同意書を持ってこいってとこが多いよ」
　容赦のない言葉に、しょうこは血の気が音を立てて引いていくような感覚に襲われた。あさひを見ると、今度は青ざめている。さすがに

ショックがきついようだ。
「わからない……」
「じゃ、選択肢を絞ろう。しょうこちゃんが妊娠しました。しょうこちゃんに選べる選択肢は『産む』か『堕ろす』になります。どれを選んでほしい？　あ、あさひ君はこの場合『逃げる』てのもあるね」
「そんなことしない！」
「うん、あさひ君はしないと私も思いたいなあ。でも実際、最後のを選ぶ人って結構いたりするんだよね」
　あさひは青ざめたまま震えている。しょうこは気分の悪さも忘れて、あまり刺激しないでほしいと思ってしまった。
「『堕ろす』のは嫌だ……」
「あれれ、珍しいね。逃げなかった場合、堕ろしてくれって頼む人が多いんだけど。でも、産むにしても、生まれた子供をどうするの？　子供を育てるのってお金がたくさんかかるよ。しょうこちゃんはまだ高校生だし、あさひ君だって定職についてないでしょ。収入なしでどうやってやっていくの？　面倒は主に誰が見るの？」
　あさひは黙り込んでしまった。しょうことしても、もしそんな事態になった場合、自分は何もできずに呆然としてしまうだろう、と思ってしまう。
「まあ産んでから捨てるとか殺すとかいう選択肢もあったりするよね。といっても、ほとんどの未成年の妊娠で出産まで至ったケースって、誰にも相談できないでいるうちに、限界を迎えて自宅出産ってケースが多いから、捨てたくて捨てるというより、始末に困って思考放棄したあげく……って感じなんだけど」
「葉山、お前……人にはオブラートに包めとあれだけ言っておいてまあ……」
　五島が呆れた声を出す。が、葉山がうろたえる様子はなかった。
「ある程度身近な事例の方が、わかりやすいと思うんですよ」
「それはそうだが……」
　ちょうどそのとき、部屋に電子音が鳴り響いた。しょうこの携帯だ。すいませんと言って、携帯を取り出す。着信を見ると、母からだ。

しょうこはあわてて通話に出た。
「ちょっとしょうこ！　あなた、退院してきたばかりだというのに、家にいないって、どういうこと？　もう遊び歩いてるの？　何を考えているの？」
　出るやいなや、携帯から母の怒りの声が響いて、反射的にしょうこはすくんだ。
「い、いえ……お母様、私、遊んでたんじゃなくて……」
　必死でそう弁解するが、母の怒りは収まらない。延々と小言をまくしたてる。しょうこの気分は深く落ち込みかけたときだった。不意に、携帯が横からひったくられた。
「あ、もしもし、すみません、よろしいですか？　私、刑事の葉山です」
　それは葉山だった。葉山はそのまま、しょうこの携帯で話し始める。驚きのあまり、しょうこは口を挟むこともできなかった。
「いえね、実はしょうこちゃん、事件について思い出したことがあるとかで、わざわざ警察まで証言に出向いてきてくれたんですよ。きっとすぐ話さなくちゃと思ってくれたんでしょうね。正義感の強い、いい娘さんでいらっしゃるんですね。ええ、すみません、お役所仕事の事務手続きというのは、どうしても時間がかかっちゃうんですよ。お待たせしてしまって本当にすみませんでした。娘さんは私が責任を持ってそちらに送り届けますので、はい。それでは失礼します」
　葉山はそう言うと通話を切り、携帯をしょうこに手渡した。
「あ、ごめんね、突然で。でも、たぶん、私が話した方がわかりやすかっただろうし」
　それに関してはそのとおりだったので、しょうこはうなずくしかできなかった。それに、母の説教を途中で断ち切ってくれて、ほっとする気持ちもあった。
「しょうこちゃん、どうする？　手続きはもう終わってるから、帰っても大丈夫よ。帰るのなら、送っていってあげる」
　本音を言えば、帰りたくはなかった。だがもうできることもないし、いたずらに時間を長引かせれば、母の機嫌は悪くなるだろう。
「帰ります……」

「わかった。じゃ、ちょっと待ってて」
葉山は自分の席から上着とバッグを取ってきた。しょうこは五島に頭を下げた。
「それでは、失礼します。ありがとうございました」
「ああ、色々話してくれて助かったよ。あ、神戸。お前は残れ。まだ話がある」
しょうこについて外にでかけたあさひが立ち止まる。しょうこはそっと、あさひに向けて手を振った。あさひも手を振り返す。そんな些細な事実が、心を慰めてくれた。

光の当たる道

警察車両で自宅まで送ってもらう間も、しょうこの気分はなかなか浮上しなかった。葉山がフォローしてくれたが、家に戻ればまたお説教だろう。

「しょうこちゃん」

そんな沈んだ気分でいるところへ、葉山が声をかけてきた。

「何でしょうか？」

「さっきはごめんね、生々しい話しちゃって」

さっきの……というのは、未成年が妊娠したらという仮定の話のことだろう。確かに生々しかったが、しょうこはそれについて怒る気にはなれなかった。

「大丈夫です。確かにちょっとショックがきつかったけど、大事な話だったと思います」

実際、遊んでいたとはいえ、しょうこはその手のリスクについてあまり考えたことがなかった。もし自分の身にそういうことが起きていたらと思うとぞっとする。

「ありがと。しょうこちゃんはいい子だね」

しょうこは、気になっていたことを訊いてみることにした。

「葉山さん、何か、あったんですか」

「ん～、直接にではないけどね、こういう仕事してるとやっぱり、色々あるのよ。へその緒がついたまま、首を絞められている赤ちゃんの遺体とか調べるの、やっぱり精神的にくるんだわ」

そういう葉山の声からは感情が抜け落ちていて、怖いくらい淡々としていた。あまり思い出したくない事件なのだろう。

「こういう事件を起こした子ってね、取り調べると、悲しくなるぐらい何も考えてないの。こんな大事になるとは思ってなかった、って。もう、元には戻らないのにね」

そして、葉山はおそらく、自分に対しこういう体験をしてほしくないのだろうな、としょうこは思った。風変わりなところもあるが、本質的には優しい人なのだろう。

「ところでしょうこちゃん、ちょっといいかな」
「はい」
「頼みがあってね。松坂さとうのこと、話してくれないかな？」
「さとうのこと、ですか？　もう事件については大体喋ったと思いますが……」
　意図がわからず、しょうこは内心で首を傾げた。この女刑事は何を訊きたいのだろうか。
「ああ、そういうんじゃないの。雑談感覚でいいのよ。しょうこちゃんからみて、松坂さとうってのがどんな子だったのか、少し聞いておきたくて。本人は姿くらましてるし、あの叔母さんはろくなこと言わないし、学校の先生とか友達に聞いてもあまり突っ込んだ話は聞けないし」
　しょうことさとうは学校が違う。だから、接点はバイトだけで、しょうこもさとうが学校でどうしているのかまではわからない。でも、さとうのことだから、問題などは起こしてはいないだろう。彼女はいつでもそつがなかった。
「さとうは……美人で、器用で、笑顔が可愛くて、接客が上手で……」
　思い出せることを思い出せる端からあげていく。バイトでのちょっとした出来事や、いっしょに遊びに行ったときのこと。
「ある意味、私の『理想』でした。ああなれたらいいな、っていう理想。メイドカフェでバイトをしていると、感じの悪いお客さんが来ることってわりとあるんです。でもさとう、そういうときも嫌な顔ひとつせず、上手に無茶なお客さんをあしらうんです。真似してみようとしたけど、私には無理でした。
　さっき葉山さんに叱られちゃったけど、街で男遊びをしたことも何度もあります。でも、今思えば、男遊びは口実だったのかも。なんでもいいから、さとうといっしょにいたかった。いっしょにいるだけで、楽しかったから」
　話しているうちに涙がこみ上げてきた。もう泣くのはやめよう、と思ったのに。
「しょうこちゃんは、さとうのことが好きだったんだね」

「好きでした、というか、今でも好きなんだと思います。友達として、ですが」
その感情だけはどうしても否定しようもなかったし、否定する気にもなれなかった。
「友情も愛のひとつの形だよ。恥ずかしがったり後ろめたがったりしなくていい。いろんな形の愛がある。親子の愛、兄弟の愛、友達への愛……人間以外への愛もある。自分の生まれ育った土地や、生業にしたい仕事へのとかね」
そう言う葉山の口調がとても穏やかで優しかったせいだろうか、その言葉はしょうこの胸のうちにすとんと降りてきた。
「刑事さんからしたら、犯罪をした相手を友達だと思うのって、変かもしれないですが……」
「それはしょうこちゃんの感情だから、私はどうしようもないと思うよ。人の感情に枷とかつけられないし。まあ、関わらない方がいいよ、とは思うけどね。なんといっても殺されかけたんだから」
あさひと同じようなことを、葉山は言った。たぶん、それが「多数派」の意見なのだろう。
「私、さとうを救ってあげたかった」
「ん～、それは、難しかったんじゃないかな。基本的に、人が救えるのは自分だけなんだと思う。他の人にできるのは、ちょっとした手助けまでなんだよ」
「どういう意味ですか？」
「しょうこちゃんの悩みはしょうこちゃんにしか解決できないし、さとうの悩みはさとうにしか解決できない。もちろん、手助けをしてもらうのはありだよ。行きたい場所があって、道がわからなければ、人に訊くことはできる。でも、その場所に最終的に行き着くには、自分の足で歩かなければならない」
「私が思いあがってたってことですか？」
「ある意味ではね。でも、しょうこちゃんは誰かを大事に思える、優しい感受性の持ち主だって証拠でもある。こういうのは難しいの。物事にはいい面と悪い面がある。悪い面ばかりを見すぎると、いい面が

見えなくなってくるし、逆もそう。私が思うのは、しょうこちゃんには自分の感受性を大事にしてほしいけど、周りをよく見て、あまり危ない橋を渡らないようにしてほしいってことだね」
　葉山の言うことは難しくて、しょうこにはよくわからない部分もあった。ただ、頭から全否定をされなかったことには、少し安堵を憶えた。
「これから、どうしたらいいんでしょう」
「それは、しょうこちゃんが自分で決めなくちゃ。お姉さんとしては、しょうこちゃんには自分の人生を大事に生きてほしいけどね」
　人生を大事に生きるというのが、どういう感覚なのか、しょうこはよくわからない。だが、わからないなりに考えてみようとする。
　そして思い出す。さとうといっしょに、光の当たる道を行きたいと思ったことを。何故自分は光の当たる道を行きたいと思ったのか？
　それは、きっと、光の当たらない道の先に、幸せなどないのだと、本能的に感づいていたからだ。
「一人ででも、光の当たる道って、行けるものなんでしょうか？」
「行けるよ。というか、最初は誰でも一人なんだよ。でも、そうしていたら、きっと、いっしょに歩いてくれる人が出てくるの」
「葉山さんには、そういう人がいるんですか？」
「いきなり突っ込んだことを訊くね……今のところは、いないね。いっしょに歩いて欲しい人はいるけど、こういうのは片方だけの気持ちでは決まらないかな」
　片想い、なのだろうか。
「葉山さんは美人だから、大丈夫だと思いますよ」
「あははっ……褒めてくれてありがとうね。あーでも、あの人の恋人は仕事だから」
　そう言って、葉山はなんともいえない表情で笑った。

差し出された手

「で、お前のことだが」
　目の前で鋭い視線を投げかけてくる五島の存在を無視して、警察を飛び出すことも考えた。だがそれをした場合、どう見てもこちらが不審者だ。なので、あさひは黙って五島の言葉を聞くしかできなかった。
「お前、この先、どうする気だ」
「どうって……言われても……」
　実際、あさひに考えなどなかった。五島がため息をつく。
「どうしても施設は嫌か？」
「嫌……だ」
「どうして？」
「人が……怖い」
　嘘をつこうかとも思ったが、適当な嘘が出てくるほどあさひは器用ではない。結局、事実を口にしてしまう。実際、あさひは大勢のよく知らない人に囲まれるのは苦手だった。
　一方、あさひの言葉を聞いた五島は複雑そうな表情になった。それからしばらく考え込んでいたが、ほどなく、口を開いてあさひに問いかけてくる。
「神戸、お前、飛騨のことをどう思う？」
「え……？」
　思ってもなかったことを訊かれ、あさひはまた言葉に詰まった。脳裏にしょうこの顔が浮かぶ。
「彼女は……信頼できる、人……」
　そう、しょうこはあさひにとって初めての、信頼できる相手だった。
「幸せに、なってほしい……」
　しょうこにだけは幸せになってほしかった。夜の公園で、泣いている彼女をみつけたときから、ずっと。
「お前のその気持ちは真実だろうがな、お前がそんなじゃ、あの子は幸せにはなれんぞ。友人を心配するあまり殺されかけた子だ。お前が

ふらふらふらしていたら、心配し続けてドツボにはまる」
　それは確かにとても可能性がある話で、あさひとしても気がかりではあった。自分にそんな価値があるとは思えないが、しょうこは優しい子で、あさひのことを気に入ってくれている。彼女の負担にはなりたくない。
「かといって、目の前から消えるってのも問題外だ。友人が行方不明になって、あの子は精神的にかなりきている。お前まで消えたらどうなる？」
　これまたそのとおりで、あさひは何も言えなかった。だがその事実に腹が立ってくるのも、また偽りのない感情で。
「さっきから、知ったふうな口と綺麗事ばかり！　だから大人は嫌いなんだ！」
　五島の目の前で、あさひは感情を爆発させる。だが、五島も譲らない。目に強い光をたたえ、正面からあさひを見る。
「お前みたいなのはこっちは見飽きてるんだよ。大人に対して不満があるのはいいが、自分じゃまだ何もできないだろう」
「そうして、上から構えて、勝手なことを言うんだ！　いつだって、いつだって！」
　泣いても叫んでも誰も助けてくれなかった。父親の暴力で痣だらけになっているあさひに、誰も気づかなかった。あるいは見て見ぬ振りをした。心配するような声をかけておきながら、父の怒声で逃げ帰る。そんな人をどうやって信じられる？　大人はみんな嘘をつくのだ。
「誰も助けてなんてくれない。俺のこと、ゴミを見るみたいな目で見て。コソコソと噂話ばっかりして！」
　本当は誰かに助けてほしかった。父親のひどい暴力から。でも、助けてくれる人なんていなかった。父親が死んで、母親が壊れて、しおがいなくなったときも、やはり助けてくれる人はいなかった。
「あ〜、それは、なあ……」
　五島が難しそうな表情になる。彼女はそのまま思案気な表情をしていたが、今度はやや落ち着いた声で、また尋ねてきた。

「で、神戸。お前、どうしたい」
「……」
「さっきも言ったが、飛騨にこれ以上負担はかけられんだろう。あの子、元気そうに振舞ってるが、内心ではまだかなり参ってるはずだ」
「それはわかってるよ！　俺だって、しょうこの力になれるものならなってやりたい！　俺に関わったばかりに、あんな目にあったんだから！」
　でも悲しいかな、あさひにはなんの力もないのだ。さっき葉山が指摘したとおりに。
「……それだが、まずは、自分の生活を安定させるのが一番だ。お前が無事で暮らしているとわかれば、それだけであの子は安心する」
　結局、施設へ行けと繰り返すのだろうか。あさひは、反抗的な目で五島を睨んだ。
「で、その上で訊きたいが、お前、働く気はあるのか？」
「働く……？」
　意外な言葉が出てきたので、あさひは怒りを失って五島の顔をみつめてしまった。五島は真面目な表情をしている。
「お前にその気があるのなら、こういうことに詳しい知り合いもいるし、必要なサービスを紹介してやれる。で、どうだ？」
　突然差し出された救いの手。それは本当に突然だったので、あさひはそれを取ることもできず、困惑して立ち尽くした。五島はそんなあさひの答えを、辛抱強く待った。やがて。
「お願い、します……」
　あさひは自分の意志で、その手を取ることに決めたのだった。

ぶれない人

「またあなたたち？」
「他に適当な人間がいなくてね」
　以前と同じ警察の取調べ室。そこで、五島と葉山は松坂みつと向かい合っていた。松坂みつは相変わらず、身体のあちこちに包帯や絆創膏をつけたままの姿で――新しい怪我を作るような事態は起きてないはずなのだが――薄笑いを浮かべている。
「刑事さん、愛をみつける気にはなったの？」
　同じことばかり言い続けて彼女は飽きないのだろうか、と五島は思った。後ろで葉山が苛立っているのも感じる。
「そんな話はどうでもいい。私が興味があるのは事件の真相だけだ」
「つまらない人……」
「あんたはつまらないかもしれないが、私にはそうではない」
　五島は淡々と告げる。この相手に対し怒ったり苛立ったりするのは、時間の無駄だ。
「飛騨しょうこの記憶が戻った。そして、彼女は証言してくれた。１２０８号室で自分を殴って昏倒させたのは、あんたの姪の松坂さとうだと」
「あら？　小鳥ちゃんたら、結局は友達を売ることを選んだのかしら？」
　しょうこ本人ならその言葉を聞けば傷つくのだろう。もっとも、五島はしょうこではないので、それを言われたところで、とくにどうとも思わない。ついでに言うなら、しょうこが友達を売ったとも思っていない。そんな言葉を使う人間の人間性に呆れるだけだ。
「彼女は真実を口にしただけだし、道を間違えたらそれが間違いと言ってやるのも友情だろう。その選択肢は正しいと私は考えている。で？　何故自分が飛騨しょうこを昏倒させたと嘘を言った？」
「あれは嘘じゃないわよ？　一度さとうちゃんが気絶させたんだけど、そのあとで目を覚ましそうになったから、今度は私がやったの」
　笑顔のままで、松坂みつはそう言った。五島の背後で葉山が「クズ

女」と小さな声でつぶやいている。
「ということは、あんたは飛騨しょうこがまだ生きていると知ったうえで、あの部屋に火をつけたんだな？」
「そうね」
　これで彼女を殺人未遂罪で心おきなく起訴できる、と五島は思った。
「何故さとうの関与について最初から話さなかった？」
「さとうちゃんは可愛い姪っ子だからよ。小鳥ちゃんがいらないことを言わなければ、さとうちゃんの関与は証明されなかったのに」
「可愛い姪っ子、ねえ……あんた、本当に松坂さとうを可愛がっていたのか？」
「心外だわ、そんなことを言われるなんて」
　さも意外そうに、松坂みつは答える。五島は淡々としたペースのまま、質問を続ける。
「どうかな。……あんたは、姪の松坂さとうを性的に虐待していたんじゃないのか？」
　しょうこたちには言わなかった疑問を五島は口にした。そうしながら、注意深く松坂みつの表情を見守る。だが、その表情に変化は訪れなかった。相変わらず、うっすらと笑っている。
「なんの話？」
「松坂さとうは小学生の女の子を連れて海外に逃げた。この手の虐待は連鎖する。彼女は、かつて自分がされたことができる相手、を求めたんじゃないのか？」
　しょうこやあさひにその可能性を言わなかったのは、これがただの推測に過ぎないからだ。こんなおぞましい推測を、身内に言うべきではない。
「さとうちゃんは愛をみつけただけよ。その愛のためなら、さとうちゃんは何だってするの」
　五島は重ねて同じ問いをしたが、松坂みつはのらりくらりとかわすだけだった。
「ああ、そうだ。神戸あさひが松坂さとうを未成年者誘拐容疑で告訴

したぞ。国際指名手配もかけたから、運が良ければ松坂さとうを逮捕できるかもしれない」
　五島がそう言ったとき、一瞬だが松坂みつは驚いた様子を見せた。だがすぐにその表情は、もとの薄笑いへと戻ってしまう。
「あらまあ、ご苦労なことね。でもさとうちゃんはもう日本には戻ってこないと思うわよ？」
「戻るべきだと思うがな。タチの悪い奴らに捕まって人身売買にかけられる前に」
　この言葉に関しては、五島は心の底からそう思っていた。消えた子供の運命は、大抵は悲惨なのだ。
「さとうちゃんならそんなヘマはしないわ」
「ああ、そうか。ところで、あんたは神戸しおの存在は知っていたのか？」
「私は、さとうちゃんから愛する人と逃げると訊かされただけ。マンションへの放火は偶然よ」
　松坂みつはそう言ったが、五島はこれも嘘だろうなと思った。
「飛騨しょうこへの殺害未遂の件は？」
「逃げるのに反対されて殴ったと訊いたわ。いっしょに火葬してあげたらいいかと思ったのよ」
　無理があるな、と五島は思った。松坂みつはどうあっても、深谷を殺したのは自分だと言いたいらしい。
「松坂さとうが海外へ逃れたのなら、深谷殺しについて事実を喋ってもいいんじゃないのか？」
「事実って？」
「深谷を殺したのは松坂さとうだということだ」
「あれは私よ。さとうちゃんじゃないわ」
　何度同じことを尋ねても、松坂みつは自供を覆しはしなかった。

吸血鬼

拘置所の待合室で、しょうこは緊張して座っていた。さとうの叔母は、しょうことの面会を承諾した。手続きが全部終わって順番が来たら、これから狭い面会室で松坂みつと向き合うのだ。

「しょうこちゃん、大丈夫？」

ついてきてくれた葉山が心配そうに尋ねてきた。しょうこは大丈夫です、とうなずく。

「無理しないでね、時間が残っていても、切り上げても大丈夫よ。それと、相手のペースに飲まれないようにね。あの人、いろいろと厄介だから。基本は平静心よ。それと、今回の件について、あなたはとがめられるようなことはしていないっていうことを忘れないで」

「ええ。気をつけるようにします」

しょうこがそう答えたとき、拘置所の職員がしょうこの番号を呼んだ。しょうこは大きく息を吸い込むと、葉山に向けてひとつうなずいて立ち上がり、面会室へと向かった。

狭い部屋だった。中央に大きなアクリルの間仕切りがあり、向かい合わせに椅子がひとつずつ置かれている。しょうこは自分の側に座った。ほどなくして、反対側のドアが開いて、刑務官に連れられた松坂みつが入ってきた。

「久しぶりね、小鳥ちゃん」

松坂みつは向かいの椅子に座った。刑務官は出て行かず、部屋の片隅に立っている。松坂みつが変なことをしないか監視しているのだろう。

しょうこはじっと松坂みつをみつめた。前に会ったときとあまり変わりなく見える。少なくとも、ここに入ってやつれたとかはなさそうだ。もっとも、もともと不健康そうな印象の女性だったので、わからないというのが正確なところかもしれない。

「あら……？　前ほど寂しそうではないのね。それなら良かったわ」

火をかけて焼き殺そうとした相手を見ても、松坂みつは動じず、以前と同じ気味の悪い笑顔を浮かべている。しょうこは用意してきた

質問を口にしようとしたが、不意に、そのとき、まったく違う言葉が頭に浮かんだ。
「叔母さん……叔母さんは、さとうを愛していたの？」
「愛しているわよ、今でもね」
　当たり前のように、松坂みつは答える。けれど。
「ならどうして、私にさとうの居場所を教えたの？　知らないって突っぱねれば良かったじゃない」
「おかしなことを訊くのね。あなたが教えてくれって頼んだのに」
　しょうこは息を深く吸い込み、アドバイスどおり、心を落ち着けようと努めた。
「ええ、私は教えてくれと頼んだ。でも私はさとうの友達に過ぎない。あなたがさとうを愛していたのなら、さとうの秘密の隠れ家の場所を教えたりなんかしないはず」
　言葉にするうちに、気持ちも思考もはっきりしてきた。そして確信する。彼女の言う愛はまやかしだと。
「心外だわ。私はあの部屋に来る人みんなを愛してきたの。いっしょに暮らしたさとうちゃんのことだって、当然愛してる」
「あなたは嘘をついている。今、はっきりわかった。あなたはさとうを愛してなんかいない」
　松坂みつが意外そうに目を見開く。しょうこは平静心を保とうと努力しながら、言葉を続けた。
「あなたの中に愛なんてない。さとうは前、自分の中には空白があるって言ってた。そりゃそうだよね。だって、あなたがさとうの中の大切なものを、吸い取ってしまったんだから。そんな邪悪なものは愛じゃない。あなたはさとうを搾取していただけよ」
「知ったふうな口をきくのね」
「叔母さん。さとうはきっと、あなたにきちんと愛されたかったんだよ」
　何故だろう。何故こんなことがわかるのだろう。でもきっと、そうだ。さとうがもともとほしかった愛は、親代わりになる存在からの愛だったのだ。

「私はさとうちゃんを愛しているからこそ、頼まれたことは全部やったのよ。そしてさとうちゃんは逃げおおせた。それが私の愛のあかし」
「それも違う。さとうはしおちゃんをみつけた。しおちゃんがさとうの一番大切な存在になった。あなたはそれが許せなかったけど、しおちゃんを直接害そうとしたらさとうは反撃するだろうし、そもそもさとうがあなたの前で、しおちゃんから目を離すなんてありえない。だからあなたは手の込んだ方法で、さとうを試したんだ」
　松坂みつが目を細める。しょうこの意図を探ろうとでもするかのように。しょうこは目をそらさず、落ち着いた口調を心がけながら、言葉を続けた。
「自分が警察に逮捕されたら、さとうは戻ってくると思ったんでしょう。残念だったね、さとうは戻らないよ。だって、あなたはもう、さとうにとって、どうでもいい存在なんだから」
　そしてそれは自分もいっしょだ。わずかに胸が痛む。だがその痛みをこらえ、しょうこは前を向き続ける。
「もう、さとうはあなたのものじゃない。さとうを食い物にすることはできない。さとうはあなたの呪縛から逃れた。私は、それが嬉しい。だって、私は、さとうを友達だと思ってるから」
「……もういいわ。あなたと話をしていても、仕方がない。面会は終わりにします」

　面会室を出て葉山のいる待合室に戻ると、しょうこの足は突然力を失い、その場にくずおれてしまった。葉山が立ち上がり、こちらに駆け寄ってくる。
「しょうこちゃん、大丈夫？」
「大丈夫、です」
　葉山の手を借りてしょうこは立ち上がろうとしたが、うまくいかない。支えてもらいながら、待合室のベンチに座る。
「な、なんか、よく、わからないんですけど、すごく、疲れました」
「自分を殺しかけた相手に会ったんだから当たり前だよ……」

葉山はしょうこの前にひざをついて目線をあわせると、両手をしょうこの肩に置いて、しょうこに笑いかけた。
「よく頑張ったね」
その言葉を聞いた瞬間、しょうこの瞳からは堰を切ったかのように涙が溢れ出した。止めようとするが、止まらない。
「わ、私、わかったんです。さ、さとうは本当は、あの叔母さんに、ちゃんと愛して、ほ、欲しかったんだって。あ、あの人、誰のことも、愛してなんかいない。あの人にできるの、だ、誰かから、吸い取ることだけ。さとう、きっと、吸い取られて、カラッポになったんだ。なんで、もっと、早く、わかって、あげられなかったの。な、なんで、あんな人、存在してるの。あの人、まるで、吸血鬼、みたい」
もっと見る目があれば。もっと状況を見抜く力があれば。そうしたら……目をそらさずにいれば……。
葉山の前で、しょうこはひたすら泣き続けた。葉山は何も言わず、しょうこの肩に手を置いたままでいてくれた。その手は温かかった。
「さ、さとう、しおちゃんから、吸ったり……しないかって、それ、だけ、心配。さとうも、吸血鬼に、なっちゃうんじゃ、ないかって……、そ、そうしたら……」
「あのね、しょうこちゃん。人は、代償行為というのをすることがあるのね」
聞いたことのない言葉だった。
「何かが手に入らないときに、代わりになってくれるものを求めるの。そういうのの中にね、『自分がしてほしかったことを、誰か他の人にする』というパターンもある。私は松坂さとうという子を直接的には知らないけれど、そちらのパターンになる可能性もあるわ」
それは本当なのだろうか。自分を慰めようと、言ってくれているだけなのではないだろうか。
そんな疑念を抱きつつも、しょうこは願わずにはいられなかった。さとうとしおがいっしょにいるのなら、どうかそういうふうであってほしいと。

それは決して口にできない

「結局、深谷への殺人、しょうこちゃんへの殺人未遂、建造物放火で起訴、ですか……」
「仕方がない。何しろ自供があるんだ。松坂さとうが深谷を殺したという証拠は何もないしな」
「わかっていたこととはいえ、ため息が出ますねえ……」
「まあな」
「ところで五島さん、実家にあさひ君を住ませることになったんですって？」
「最初は実家の予定じゃなかったんだがな。あの日は時間がなかったし、神戸は行くところがないっていうし、とりあえずのつもりで一晩実家に泊まらせたら、父が関心を示して」
「娘が二人とも実家を離れちゃったから、寂しかった、とかですか？」
「どうだろうな。どうなるかわからんが、しばらくのところは実家で下宿させようと思っている。父には彼が被虐待児で不安定だとは話してある。働き口の方は、近江食堂で面倒みてもらえることになった」
「あさひ君に勤まりますかね？　あの子、包丁持ったことなさそうですけど」
「今のとこ、主な仕事は皿洗いと調理場の掃除だ。初日は皿を割ったとかでへこんでいたそうだがな」
「大丈夫かしら……」
「これで潰れるようなら、それまでの奴だ」
「まあ、そうですけど」
「といっても、あの境遇を考えるとまともに育っていると言えるし、できれば潰れてほしくないというのが本音だ。ある程度落ち着いたら、通信制の高校を薦めようと思っている。高校くらいは出ておかないと、色々きつい」
「五島さん……」
「なんだ？」

「意外と面倒見良かったんですね……」
「なんというか、ちょっと放っておけん気がしてな。本来、あまり介入しない方がいいのはわかっているんだが。このまま放っておいたらあの子、間違いなく転落人生コースだろうし」
「人間ですもの。時には、情に流されたりもしちゃいますよ。流されすぎたらあれですけど」
「それは昔、私がお前に言った台詞なんだが」
「うふふっ」
「ところで葉山、飛騨を松坂みつのところに連れて行ったそうだな」
「あ、はい」
「飛騨は大丈夫だったか？」
「うーん、大丈夫、とは言えませんねえ。あの子、けっこう鋭いんだなって、あらためて思いました」
「というと？」
「しょうこちゃん、具体的に何を話したのかまでは言いませんでしたけど、終わったあと、泣いてました。松坂みつが松坂さとうからいろんなものを吸い取ってしまったって」
「ふむ、それは……」
「虐待されてたのを感づいたんでしょうね……。あれは魂の殺人です。内容が性的なものかどうかまでは、ちょっとわかりませんけど……」
「それがありえない、と断言できないのが辛いな。そして虐待は連鎖する。松坂さとうが神戸しおを虐待する可能性は高い。くわえて、幼い子供は自我が定まっていないから、すりこみや洗脳がたやすい」
「あさひ君が警察をもっと信用してくれていれば、良かったんですけどね。八歳の子が行方不明って話なら、警察も身を入れて探すのに」
「今まで誰も助けてくれなかったんだ。周りはみんな敵だと思っていても無理はない。それに加えて世の中の仕組みをろくに知らない。飛騨があいつを説得して、警察で証言させただけでも驚きだ」
「カラッポ、か……」
「葉山、どうした？」

「しょうこちゃんが言ったんです。松坂さとうは叔母に吸い尽くされてカラッポになってたんだって」
「ふむ」
「神戸しおも、母親からネグレクトを受けていた。あの子もカラッポに近い状態だったんでしょう。カラッポなもの同士は惹かれあうことがあるんです。でも、もとからカラッポな人間は、決して互いを埋めあえない。最初のうちはよくても、そのうちに奪い合うようになっていく」
「ああ」
「戻っては、こないでしょうね……」
「運が良ければ向こうの警察に逮捕される可能性もあるが……どうだろうな。言葉もできない、身元を証明するものもない。利用されるか、えげつない犯罪に手を染めるか、どう考えても平坦な人生は送れないだろう」
「あの二人には、言えませんね……」
「そうだな……」
「せめて祈りたいです。しょうこちゃんとあさひ君の二人は、人生を立て直してやっていけますようにって」
「現時点では厳しいとしか言えんな。……大人は子供を守ってやらなくちゃならないのに、それができない奴が多すぎる」
「だからこそ、祈るんですよ」

母の所在と消えるもの

あさひの父が亡くなったあと、あさひが再会したゆうなは魂が抜け落ちたかのような虚脱状態で、まともに会話も通じない様子で部屋で座り込んでいた。なんとかしおがいなくなったことを聞き出したあさひは、そのまましおを探しに飛び出して行き、ゆうなの許には戻らなかった。だから、ゆうながそのあと、どうなったのかもわからずにいた。

マンションの火事が起きたあと、しょうこを助けたあさひは警察で事情を訊かれ、住所に困って母のそれを答えた。すると、母は精神病院に入院していると言われたのだ。あさひが飛び出していったあと、明らかにおかしい様子で近所を徘徊するようになり、通報を受けてそのまま病院で保護されたのだと言う。

保護者不在ということであさひは施設に送られ、そこを脱走し、さらにそのあと、事件の捜査をしていた五島刑事の配慮のおかげで、住む場所と働く場所が手に入った。五島はそれだけでなく、弁護士のもとにあさひを連れて行き、今まではっきりしていなかった法律関係のあれこれもまとめてくれた。例えば、あさひは知らなかったのだが、亡くなった父は生命保険に入っていた。父方の祖父が契約させたもので、保険料は一括ですでに払い終わっており、受取人はあさひになっていた。

「どうして……？」

「お前の祖父は、お前が心配だったんだろう。このやり方なら、直接金銭を遺すより、安全に金を渡せると踏んだんだろうな」

「俺だけが受け取るわけにはいかない。半分はしおのものだ。しおが生まれる前の契約だから、俺だけが受取人になってるけど、しおも生まれていたら、違っていただろうし」

「通帳を作って、半額を入れてお前が預かっておけばいい。とはいえ、失踪宣告も出しておいた方がいいぞ」

とはいえ、あさひは未成年なので直接受け取ることはできない。ゆうなはまともに会話ができないため、母の親権を停止してもらい、未

成年後見人を立ててもらう。そのために、裁判所などあちこちに行って説明をしたり書類を書いたりせねばならず、あさひはお役所仕事というのはどうしてこう面倒なのだろうと思わずにはいられなかった。
「なんでこんなに複雑なんだ……」
「それは、世の中にたくさんの人がいて、いっしょに生活をしているからだ」
　まさかまともな返答がかえってくるとは思っていなかったので、あさひは思わず五島の顔をまじまじと見てしまった。
「どうした？」
「いや、それ……どういう意味？」
　五島は、道路の信号を指差した。
「あれがなくなったら、どうなると思う？」
「どうって……」
　あさひは信号を見た。目の前の信号は青で、人が渡っている。横断歩道の脇では、車が信号が変わるのを待っていた。
　車が待っているのは車の側の信号が赤だからだ。信号が赤で、車が止まっているから、人は安心して道を渡れる。だが、信号がなければ……。
「怖くて……道を渡れない」
「ああ。下手をしたら、道を渡れないどころか、あちこちで事故が多発するだろう。そういうことが起きないように、世の中には『ルール』というものがある。交通ルールがあるから、人は一応安心して道を歩ける。とはいえ……世の中にはイレギュラーなことが多々あるから、用心にこしたことはないがな」
　説明はもっともだったが、あさひは交通ルールについて知りたいわけではなかった。さすがに、それが必要で大事なものであるぐらいはわかる。
「交通ルールが必要なのはわかったけど、役所の手続きが面倒なことの説明にはなってない」
「交通ルールと言ったが、これは『決まり』だ。多くの人が生きていくにおいて、様々な要望が発生する。場合によってはそれが衝突する。

だから、多くの人が生きていきやすくなるように、ということで定められたのが『社会の決まり』つまり『法律』だ。もし世の中に五人しか人がいなかったら、問題が起きる度に話し合ってもなんとかなる。だが、数多くの人が生きている社会においては、問題が起きるたびに話し合うわけにはいかない。だから、そういう部分を円滑にし、やりやすくするために『法律』がある」
「……」
「どうした？」
「む、難しすぎてついていけない……」
　頭を抱えるあさひを見て、五島は困ったな、といった表情になった。
「これでも噛み砕いて説明しているつもりなんだが……とりあえず、お前を縛るためにあるものじゃないってのだけは憶えておけ。役所の手続きは確かに面倒だが、今回は人が死んでいるからな。人の生死というのは重要なものだから、ミスが起きると厄介なんだ。それを防ぐために、どうしても手続きは厳しくしないといけないところがある」
　あとはまあ、知りたかったら落ち着いたら勉強しろ、と言われてしまう。そう言えば以前にも、高校ぐらいは出ておけ、とも言われていた。気が進まなかったが、夜学でも通信制でもいいから、出ておいた方がいいのかもしれない。

　精神病院の休憩室で、あさひは母のゆうなと向かい合っていた。母のゆうなは治療が効を奏しているのか、以前よりは落ち着いた様子だった。
「母さん、元気そうだね」
　ゆうなは静かに微笑んだ。
「あさひも元気そうね」
　少なくとも、母はあさひが誰かということはわかってはいる。そこから説明しなくて済んだことに、あさひはほっとしていた。
「うん。俺、なんとか住むところと働くところを見つけたから、俺のことは心配しなくていいよ。だから、母さんはまず、病気を治して」

心の病気が治るのかどうかはよくわからなかったが、あさひは治ってほしいと思っていた。
「今、元刑事さんって人のところに下宿させてもらってるんだ。刑事さんっていうと怖そうだけど、全然そうじゃなくて、普通のおじいさんだよ。バイト先の食堂もみんないい人だから……母さんは、本当に心配しなくていいから」
「良かったわね」
ゆうなは窓の外を見て、それから周囲を見た。そして、首を傾げる。
「ところでここは、どこだったかしら？」
「母さん、ここは……病院だよ」
「病院？　なんで？」
「母さんは病気なんだ。だから、治るまで入院しているんだよ。大丈夫、きっと良くなるから」
「ありがとう、あさひは優しい子ね」
笑顔のままで、ゆうながそう言ったので、あさひは胸をなでおろした。だが、そのあとに続く言葉に、表情を失って硬直してしまう。
「子供はあさひだけで良かったのよ」
「母さん……今、なんて言った？」
かすれた声で尋ね返すあさひの強張った表情に気づかぬまま、ゆうなは穏やかな声で、言葉を続けた。
「だから、あさひだけで良かったのよ。二人目はいらない」
はっきりとゆうなはそう口にした。瞬間、あさひの中で怒りが爆発する。
「母さんっ！　なんでそんなことを言うんだよっ！　しおをいらないだなんてっ！」
信じられなかった。母の言葉が。妹をいらないと言い切ってしまった言葉が。反射的につかみかかりそうになる。瞬間、ゆうなが悲鳴をあげた。
「いやあああああっ！」
あっという間に病院の職員が飛んできて、あさひはゆうなと引き離された。だがあさひの気持ちは治まらない。

「母さんっ！　どういうことなんだよ！　しおはいらないって！　しおだって母さんの大事な娘じゃないかっ！」
「あの子はいらないの！　あの子がいたから、あさひを置いて出て行かなくちゃならなくなったの！」
　ゆうなは泣きながらそう叫び、思わずあさひは立ち尽くした。そんなつもりはなかった。あのとき、まだ幼児だったしお。父に全力で殴られたら即死しかねない。幼い子供がひとりでは生きられないし、日に日に憔悴していく母も心配だった。自分が残るのがベストだと思ったのに。
「でも、それはしおのせいじゃない……」
　ゆうなは壊れたかのように、あの子はいらないと繰り返すだけだ。そのまま病院の職員に連れて行かれてしまう。
「神戸さん、お母様の前で声を荒げられるのは……」
　ぼんやりとその場に立っていたあさひは、病院の医師から注意を受けた。ＤＶ被害者であるゆうなは、怒鳴り声や暴力の前触れを感じさせる動きで、パニックになってしまうのだという。そういう行動は謹んでくださいときつめに言われ、あさひはうなだれた。
「すみませんでした……妹をいらない子みたいに言われて、つい……」
　ああ、と医師はうなずき、あさひを気の毒そうな表情で見た。
「おそらく、あなただけを残して家を出たことを、妹さんのせいだと責任転嫁することで、自分を守ろうとしているのでしょう。悪いのは病気です。あなたのせいでもお母様のせいでもありません」
　悪いのは病気だと言われても、あさひは釈然としなかった。被害者である母に対して怒鳴ってしまったことへの罪悪感と、どうして妹をいらないと言ったのかと母を責める気持ちが、胸の中でせめぎあっている。ぐちゃぐちゃになった気持ちを抱えたまま、あさひは病院を出た。

境界線のこちらと向こう

さとうの叔母とに面会してから、数日後のこと。しょうこはさとうの夢を見た。しおの手を引いて去って行こうとするさとうに、しょうこは全力で呼びかけた。大声で叫んで、泣きながらしょうこは謝った。何度も何度も謝った。

「しょうこちゃん」

さとうは立ち止まって、振り向いた。見るのが怖かったけれど、顔をあげる。さとうはすぐ近くで、微笑んでいた。

「私は、行くね。しおちゃんと新しいお城を探すの」

「さとう、お城なんてないんだよ！　戻ってきて、罪をつぐなって！」

刑事たちが言ったように、その道は破滅の道だ。さとうは未成年だから、罪を認めたとしても、そこまでの刑期にはならないはず。だから、しょうこはさとうに戻ってきてほしかった。

「しょうこちゃん、私はきっと、こういうふうにしか生きられないの」

「そんなことないよ、決めつけないで！」

必死で言葉をかける。意志を翻してほしくて。だがさとうは微笑んだまま、首を横に振った。

「ううん、無理なんだよ。私、いくらだって人を殺せるから。この愛を守るためなら、なんだってできちゃうから。でも、しょうこちゃんは、そっち側の人だから。まともに生きる人だから」

「じゃあ……じゃあひとつだけ、ひとつだけ約束して！　しおちゃんのこと、絶対に傷つけないって！　たとえ何があっても守るって！」

さとうが驚いた表情になり、動きを止める。しばらくしてから、さとうは手を差し出し、しょうこの手を片方とって、二人の小指を絡ませた。

「わかった。約束するまでもないけど、約束する。私はしおちゃんを傷つけないし、この命にかえてもしおちゃんのことは守る」

ゆびきりげんまん、と言って笑うさとうの笑顔は、しょうこがずっと見ていたもので。笑うさとうとは対照的に、しょうこの方は涙が止まらない。

「うん、ゆびきり」
「でも……しょうこちゃん、どうしてしおちゃんのこと、気にするの？」
「あんたにそういうこと、させたくないの。自分を慕っている誰かを、傷つけるような真似、してほしくない。それに、しおちゃんは、あさひの妹だから」
「しょうこちゃんは、やっぱりそっち側の人なんだよ。大丈夫、しおちゃんは傷つけない。それじゃあ、さようなら」
「……さようなら、さとう」
目が覚めると、頬が涙で濡れていた。さとうのことで泣いたのはこれで何度目だろう。もうわからない。
でも……さっきの夢は、少しだけ、ほっとできた。もちろんただの夢に過ぎないし、もしかしたらしょうこの願望が見せたものなのかもしれない。それでもしょうこは思いたかった。さとうがしおを傷つけず、守ってくれると。

昼過ぎに、しょうこの携帯に着信が入っていた。差出人はあさひで、「少し会って話したい」と書かれている。しょうこは学校が終わり次第、いつもの公園に行くと返信した。
学校は、いつもと同じで変わり映えがしない。予想どおり、クラスメイトたちはしょうこに対し、腫れ物に触るような対処をしてくる。だからといって、苛立ちもおぼえない。好奇心からあれこれ訊かれないだけマシだ。
なお、マスコミの類には追い掛け回されずに済んだ。他人の不幸を幸運と言っていいのかどうかはわからないが、しょうこが入院して数日後に、大物芸能人が麻薬で逮捕され、世間の関心はそちらへと向いてくれたのだ。その芸能人の逮捕のあと、芋づる式に別の芸能人が逮捕され、ワイドショーはまだその話題で持ちきりだったりする。
授業が終わると、しょうこは制服のまま、公園へと向かった。向こうはもう来ていて、いつものベンチに座っている。面倒を見てもらえるようになったせいか、格好は以前よりもずっとこざっぱりとしてい

る。うつむいているので、表情はよく見えない。が、その姿勢から、しょうこは「何かイヤなこと」があったのだろうな、と検討をつけた。
「来たよ」
どうするのか迷ったが、しょうこは普段と変わらない声を出すようにした。あさひがぱっと顔をあげる。しょうこは微笑んで、あさひの隣に座った。
「どうしたの？」
「うん……」
一度顔をあげたあさひだが、またうつむいてしまった。あさひとのつきあいはそんなに長くないが、しょうこはこういうとき、どうすればいいのかはもうわかっていた。何も言わず、ただじっとあさひが話し始めるのを待てばいい。
「……今日、母さんに会いに行ったんだ。前に話したと思うけど、母さん、病院に入ってるんだ」
あさひの大まかな境遇については、しょうこはあさひから聞いて知っていた。静かにうなずいて、次の言葉を待つ。
「バイトもしてるし、寝るところもあるから俺は大丈夫、だから母さんは病気を治すのに専念してって言いに行ったんだ……そうしたら、母さん、言ったんだ。『しおはいらない』って」
「え……？」
しょうこは驚いて声をあげてしまった。いらない？　自分の子供を？
いや待て。しょうこの両親だって、しょうこのことを兄や姉と比べてばかりだ。いらないとまで思っているのかどうかはわからないが、兄姉よりも自分の優先度が低いのだけは確かだ。なら、それが先に進んでいる状態、というのもあるかもしれない。そこに心の病が加わるとなると……。
「俺……それを言われたとき、頭の中が真っ白になって、母さんに向かって怒鳴ってた。なんでそんなことを言うんだって。そうしたら母さん、またおかしくなって……病院の人に引き離された。まだ不安定だし、ちょっとしたことでおかしくなるし、怒鳴り声はとくに良く

ないって」
怒鳴り声がよくないというのはわかる。あさひの父は暴力男だ。彼を連想させるものに、拒絶反応を示すのも無理はない。
「母さんがしおをいらないって言ったのが信じられなくて。母さんはいつだって優しかったし、今日だって、俺が怒鳴ってしまうまでは、前の優しい母さんだったんだ。病院の先生には、母さんは俺を父さんのとこにおいていった罪悪感で、おかしくなったんだろうって言われた」
「それは……あるんじゃないかな。私も、今でもまだ、今回の事件、全部自分のせいだって、思ってしまうし」
いろんな人に、それはしょうこのせいではないと言われた。あさひも、二人の刑事も、病院の先生だって、そうだ。でも、それでもまだ、しょうこは完全には、罪の意識を振り払えずにいる。
「でも、しょうこが責めているのは自分自身で、他の誰かじゃない。どうして母さんは、しおのせいだなんて」
「それは、私にもよくわからないけど……でも、人って自分のしてしまったことを、自分のせいじゃないって思いたがるし……だから、きっと、あさひのせいじゃないよ。あさひのお母さんが思いつめて、異常な行動に出たのは、あさひのせいじゃないし、しおちゃんのせいでもない」
そう、きっと、誰のせいでもない。もっといい選択肢はあったのかもしれないけれど、少なくとも、責められる理由だけはないはずだ。
「だから、思いつめない方がいいよ。私もそうするから。ね？」
しょうこは一生懸命言葉をかけたが、あさひの表情は優れないままだった。
「もうひとつ、気がかりなことがあるんだ。俺の父さん、俺や母さんのことを殴ってばかりで、俺は今でも父さんのことが大嫌いだ。だけど、母さんがしおをいらないって言ったとき、すごい怒りがわいてきて……病院の人たちが止めてくれなかったら、何をしたか、自分でもわからない」
「で、でも……暴力を振るったりとかは、しなかったんでしょ？」

「今回は、さっきも言ったけど、病院の人たちが止めてくれたから。でも、あの、マンションが火事になった日、俺はさとうを殴ってしおを取り戻すつもりでいたし、それでさとうが大怪我しても構わないって思ってた」

あさひは両手を額に当てて深くうなだれた。声からは感情が抜け落ちてしまっている。

「もしかしたら、俺も父さんみたいに……なっちゃうのかなって、そう思ったら、すごく怖くなって……」

虐待は連鎖する。以前、何かのテレビ番組でそんな主張がされていたのを、しょうこは聞いたことがあった。

でも、今ここで、それを認めてはいけない。

「あのときは非常事態だったし、あさひが来てくれたから私は助かった。あさひは動けない私を助けるのを、最優先にしてくれた。あさひはお父さんとは違うよ」

震えるあさひの背に、しょうこは自分の手を当てた。

「それに、あさひはもう一人じゃない。私がついてる。ううん、私だけじゃない。刑事さんの実家に、下宿させてもらえてるんでしょう？本気で心配してくれてなかったら、そんなことしないよ。何かあったら、もう頼っていい人がいるんだよ。絶対に、あさひをお父さんと同じになんか、させない」

言いながら、胸の奥に痛みが走るのを感じる。以前、さとうを闇の道から連れ戻そうとしたときの記憶が甦る。あのときは、もう手遅れだった。でも、今回は違う。

それに、一人だけではない。ささやかな手助けでも、複数集まれば、きっと違う結果になる。そう信じて、前を向くのだ。

苦くて甘い

公園であさひの話を聞いたあと、気分を変えたいと思ったしょうこは、彼をカフェに誘った。
「あ……うっかりしてたけど、お金、大丈夫？　持ち合わせがないなら、私が払うけど……」
しょうこの言葉に、あさひは首を横に振った。
「何かあったときのためにって持たされてるから、ちょっとは大丈夫。刑事さんと弁護士さんが相続とかよくわからなかった部分、ちゃんとしてくれたし」
あさひの現状については、彼から前に連絡をもらったときに詳しく聞いている。彼がもう公園ではなく、きちんと屋根のあるところで寝ているのだとわかったとき、しょうこは心の底から安堵した。
ケーキが美味しいと評判の駅前の小さなカフェに、二人は入った。あさひは、カフェに入るのは初めてで、どうしても気後れしてしまう。自分は、こういう場には場違いではないかと感じてしまうのだ。
あさひが行動をためらっていたので、しょうこはウェイトレスに空いている席を案内してもらったあと、彼に「ここ、座ろう」と声をかけた。あさひがおずおずと席に座る。
「こういうとこ……初めてだから、慣れなくて」
「うん。私も初めて一人で入ったときは、ちょっと緊張した」
しょうこはメニューを手に取って開いた。様々な美味しそうなケーキの写真が載っている。しょうこはケーキが好きだし、さとうもそうだった。たぶん、しおもケーキは好きだろう。
「あさひは、甘いものは好き？」
「あまり食べたことないけど……好き、かな……」
目の前のしょうこを眺めながら、あさひはしょうこは甘いものが好きに違いないだろうなと思った。
「俺、よくわかんないから、しょうこと同じのでいいよ」
「わかった。すいませーん、注文お願いしまーす」
ウェイトレスを呼んで注文を頼む。頼むのはオペラと紅茶のセッ

トにした。さとうといっしょのときはあまり頼まなかったケーキだが、今日は、これが食べたい気分だった。
ケーキを待つ間に、しょうこはさっきあさひから聞いた話を思い返した。ゆうなは、いったい何を思って、息子を置いて家を出たのだろう。そして、そのあと、どんなふうに暮らしていたのだろうか。
もし……ゆうながあさひのことばかりを気にかけていたのだとしたら、しおは寂しかったのかもしれない。そして、寂しかったのは、さとうも同じで。だから、惹かれあったのだろうか。
でも、何故か、しょうこにはそれが「いいこと」とは思えなかった。ガラスでできた橋を渡るかのような、危うい行為に思えてしまう。そう感じる理由ははっきりとはわからないけれど、頭の中で何かが警鐘を鳴らすのだ。
どうしてこんな感覚がするのだろうとしょうこが考え込んでいると、不意にあさひが「ごめんな」と言ってきた。
「どうしたの？」
「ほら……前、さとうのことを『今でも友達だと思っている』って言ったよな」
確かに言ったし、今でもそうなので、しょうこはうなずいた。
「俺、あのときは『なんだってそんなバカなことを』って思ったんだ。でも、今日、母さんと衝突して、それで、わかったんだ。母さんがしおをいらないと思って捨てたのだとしても、俺にとって、母さんは母さんで、嫌ったりとかはできないって。母さんの言ったことややったことに対しては腹が立つし、許せないって思う一方で、母さんは病気なんだから気遣ってあげなきゃって思う。そして、もし、今ここに母さんとしおの両方がいたら、俺はきっと、どちらも選べない。……しょうこが言っていたのは、そういうことなんだなって、やっと、わかったんだ」
あさひも複雑な思いを抱えているのだと、しょうこは思った。自分がさとうを大事に思うように、あさひは母や妹を大事に思っているのだ。
なんだか、胸の奥が暖かくなるような、そんな感じがする。

人の心は複雑だと、しょうこは思った。さとうとの関係に踏み込もうとして、失敗して彼女に拒絶されたときは辛かったし、そのあと関係を修復しようとして、彼女に殺されかけたときは、もう人生に希望なんてないんだと思うぐらい絶望した。そういった暗いできごとは、今でも自分の心に陰を落としている。

でもその一方で、あさひが自分を必死になって助けてくれたことや、お見舞いに来てくれたこと、今もこうして自分と気持ちをわかちあえているということは、嬉しく思ってしまう。それもまた、偽りのない感情。

「あさひがいてくれて、良かった」

そう言うと、あさひが驚いた様子でしょうこを見た。少し置いてから、かすかな笑顔を浮かべる。

「俺も、しょうこがいてくれて、良かった」

どちらからともなく、手を繋ぐ。互いのぬくもりが、心地良かった。

そうしていると、二人分のケーキとティーセットが運ばれてきた。しょうこが付属の砂時計をひっくり返していると、あさひが「それは？」と訊いてきた。

「この砂が全部下に落ちたら、紅茶をカップに注いでもいいよ、って合図」

あさひは小さな砂時計を見た。砂時計からは砂がサラサラと下に落ちて行く。しおがいたらこれをおもちゃにしたがったろうな、とあさひは思った。

砂が落ちきったところで、紅茶をカップに注ぐ。目の前のケーキは長方形をしていて、茶色のスポンジとクリームが層になっており、上には艶のあるチョコレートがかかっていて、金箔があしらわれている。

しょうこはフォークでケーキを切り分け、口に運んだ。かなりビターなチョコレートを使っているようで、口の中に苦味と甘味が同時に広がる。

「ケーキって、もっと甘いものだと思ってた」

ケーキを食べながら、あさひが呟いた。

「あ、もっと甘いのが良かった？」
「いや、これでいいよ。苦いけど、美味しい」
ケーキを食べながら、あさひは何か考え込んでいる。それが何なのか、しょうこはたやすく検討がついた。
「今、しおちゃんにも食べさせてあげたいって思ったでしょ？」
「あ……うん」
「でも、しおちゃんにはオペラはまだ早いんじゃないかな。これはアルコールも使ってるし。もっとこう、ふわふわっとして、甘みが強くて、見た目が可愛いケーキの方が喜びそう」
ケーキよりも、パフェとかの方がいいかもしれない。色々入っているし、見た目も可愛らしい。
四人でカフェに来ていたら、どんな感じだっただろう。ふと、しょうこはそんなことを思った。まず、席で揉めそうだ。しおの隣にどちらが座るかで、あさひとさとうは絶対に意見があわない。でもたぶん、さとうの方がしおの隣に座るだろう。それで、ちょっと落ち込むあさひに、しょうこは自分の隣に座ってほしい、と言うのだ。
席が決まったら今度は注文だ。メニューを見ながら女子三人でどれがいいかで盛り上がるのを、あさひがちょっと困った様子で眺めている。最後までしおが候補のふたつで悩んでいると、さとうが「じゃあ、両方頼んで、半分こしましょう」と言う。
「しょうこ、どうかした？」
あさひに声をかけられて、しょうこは現実に引き戻された。あまりに幸せな空想だったから、すっかり浸ってしまっていた。
「あ、うん……ちょっと、ね。四人で来れたら、良かったなって思っちゃって」
「四人……」
言われたあさひは考え込んでしまう。あさひにとって、ずっとさとうは「敵」だった。今でも複雑な気持ちがあるけれど、様々な葛藤を経てきた今となっては、さとうに対する気持ちは以前ほど苛烈なものではなくなっている。
「そう、だな……」

しょうこの言うとおり、四人でケーキを食べる。そういう幸せの形も、もしかしたらあったのかもしれない。もっとうまく歯車が噛み合って、誰も罪を犯さなければ。もっと違う出会い方をしていたら。
「今からでも、戻ってきてくれればいいのに」
「でもそれだと、さとうは逮捕されるぞ」
指名手配がかかっている。殺人に関しては叔母が罪をかぶったが、しょうこに対する殺人未遂としおの誘拐の罪が残っている。
「うん。けど、さとうは未成年だから、たぶん、刑期はそんなに長くならないと思う。罪をつぐなってやり直してくれるのなら、私は友達として、さとうを待つよ。そして、出てきてくれたときは、今度こそ四人で、ケーキを食べるの」
あさひは複雑な気持ちでしょうこを見た。気持ちが和らいだとはいえ、さとうに対してはまだ苛立ちがある。でも。
四人でケーキを食べるのが、きっと、しょうこが願う「幸せのかたち」なのだ。視線を、食べかけのケーキに落とす。世の中は、このケーキのように、苦くも甘くもあるもの。
「……そのときは、また、これを食べたい」
あさひの言葉に、しょうこは一瞬驚き、それから、今度は満面の笑顔になった。その笑顔に、胸の奥が暖かくなる。これでいい。

裁判

「判決。被告人、松坂みつを無期懲役の刑に処す」

裁判長の判決の言葉を聞いても、松坂みつは微動だにしなかった。しょうこは裁判を傍聴に来ていたが、この位置では、判決を受ける被告人は背中しか見えないので、表情はわからない。でもおそらく、いつもと変わらないのだろう、と思う。

公判の間中ずっと、松坂みつは変わらぬ薄ら笑いを浮かべ、ひとごとのような表情で被告人席に座っていた。隣に座る年配の弁護士は、対照的に疲れた表情だった。刑事の話によれば国選ではないそうなので、この人も彼女から何か吸い取られたのかもしれない。

検察の方はよく通る声が印象的な女性で、きっぱりした口調で松坂みつの罪を糾弾した。自らの罪状が並べられている間も、松坂みつはやはりずっと笑顔で、正面の判事もその後ろの裁判員たちも微妙な表情を向けていたが、気にした様子もない。さとうの叔母である彼女が、いったい何を考えているのか、しょうこにはよくわからなかった。精神異常による無罪を狙っているのだろうかとも思ったが、精神鑑定の結果は「責任能力あり」だったはずだ。

なお、しょうこは裁判で証言はしていない。検察側からは自供及び物証がたくさんあるので、証言がなくても大丈夫だと判断されたし、弁護側からは、しょうこが松坂みつに好意的な証言をするはずがなく、証言させるメリットがない、と判断されたようだった。

これがさとうの裁判だったらどうだったんだろう、としょうこは思った。弁護側から証言を頼まれたのだろうか。

松坂みつは起訴されたすべての罪で有罪だと認めていたため、弁護側ができることは、自分から出頭したことで反省の態度は示されている、と主張するぐらいだった。

審理が終わるころに、裁判員の一人が手をあげて、松坂みつに質問をした。それは「あなたは悪いことをしたと思っているのですか？」というものだった。

「悪いことをしたとは思っていません」

それが、松坂みつの答えだった。隣の弁護士がもっと疲れた表情になる。
「たくさんの人がもしかしたら焼け死んだかもしれないのにですか？」
納得がいかなかったのか、裁判員が重ねて尋ねる。
「はい。すべては愛のなせる技ですから」
その返答に、裁判員は顔を引きつらせた。そして、それ以上の質問はしなかった。弁護士席では弁護士が頭を抱えている。
そのまま審理は終了し、そのあとは裁判員と判事による評議が行われる。そして今日が、判決の言い渡される日で、しょうこはまた、学校を休んで法廷に来ていた。
裁判を受ける側の権利として、控訴もできるはずなのだが、しょうこは松坂みつはそうしないだろうと確信していた。
公判が終了し、退廷するとき、松坂みつはこちらを振り向いた。いつもの笑顔のまま、唇がかすかに動く。声は発せられなかったが、しょうこは何を言おうとしていたのかがわかってしまった。

昼をやや過ぎた時刻に、しょうこはあさひが働いている店を訪ねた。そんなに大きくない個人経営の定食屋で、店の前には、小さな黒板が出してあり、今日のおすすめが書かれている。店内に入ろうとして、しょうこはためらった。連絡を入れずに突然来られても、迷惑だろう。なんといっても向こうは仕事中なのだ。
「あれ、しょうこちゃん」
かけられた声に、しょうこはそちらを見た。五島と葉山の二人だ。
「あさひ君に会いに来たの？」
「え、ええ……そのつもりで来たんですけど、連絡を入れてないし、いきなり来たら、仕事の邪魔になるだろうから、やっぱりやめようかと……」
「せっかく来たんだから入っていきなよ。私たちもちょうどお昼ご飯食べようとしてたとこだし。一番混む時間はもう過ぎてるし」
「えーと、このお店って……」

「うん、行き着けのひとつ。五島さんのお父さんも引退してるけど刑事でさ～、そのころからのつきあいだから、大丈夫だよ」
何が大丈夫なのかよくわからなかったが、結局しょうこは二人にについて、店内に足を踏み入れた。「一番混む時間は過ぎている」と葉山が言ったとおり、店内の席の埋まり具合は半分ほどだ。カウンターの中にいた年配の男性が、声をかけてくる。
「おや、ミカさんにアオイさん。そっち空いてるんで、座っててください。今、注文を取りに行くんで」
「じゃ、座りましょ」
葉山にうながされて、しょうこは四人がけのテーブル席のひとつに座った。葉山が反対側に座る。五島は座らず、立ったままで店主に声をかける。
「近江さん、神戸はどうしてます？」
「毎回それ訊きますね。あの子なら、真面目にやってますよ。この分だと大丈夫でしょう。おや？　ところでそちらのお嬢さんは、親戚か何かですか？」
「ううん、この子はね～、あさひ君の彼女だよ」
五島より先に葉山が答える。その内容に、しょうこは真っ赤になった。そんな話は一切していないはずなのに、突然彼女は何を言い出すのだろうか。
「あああああの葉山さん、わわわ私は、その……」
「あはははは、なるほど！　そうだ、神戸の奴、そろそろ休憩なんですよ。この際ですし、いっしょに食べてけばいい。それで、注文は？」
「えっと、じゃあ……チキンカツ定食を」
五島は煮付け定食を、葉山はアジフライ定食を頼んだ。店主はさっさと奥へと行ってしまったので、しょうこは認識を訂正する機会を失ってしまう。
「葉山さん……私たち、つきあっているわけじゃ……」
「え、違うの？」
何故そこで当然のようにそう思われているのか、よくわからない。
「だって救命士さんたちが言ってたよ。あさひ君、火事の現場で血相

変えてしょうこちゃん助けようとしてたって」
「それは、そうですけど……目の前で誰かが大怪我をしていたら、助けようとするのは当たり前だと思いますし……」
「それに、どう見ても二人は仲のいいカップルにしか見えないよ」
しょうこは今まで以上に赤くなった。顔から湯気が出ているのではないかと思ってしまう。確かに心当たりは……ある。
「葉山、若い子をあまりからかうもんじゃないぞ」
セルフサービスとおぼしきお茶を持ってきた五島が、葉山にそう言った。はいはい、と葉山は答えているが、どこまで本気なのかはよくわからない。
「そう言えば今日は平日だが、飛騨、お前、学校はいいのか？」
「休ませてもらいました。判決の出る日だったので。どうしても、自分の目で見届けたかったんです」
「ああ、そう言えばそうだったな。結果はどうだったか？」
「無期懲役です」
刑事二人は多忙のため公判を傍聴できなかったそうなので、しょうこはざっと裁判での様子を説明した。その最中に、調理服を着たあさひが緊張した様子で食事を運んでくる。
「あの、本当に俺もいっしょに食べてっていいんですか？」
バイトの影響があるのか、あさひの口調は以前とは変わっていた。三人ともそろってうなずく。
「せっかく近江さんが食べてけって言ってるんだ。こういうときは素直に好意に甘えたらいい」
失礼します、と言って、あさひは自分の分の食事を取ってきて、しょうこの隣に座った。
「で、バイトの調子はどうだ？」
「あ、うん……ヘマも多いし、忙しいし、なれないことばかりで大変ですけど、たぶん、ついていけてると思います。忙しい分、余計なこと考えなくてすむので、そこは助かってます」
「最初は誰だってなれないもんだ。大丈夫、お前ならできる」
「うん。私もバイトを始めたばかりのときは、失敗してばかりだった

から」
　あさひのバイトに対する感想が一区切りついたところで、話はまた松坂みつの裁判に戻った。しょうこが裁判での彼女の態度や様子、発言について説明すると、五島は呆れた表情に、葉山はうんざりした表情になった。
「ほんっと、変わんないね、あの人……検察や裁判官、裁判員になった人たちが気の毒だわ……」
「そこだけは認めてやりたくなるな」
「認めなくていいです」
　あさひは何も言わなかったが、表情からすると、やはり呆れているようだ。
「あの、気になることがあるんですけど」
「なに？」
「あの人、法廷を出るとき、こっちを見たんです。私、前の方に座っていたんで、目があったんですけど、そのとき、こう呟いたように見えたんです。『愛さえあれば刑務所であっても問題ないのよ』って」
　葉山は片方の手を額に当て、こめかみを軽くもんだ。
「五島さん、刑務所の方に用心するようにって、言っておいた方がいいんじゃないですか？　光瀬のときみたいになっても困るでしょうし」
「既に通達はしてあるが、念のためにもう一度言っておくか。向こうとしてもトラブルは避けたいだろう」
　二人のやりとりから、しょうこは松坂みつが警察でどう思われているのかを悟った。
「刑務所で愛ってどういうことなんだ？」
　あさひが尋ねる。尋ねられても、しょうこにはわからない。
「私もよくわからないんだけど、さとうの叔母さん、なんか『愛』についていつも言ってるの。でも……私、あの人は誰のことも愛せない人だと思う」
「そりゃそうでしょ。あの人にとって愛は手段にすぎないもの」
　葉山が切って捨てるような、冷たい口調でそう言った。普段の彼女からは違う様子に、しょうこもあさひも驚いて葉山を見てしまう。

「葉山、飛騨と神戸が怯えてるぞ」
「別に、怯えてな……ません」
あさひがそう口を挟む。葉山はごめんね、と普段どおりの口調で謝罪の言葉を口にした。
「でも、なんで、その松坂みつって人は、そんなことを言ったんですか？」
「負け惜しみだろう」
「しょうこちゃんに対する挑発じゃない？」
五島と葉山の意見は分かれた。だが、否定的だというところは共通している。
「あのね、二人とも、松坂みつの言うことは真に受けなくていい。あの人は人をあやつるタイプの人だから。もう刑務所行きも決まったことだし、区切りをつけて、自分の大事なものを大事にして」
何故か、あさひがしょうこを見た。そして、しょうこはまた、頬が赤くなるのを感じる。
「あとは武器があればいいのよね」
「警察が武装を勧めるんですか」
あさひがやや呆れた声を出す。葉山は首を横に振った。
「ああ、この場合の武器っていうのは、『生きていくために必要な知識や技術』って意味よ。そういうのがあるとね、やっぱ色々違ってくるから」
しょうこは何故か、葉山が前に、自分を自宅まで送ってくれたときのことを思い出した。あのとき、母は珍しく何も言わなかった。彼女の刑事という立場も、それを場合によっては利用するのも、彼女が言う、「武器」なのだろうか。
「でもそれって、どうやって手に入れるんです？」
「ん～、しょうこちゃんなら、勉強が一番手っ取り早いんじゃないかなあ。しょうこちゃんのご両親、しょうこちゃんが『勉強したい』って言ったら、援助は惜しまないんじゃないの？」
確かに「塾に通いたい」と言ったら、通わせてくれそうな両親ではある。ただ、しょうこは、はっきり言って勉強は嫌いだった。

「でも勉強しろって言われても……」
「無目的にするんじゃなくて、ほしい知識とか資格とかにターゲットを絞るの。例えば、あさひ君がこの先このお店でずっと働きたいって思うのなら、調理師とかの免許があった方がいいから、そのための勉強をする必要がある。別の道に進みたいのなら、それにあわせた勉強がまた、でてくる」
「俺は……まだ、よくわからない。でも、ここは、いいと思います……」
葉山の言葉を受けてあさひが言う。
「まあ、まだお前たちは未成年だ。もうしばらく、ゆっくり考えてもいいだろう。時間の経過とともにわかってくることもあるしな」
「あ、はい……」

いつか向き合えるときに

食事を終えたしょうこたちを外まで見送ったあと、あさひは店の中に戻った。三時を過ぎた店内は閑散としている。厨房で積み重なった皿の汚れを落としていると、店主の近江が声をかけてきた。

「あんな可愛い彼女がいたとはなあ。性格も良さそうだし、大事にしてやりな」

彼女じゃないんです、とあさひは訂正しようかと思ったが、面倒なのでやめにした。説明の下手なあさひには、二人の関係を一から上手に説明できる自信などない。彼女だと思われたとしても、しょうこが誰か他に彼氏を作りでもしないかぎり、特にデメリットもないのだし。

そう思ったとき、不意に胸の奥が苦しくなった。しょうこが誰か他の男性と並んでいるところを想像しただけで、辛くて苦しくなる。

何故こんな気持ちがするのだろう。それは、きっと……しょうこの隣に、他の人に立ってほしくないからだ。

でも、崩壊家庭の出身で、高校も通っていなくて、不安定なバイトの身分の自分では、しょうことは不釣合いではないだろうか。

そういったことを考え始め、あさひの思考は暗く重い方向へと沈んでいった。なるべく周囲を見ないようにして、必死で手だけを動かす。

やがて五時になり、シフトが終了した。「お先に失礼します」と声をかけ、調理服を脱いで帰途につく。

「ただいま戻りました」

「お帰り、あさひ君」

五島の母が出迎えてくれた。

「お父さん、今日は用事で出かけていて、帰宅はもうちょっと遅くなるの。ご飯はもう少し待っててね」

五島の両親は、互いを「お父さん」「お母さん」と呼び合う。あさひからすると不思議な情景なのだが、子育てを経験した夫婦とはこのようなものだと説明を受けた。

「いつもありがとうございます」
下宿する際、あさひは食事などは面倒をかけたくないし無くていい、洗濯も自分でする、と断ったのだが「一人増えてもたいした手間じゃないし、別々だと台所がいつまでも片付かない。洗濯はいっしょの方が水道代と電気代がかからない」と言われてしまった。あまりに申し訳ないので、食後の洗い物はあさひが行い、それ以外にもできる家事は引き受けるようにしている。
「ところで、何かあったの？」
「いえ、大丈夫です」
「そう？　何か相談したいことがあったら、遠慮なく言ってね」
また、ありがとうございます、と答えて、あさひは貸してもらっている部屋へと向かった。六畳間で、家を出るまで五島が使っていた部屋だと説明を受けている。今のところカラーボックスとミニテーブルぐらいしか家具がなく、絶賛殺風景だが、あさひはあまり気にしていなかった。屋根があって壁があって布団があって、急に怒鳴られたり殴られたりせずに安眠できる幸せ、というのを初めて実感できたのだから。
あさひは部屋の中央に座って、しょうこのことをもう一度考えた。信頼していて、大切にしたい人で、できれば笑っていてほしくて……。

帰宅したしょうこは自分の部屋で、今日あったことを思い返していた。裁判のことやあさひのこと、そして、自分の将来のこと、だ。
しょうこはあまり、自分の将来について考えたことがなかった。しょうこにとって将来というものは、漠然とした靄に包まれたもので、できれば直視したくないものであり、できれば「誰かがそこから連れ出してくれないかなあ」と思ってしまうものだった。
だけど、今、葉山の言葉を受けて、しょうこはその靄を頭に思い浮かべた。先の見えない灰色の靄。それを見ていると、不意にそれが晴れ、幾筋もの道が浮かび上がる。そのうちのひとつが、不意に眼前に迫ってきて……。
その先に、さとうがいた。でも、しょうこが知っている姿よりも

ずっと幼い。怯えた表情で、泣きじゃくっている。
助けなきゃ。
でも、どうやって？　どうやったら、助けられる？　何があればいい？
そのとき、携帯が鳴り響いて、しょうこは我に返った。携帯をカバンから取り出し、確認する。あさひからだった。
「はい、もしもし」
「あ、しょうこ？　ちょっと話せるか？」
「うん、いいよ。というか、そっちは大丈夫なの？」
「バイトは九時から五時までなんだ」
「そっか。で、どうしたの？」
尋ねると、あさひは黙ってしまった。しょうこは電話口で、もう一度話し始めるのを待つ。すると……。
「今日、しょうこが店に来たとき、近江さんが『あんな可愛い彼女がいるんだから、大事にしろよ』って言ったんだけど……」
「わわわわわっ！　そ、それ、言ったのは私じゃない！　なんか葉山さんが勘違いしてて！」
しょうこは恥ずかしさのあまり、ベッドの上にうずくまった。
「やっぱりあいつか……」
「あ、でも、悪気があるわけじゃなくて！　あさひが必死で私を助けようとしたの見て、そう誤解しちゃっただけみたいで！」
なんだろう。自分が何を言っているのかもよくわからない。あせればあせるほど、妙な言葉が出てくる。
「もちろんあさひの彼女になれたら嬉しいけどっ！　でもあさひ今それどころじゃないしっ！　って、こういうことを言いたいんじゃなくてっ！」
「あ、あの……しょうこ、一度落ち着こう？」
電話の向こうから聞こえるあさひの声も上ずっている。しょうこは息を深く吸って吐き出し、なんとか気持ちを落ち着けた。
「う……ごめんなさい」
赤面するのは本日これで何度目だろうか。こんなに赤くなったら、

もう顔が元に戻らなくなるのではないだろうか。恥ずかしさのあまり、思考が明後日の方向に行ってしまったしょうこは、そんなことを考えた。

「あ……うん。で、俺は、バイト始めたばっかりだし、いろいろ考えないといけないこともあるし、恋愛とかつきあうとかもよくわからないし、けど……しょうこのことはものすごく大事に思ってる」

「え……」

あさひの言葉が、その意味が、胸の中に染みわたっていく。

「俺は、しょうこのことが好きだ。でも、今の状態じゃ、ダメなんだ。だから……俺がもっとちゃんとできるようになるまで……その、待ってもらっても、いい？」

そのときの気持ちを、どう言い表したらいいのだろう。恥ずかしくて、嬉しくて、胸の奥が熱くて、泣きたくて、笑いたくて。とにかく、無茶苦茶だった。

だから、答えは決まっている。

「うんっ！　待ってる！」

あさひとの通話を終えたしょうこは、携帯をぎゅっと握り締めた。そして、ひとつの決意を胸に抱き、両親と話し合いをするために、部屋を出た。やりたいこと、やらなくてはならないこと、自分の生きていくために必要なそれを、手に入れるために。

届かない手紙

さとうへ

この手紙を、あなたが読むことはないでしょう。でも私は、この手紙を書かずにはいられません。だから今、これを書いています。

あなたが逃げてしまってから、十年が経ちました。その間、私はもしかしたらあなたが戻ってくるのではないか、あるいは逮捕されるか、死亡の通知が届くのではないかと思いながら生きてきました。結局、どれも起きず、あなたとしおちゃんは、行方不明のままです。

十年一昔、という言葉があります。だから今、区切りのために、これを書いています。

あれから、いろんなことがありました。あなたの叔母さんは罪を自供し――そもそものことのおこりである、１２０８号室の件の発端は、たぶんさとう、あなただと思いますが――起訴されたすべての罪で有罪になって、無期懲役の判決を受けました。今もまだ、刑務所にいます。そこでどうしているのかまでは、わかりません。

あなたは今、どうしているのでしょうか。この事件を捜査してくれた刑事さんたちは、あなたが犯罪に巻き込まれた可能性が高いと言っています。言葉も通じない国で、悪い人たちにつかまったのではないかと。十六歳だった私にはその話は信じられなかったけれど、二十六になった今、そうではないかと思い始めてしまっています。

私はあのあと、いっしょに働いていたカフェを辞めました。但馬先輩にはずいぶん引き止められたけど――何しろ、あなたもすーちゃんも三ツ星君も辞めるかいなくなってしまったのだから――あそこはあなたとの思い出が多すぎて、いるだけて辛かったんです。

代わりに、私は生まれて初めて両親に頭を下げて、頼みごとをしました。本腰を入れて勉強をしたいから、家庭教師をつけてくださいって。両親は驚いていたけれど、思っていたよりもあっさりと承知してくれました。外部の大学への進学も、認めてくれました。

あれから、私はいっぱい勉強をしました。不思議なもので、勉強なんて嫌いだと思っていたし、実際大変だったけど、やりきれました。

そうして、法学部に進学して、またたくさん勉強をして、今では、弁護士です。

たぶん、この事件に巻き込まれなかったら、弁護士の道は選ばなかったでしょう。思うと不思議な気がします。

さとう、私は、今もまだ、あなたのことは友達だと思っています。そして、人生という道のどこかで、またあなたとひょいとめぐり合えるのではとも。そのとき、私はやはり、あなたに出頭を勧めてしまうでしょう。その上で、できるかぎりあなたの手助けをしたいと思っています。

さとう、私はずっと待っています。いつかどこかで会えることを。

しょうこより。

しおへ

この手紙をお前が読むことはないんだと思うが、やっぱり書いておく。それが必要なことだと思うから。

お前と別れて、十年が過ぎた。あれから、いろんなことがあった。お前は母さんに捨てられたと思っていて、きっとそれを恨んでいるだろう。あのとき、母さんは心の病気だった。それで、自分で自分をコントロールができなくなっていた。ごめん、俺にはやっぱり、母さんを責めることはできない。母さんもしおも、俺の家族だから。

お前がどう思うかわからないから、ここには事実だけを書く。母さんはあのあと入院していたけど、なんとか自力で生活ができるまでに回復して、何年も前に退院した。今は、ＤＶの被害者だった女性が集まる施設で生活している。

そして……母さんは、お前のことを忘れてしまった。心の病気の後遺症？　のようなものらしい。無理に思い出させると、またおかしくなってしまうそうだから、母さんの前でお前の話はしないことにしている。ダメな兄貴でごめんな、しお。でも、俺まで母さんを見捨てたら、母さんは一人ぼっちになってしまう。それだけはできないんだ。

俺はあのあと、事件で知り合った刑事さんに、仕事を紹介してもらった。刑事さんのお父さんの知人だって人がやっている、定食屋

だ。時間がかかったけど、高校も卒業した。今もその店で働かせてもらっている。いい店だよ。

お前たちが無事なのかどうか、心配するのはやめた。根拠も何もないけど、きっと生きている、そう思うことにしたんだ。

だから、もし、お前の気が向いたら、店に来てくれ。近江食堂って店だ。　あさひより。

遠くにありて君を想う

「これで、よし」

二通の葉書を投函し、しょうこは微笑んだ。隣には、あさひが立っている。

「付き合ってくれて、ありがとう」

「俺の方こそ、こういう場所があるって教えてくれて感謝してる」

あさひは、目の前の建物を見た。ここは漂流郵便局。届け先のない手紙を受け付けてくれる場所だ。

あの事件が起きてから、十年が経過した。その間に、色々なことがあった。しょうこは猛勉強し、高校の卒業後には法学部へと進学し、法科大学院を経て、弁護士になった。最初はしょうこの努力を冷めた目で見ていた両親も、結果を出すにつれて、態度を軟化させていった。弁護士になってからの進路でまた揉めたが――両親は企業弁護士の道を勧めたのだが、しょうこの望みはもっと人の役に立つことだったのだ――最終的に両親が折れた。この件については両親の中でもいろいろと葛藤があったようだが、最近では「うちの娘は、弁護士になって社会の役に立とうとしている」と考えてくれているようである。

あさひの方は、定食屋でアルバイトをしながら、しょうこより二年遅れて通信制の高校を卒業し、さらにバイトを続けながら調理師の免許を取得した。免許の取得と同時に、バイトから店の正式なスタッフとなり、同時に下宿させてもらっていた五島の実家も出て、一人暮らしを始めた。母のゆうなは数年前に病院を退院したが、入院中にＤＶ被害者だった女性と親しくなり、その女性の勧めを受けて、被害者女性の自助グループに参加し、現在は他の被害女性を助ける側に回っている。

その十年は、決して平穏に過ぎたわけではない。二人は何度もつまづき、壁にぶつかった。勉強が思うように行かなかったり、厄介な客とトラブルになったり、身近な人と衝突したり。怒りを爆発させて後悔した日もあれば、涙で眠れない夜もあった。

それでも、二人は決して諦めなかった。後ろを振り返ってしまうと

きもあったけど、できる限り前を向いた。どちらかが辛いときはもう片方が支えになった。一方で、どちらかに嬉しいことがあれば、もう片方はいっしょにそれを喜んだ。そうして、過ごして、積み重ねた時間が十年。

そして、十年の間、さとうとしおはずっと行方知れずのままだった。ある日突然、「逮捕された」か「死亡した」という知らせが届くのではないか、あるいは、突然本人たちが尋ねて来るのではないか、そう思っていたが、いずれも起きなかった。

短いようで長い十年という時間。でも、二人が思い出すのは、十六のときのさとうと八歳のときのしおだ。以前と比べて栄養状態のよくなったあさひは背が伸びて、しょうこよりも背が高くなり、身体つきも大分がっしりしたし、しょうこは背こそ伸びなかったものの、身体つきの方は以前よりも遥かに大人びた。でも、しょうこもあさひも、成長したさとうとしおの姿を思い描けない。生きていれば、さとうは二十六に、しおは十八になっているはず。それなのに、二人の脳裏に浮かぶのは、あの日、炎上するマンションで別れたときの二人の姿だ。

ふんわりとした綿菓子のような夢を、いっしょに探していたときのことを思い出し、今でもしょうこは切ない気持ちになってしまうことがある。二十六になった今の自分には、そんなものは存在していないのだとわかってしまっているのだ。それでも、あのころを思い出す度にわきおこるのは、若くて未熟だった当時の自分たちを、抱きしめてやりたいという気持ち。そして、しょうこは今でも涙ぐんでしまう。

そんなときにしょうこを抱きしめてくれるのはあさひで、でもその彼もまだ、しおに対して行き場のない想いを抱えているのを知っているから、しょうこの方でもあさひを抱きしめ返すのだ。

苦しくて、辛くて、苦くて、悲しくて、でも温かくて、優しくて、愛しくて、切ない。すべての想いは互いの腕の中に。

あれからずっと、二人は同じ願いを抱いて生きてきた。それは、いつかさとうとしおが戻ってきたときは、いっしょに「お帰り」と言ってあげよう、というもの。でもその願いが、今のところ、叶っていな

い。
そして、十年という節目の年となった今年。区切りをつけるために、しょうことあさひはここに来た。決して届かないこの気持ちを、形にするために。
諦めたわけではない。もしかしたらもう死んでいるかも、と思う度に、いや絶対生きている、と思ってしまう。おそらく、これからも自分たちは待ち続けるだろう。いつかさとうとしおが戻ってきてくれる日を。
だから、願いは捨てない。これは、自分たちの決意表明。
「行こう」
あさひが左の手で、しょうこの右の手を取る。手をつないで、二人は道を歩く。今までも、そしてこれからも。

後書き

冒頭に書いていますが、これはアニメ版『ハッピーシュガーライフ』を見ていて、一番のお気に入りキャラだったしょうこちゃんが途中で無残に殺されてしまい「せめて二次創作の中で幸せにしてあげたい」と思ったのがきっかけです。そして、アニメ最終話を見て「このときまだしょうこちゃんが生きていて、あさひがしおを諦めて、しょうこを助けだしたらハッピーエンドに繋がるのでは？」と思い、そこから話をスタートさせました。

そういう単純な動機で書き始めたわけですが、原作で死んでしまうキャラを二次創作で生かし、なおかつ幸せに導くというのは、やってみると意外と大変でした（簡単にできる人もいるのでしょうが、私には難しいタイプでした）

くわえて、原作自体がそもそもハッピーエンドに向かない題材であることも加わり、話の構成にはいろいろ悩みました。ついでに言うと、原作はまともな人がしょうこしかいないんですよね……。ずいぶんオリキャラが出張るなあと思われた人もいそうですが、話をそっち方向に引っ張るキャラがいないとハッピーエンドルートにのれないんです。まあ、ハッピーかどうか疑問なエンディングになってますが……。私に思い描けるベストなエンドはこれでした（私はイメージできないことが書けない）

ラストについてですが、さとうとしおへの気持ちをどう決着つけるか、というのが落としどころの悩みのひとつでした。アニメを視聴中に、昔読んだある小説を思い出し（ラストが心中エンドだった）その小説の作者さんが、エッセイの中で「昔に失踪してしまった兄が、ある日突然帰ってきてくれるのではないか、と今でも思っているし、待っている」と書いていたのを思い出して、そんな感じの結末もありだな、と思ったので、こういう形になりました。

これでこの作品は終わりますが、小ネタを思いつくか、要望があれば、単発でおまけSSぐらいは書くかもしれないです。パラレルで四人がいっしょにいる話、というのもアリかなあ。

キャラクターについて

飛騨しょうこ

原作における唯一のマトモな人です。今作では死にかけたことでいろいろ悩み、結果として精神的に成長しています。さとうとの関係が予想外にあとあとまで引きずりました。まさかあそこまで彼女にこだわるとは思いもよりませんでした。でもそれがしょうこというキャラクターの特性だなと思います。

学校や家庭は情報がなかったのでほぼ捏造です。家庭の壊れぶりがわからなかったので苦労しました。たぶんお嬢様高校に通ってるだろうなとは思ってますが。

あさひに対しては恋愛的に惹かれつつも、さとうとのことがあるのでそっちにがばっとベクトルを向けられずにいる、という感じです。

ラストで弁護士になってます（進路の候補としては、カウンセラーやケースワーカーなどもありました）書きませんでしたが、ＤＶに悩む女性や虐待で苦しむ子供の相談に乗ってあげています。

神戸あさひ

この話ではヒーローポジのはずですが、あまり活躍できませんでした。感情のコントロールがうまくできないため、時々爆発します。あの重度の虐待家庭に育った割にまともなところが多いので、本来の資質は高いのではないかという気がします。

しょうこへの感情は、最初は信頼で、それが段々愛に変わっていきました。面倒を見てくれた五島刑事のことも、最終話になるころには尊敬しています（でもたぶん口には出さない）

松坂さとう

冒頭の方でしかでてきません。何を考えているのかよくわからなかったので、結果的に出番が減りました。前にも書きましたが、『平成ピストルショウ』のハートに似てるなと思ってます。でもハートと

違ってさとうは美人ってだけ恵まれてるような。芸能界にでも入ってたらよかったのかなあ。
しょうこちゃんを殺したのは悪手だったと思うのですよ。そういやハートも彼を止めようとした友達を撃ち殺したんだっけ……。

神戸しお
さとう以上にキャラの把握ができなかったので、ほぼ空気です。さとうとしおが戻ってくる展開も候補としてはあったのですが、しおのその後を想像したら、アンドリュースの小説にでてくるファーンとか、映画『ＭＯＮＳＴＥＲ』でクリスティーナ・リッチが演じていたシェルビーとかしか頭に浮かばなかったのでボツになりました。

神戸ゆうな
何度も書いてますが、十一歳の息子を暴力亭主のサンドバッグにするんじゃない。子供ふたり連れててもシェルター等には入れます。
夫殺しを二時間サスペンス手法でなしにしました。裁判のエピを二本も入れるのはきつい。
あの最終話を見ていて彼女関連ですごく混乱したんですけど、私だけ？　薬入れてたけど、具体的に何？　そもそも致死量とかわかるんですかね？　それと、あの状況で変死した場合、ほぼ確実に息子のあさひが疑われると思うんだけど、そこはスルーなの？　自首したのかと思ったら、外をふらふら歩いてるし、わけがわかりません。

松坂みつ
名前は捏造。いや、刑事さんたちが彼女を呼ぶのに「さとうの叔母」じゃ変ですから。みつの名前は糖蜜が由来です。
この人も何を考えているのかわからなかったので苦労しました。なんか余罪がありそうですが、よくわからなかったので出しませんでした。

深谷そら

１２０８号室の住人。こちらも名前を捏造。そらの名前の由来は空っぽから。なお、この創作では彼の仕事は合法なものにしてあります。いや、違法な仕事してるとヤバい人がくるんじゃないかと思って……。

火事で彼が描いたさとうの絵は焼けてしまいました。あれが残っていたら、刑事さんたちはもっと事情を早く理解できていたかも。

三ツ星太陽

出すと面倒なので出しませんでした。火事のドサクサにまぎれてマンションから逃亡。その後は絶賛引きこもり中。

北埋川大地

面倒だったので出さなかった人その二。そもそもしょうこちゃんが主役の話なので、接点ゼロのこの人を出すと収拾がつかなくなる。

宮崎すみれ

パスポートを貸した件が親にバレてこっぴどく叱られ、バイトもやめさせられたという設定になっています。というか、パスポートを人に貸したらダメでしょう。

しょうこに対して微妙な態度を取っていたのは嫉妬していたせいです。絶対嫉妬してたと思う。

五島ミカ

作品のために考えたオリキャラです。しょうことあさひだけだと、どう考えても不幸ルートまっしぐらなので、ハッピーエンドに導くためのキャラです。ドがつく真面目。

実家には引退した刑事である父と、専業主婦である母がいます。妹が一人いますが結婚して家を出ています。

あさひと養子縁組をする展開も考えましたが、そこまでオリキャラにやらせるのはどうかと思ったのでボツになりました。彼が未成年の間は後見人をしています。

葉山アオイ

作品のために考えたオリキャラその二。真面目なのかふざけているのかノリが判断しにくい人。まあだいたい真面目にやってるつもりです、本人は。

当初、オリキャラは三人いたのですが、五島と葉山の二人だけで目的が可能になったため、三人目はボツになりました。